太宰府市の文化財　第25集

筑前国分尼寺跡 Ⅲ

— 第4・8・9・13・17次調査 —

1995

太宰府市教育委員会

筑前国分尼寺跡III　正誤表

ページ	行	誤	正
43	4	椀ｃ（26）	椀ｃ（25）
43	6	坏ｄ（25）	坏ｄ（26）

太宰府市の文化財　第25集

筑前国分尼寺跡　Ⅲ

— 第4・8・9・13・17次調査 —

1995

太宰府市教育委員会

序

筑前国分尼寺跡は、古くから水田の土留めに用いられた礎石の存在からその位置が推測されていましたが、太宰府市教育委員会が進めております発掘調査の成果から、これまで考えられていた位置よりも少し西に存在していたことが知られるようになってまいりました。

本書はその最も中心部分に近いと思われる位置の調査を集めたもので、南門と思われる建物跡や尼寺に関連するとみられる様々な遺構を報告しております。本書によって筑前国分尼寺の位置や規模、存続時期などがはじめて紹介されるわけで、記念碑的な書物とも言えます。

また寺の遺構と重複して発見されました弥生時代中期から後期の遺構群は、太宰府のみならず北部九州の弥生時代研究に貴重な資料を提供できるものと考えております。

ささやかな一書ではありますが、文化財調査の理解の一助としてご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び整理作業に参加されました多くの方々、また本書作成に関しましていろいろとご教示いただきました諸先生方に感謝申し上げる次第であります。

平成7年3月
太宰府市教育委員会
教育長　長野治己

例　　言

1．本書は筑前国分尼寺跡に関係する埋蔵文化財の調査を集めて編集したものである。該当する調査次数は、第4・8・9・13・17次の5地点である

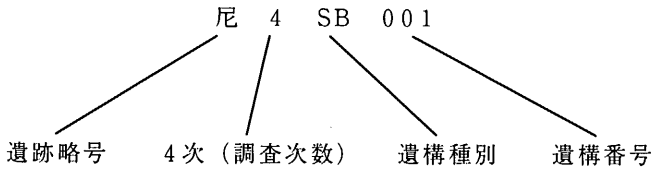
2．本書に掲載した発掘調査の原因、期間、面積、担当者などは各調査の報告部分に記載している。

3．本書に掲載した調査年度は、昭和62年度から平成4年度にかけて随時行なったものであるため、関係年度の調査組織、参加者は第Ⅱ章にまとめた。整理作業は各調査終了後随時実施してきたが、平成5・6年度に主として行なった。

4．遺構の実測及び写真撮影は、各調査担当者及び当市技師のほか瀬口愼司、藤城泰、出口直美、井上信正、河田聡が行なった。調査地区全景の空中写真は、㈲空中写真稲富、㈲空中写真企画が行なった。また第8次、第13次調査の遺構配置全体図については、写真測量による機械素図作成をアジア航測株式会社福岡支店に委託した。

5．遺構の実測には、国土調査法第Ⅱ座標系を利用した。したがって本書に示される方位は特に注記のないかぎりG.N.(座標北)を示し、本文中に記される遺構の角度もG.N.を基準とした振れを表記した。

6．本書に掲載される遺構番号は以下の要領で理解される。



7．遺物の実測は、第4・8・13次を境一美、井上信正、第9次を城戸康利、第17次を河田聡が主として行ない、狭川真一が必要部分を補足した。また、遺物の写真撮影は、フォトハウスおか（代表　岡紀久夫）に委託したほか、一部狭川が撮影した。

8．本書に掲載した図版の浄書は、鶴味加代子、境、河田、狭川が行なった。

8．出土した金属製品の応急処置は、狭川麻子、山中幸子が担当した。

9．本書の執筆分担は目次に記載した。なお、編集は狭川真一が担当した。

目　　次

Ⅰ．周辺の遺跡と調査……（狭　川　真　一）　1

Ⅱ．調査組織……（　　〃　　）　4

Ⅲ．調査の概要

（1）第4次調査……（　　〃　　）　7

（2）第8次調査……（　　〃　　）17

（3）第9次調査……（城　戸　康　利）26

（4）第13次調査……（狭　川　真　一）31

（5）第17次調査……（　　〃　　）53

Ⅳ．礎石の移転……（中　島　恒次郎）76

Ⅴ．総括

筑前国分尼寺跡と近世の史料……（狭　川　真　一）78

筑前国分尼寺跡の復原……（　　〃　　）82

Ⅰ．周辺の遺跡とその概要

筑前国分尼寺跡は、太宰府市大字国分字松本一帯に展開する。明確な遺跡が現存し、現在もその法統を伝える国分寺の西約400ｍの地点にあたる。この筑前国分寺は、有名な聖武天皇の国分寺建立の詔以降に建設されたもので、大城山から西へ派生する扇状地の付け根にある低台地上に存在している。これまでの調査によって主要伽藍と外郭線の築地や溝、付属施設の一部が検出されている。伽藍は中央に金堂を置き、そこから派生する回廊は中門に取り付き、その囲まれた空間の東寄りに七重塔を配するものと考えられている。金堂の背後には講堂が確認されている。外郭線は南面で築地、東面で溝が確認されており、その規模は一辺約190ｍに及ぶものと推定されている。成立は８世紀代に遡るが塔は10世紀頃に廃絶しており、寺域も中世には荒廃して墳墓や井戸などの遺構が進出してくる。

国分寺の東側台地の北斜面には国分瓦窯跡がある。国分寺の瓦を供給したと考えられるもので史跡に指定されている。またこの南側には近年調査された辻遺跡がある。調査区の南端で奈良時代の東西方向の道路遺構と推定されるものが検出され、国分寺の前を通過して、さらに東に延長される道路の存在が想定される。奈良・平安時代の遺構を形成する堆積土中には縄文時代の土器片を包含し、近辺で該期の遺構が発見されることが期待される。

国分寺の南側では、過去に御笠軍団印が発見された地点があり、その周辺ではこれまで10件の調査がなされている。近年の調査では、７世紀中頃以降の竪穴住居跡がいくつか発見されており、大宰府成立直前の様相が解明されつつある。

国分寺から南西方向に展開する平地には千足町遺跡がある。ここでは南北方向に規制された奈良時代の掘立柱建物が数棟検出されたほか、古墳時代の竪穴住居跡や初期須恵器が発見されている。これらの遺構は同遺跡のなかでも高地に位置しているが、低地では弥生時代の集落が確認されている。埋蔵環境が低湿地であるため、木製品の残存状況が良好で、柱痕や礎板といった部材が発見されている。また筑前国分尼寺周辺の松本遺跡では弥生時代中期の集落とその外側に穿たれた濠とみられる遺構が確認され、さらに集落側から濠に向かって張り出し部が存在していた。その張り出し部は通路として利用されていたことも判明した。このように、国分尼寺跡周辺については、前回の報告および千足遺跡、松本遺跡の成果でこの付近に弥生時代中期から後期の集落が展開していることがわかってきた。具体的な様相はこれからの調査に委ねなければならないが、太宰府市における弥生時代の解明に重要な地点であることは確実になった。

さらに、筑前国分尼寺跡第16次調査では古墳時代の竪穴住居跡が確認されており、以前報告した第６次調査で古墳時代の遺構を報告したこともあり、この付近に同時期の集落が展開していた可能性もでてきている。また、当初筑前国分尼寺が存在していたと考えられていたエリアの調査（第14次調査）では、南北方向に規制されたと考えられる掘立柱建物が確認されている。

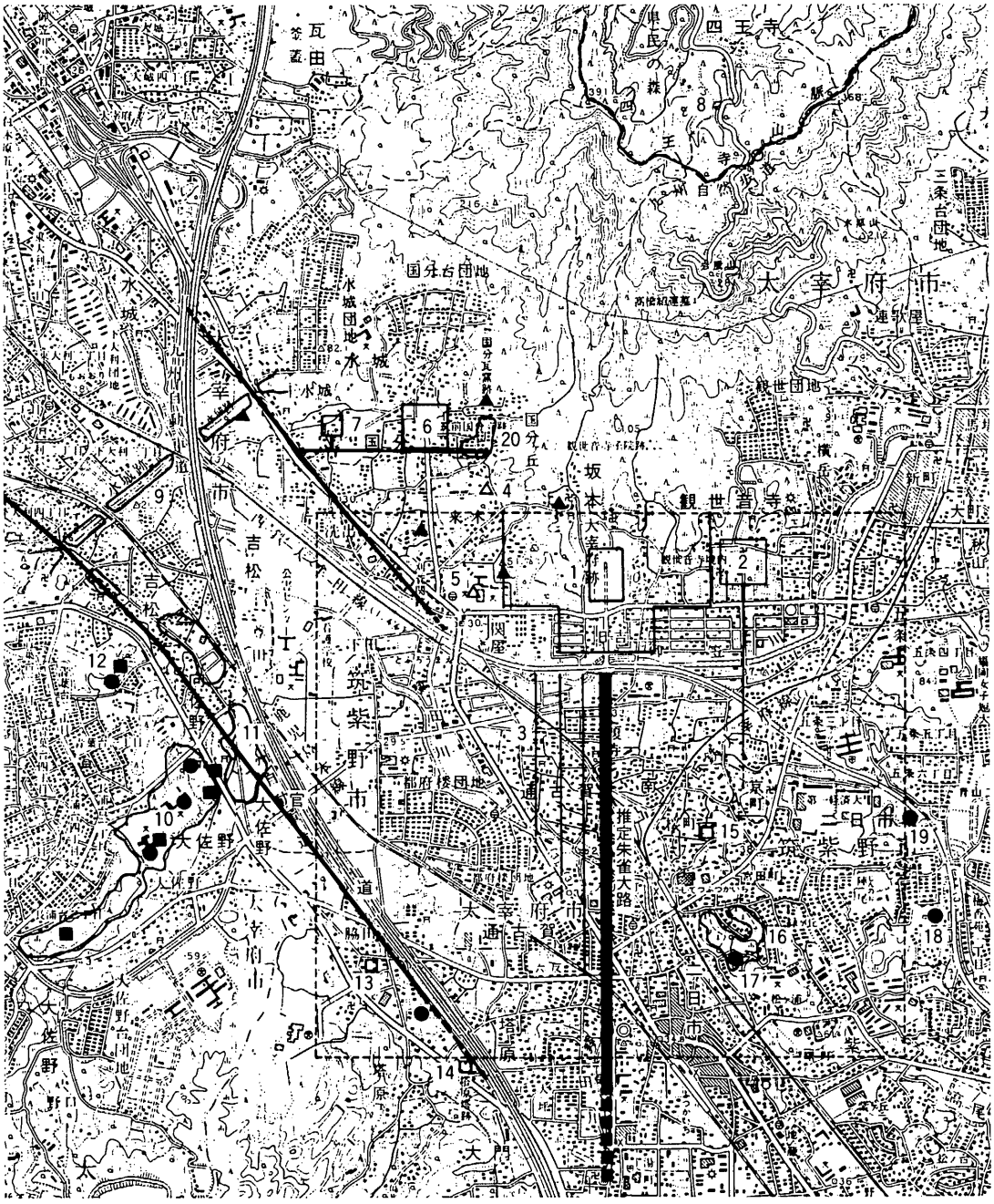


Fig. 1　太宰府市周辺遺跡分布図（1/30000、主として奈良時代の遺跡に限った）

1．大宰府跡　2．観世音寺　3．大宰府条坊跡（破線は推定域）　4．御笠軍団推定地　5．遠賀軍団推定地
6．筑前国分寺跡　7．筑前国分尼寺跡　8．大野城跡　9．水城跡　10．宮ノ本遺跡　11．前田遺跡
12．篠振遺跡　13．杉塚廃寺　14．塔原廃寺　15．般若寺跡　16．峯畑遺跡　17．峯火葬墓　18．米噛火葬墓
19．結ケ浦火葬墓　20．辻遺跡　　●墳墓　■須恵器窯　▲瓦窯

先の千足町遺跡の建物群と併せて、国分寺、国分尼寺の中間付近に位置する建物群の性格を追及して行く必要がでてきている。

このように国分寺、国分尼寺のあった地域には、近年の調査で様々な遺跡が展開していることが判明しつつある。小規模な開発の多い太宰府市ではこれらの遺跡を大規模で面的なかたちで調査することは困難であるが、虫食い的な調査ながら、その積み上げが大きな成果に結びつくことは確実であり、国分二寺だけでなく周辺部分も含めて今後も詳細な調査を進めてゆく必要があろう。しかし、これらの遺跡が廃絶してのち大半の土地が水田や畑として利用され、幸いにも地下に遺構が保存されてきたが、現代に入り高度経済成長の中、農地はつぎつぎに宅地となりつつある。とくに田中－松本線道路拡幅事業はこれに拍車をかけるものと思われ、この地域から水田の姿が消える日もそう遠くないようである。

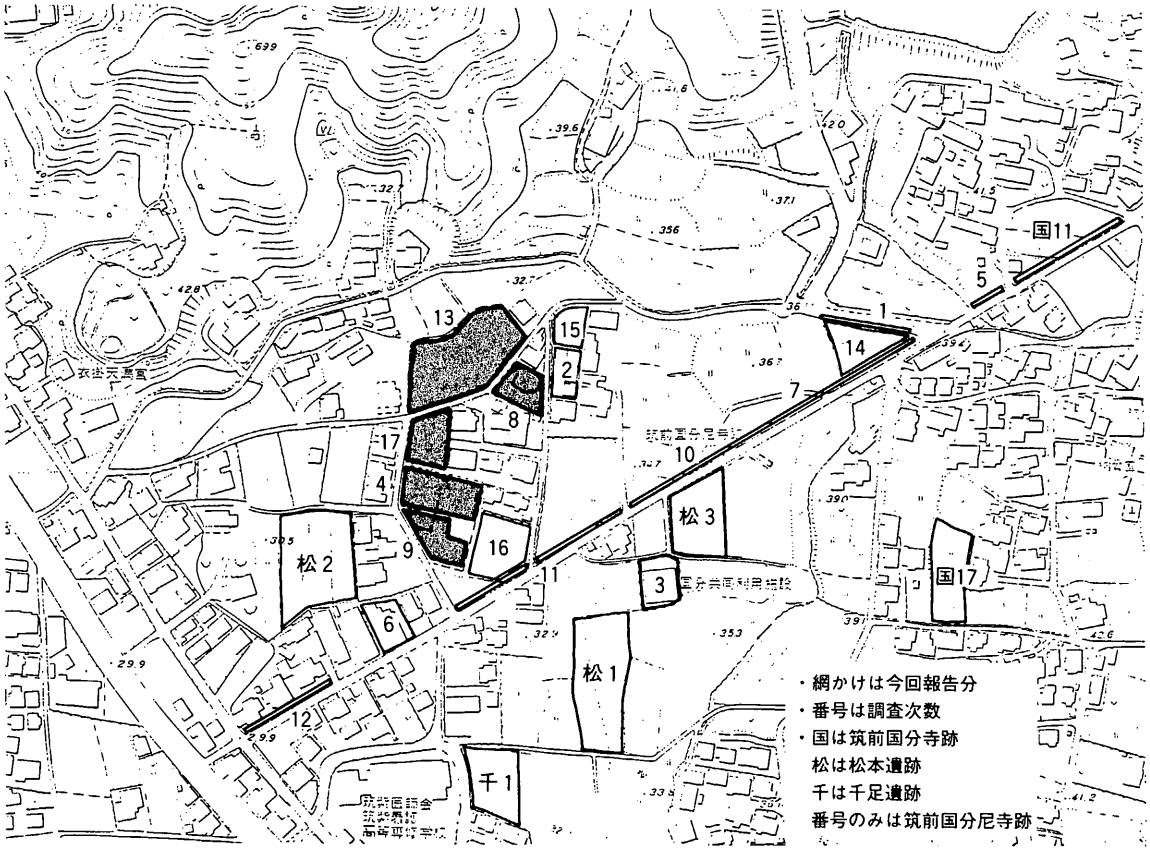


Fig. 2　筑前国分尼寺跡周辺の調査地点(1:4000)

Ⅱ. 調 査 組 織

本書に掲載した調査の実施年度が各々異なっているため、調査地点別（関係年度別）にここに紹介しておく。なお、整理については平成6年度分を記載した。（ゴチックは調査担当者）

第4次調査（昭和62年度）

総括	教 育 長	藤 寿人
庶務	社会教育課長	花田勝彦
	文化財係長	鬼木冨士夫
	主 事	岡部大治　白水伸司
調査	技 師	山本信夫　**狭川真一**　緒方俊輔
	技師(嘱託)	山村信榮（62年9月～）

第8・9次調査（平成元年度）

総括	教 育 長	藤 壽人（～元年6月）
		長野治己（元年8月～）
庶務	教育部長	西山義則
	社会教育課長	関岡 勉
	文化財係長	鬼木冨士夫
	主 事	岡部大治　白水伸司
調査	技 師	山本信夫　**狭川真一**　**城戸康利**
		緒方俊輔　山村信榮
	技師(嘱託)	中島恒次郎　狭川麻子（2年1月～）

第13次調査（平成2年度）

総括	教 育 長	長野治己
庶務	教育部長	西山義則
	社会教育課長	関岡 勉
	文化財係長	鬼木冨士夫
	主任主事	岡部大治
	主 事	白水伸司
調査	主任技師	山本信夫　**狭川真一**　城戸康利（2年7月～）
	技 師	城戸康利(～2年6月)　緒方俊輔　山村信榮
	技師(嘱託)	中島恒次郎　狭川麻子

第17次調査（平成4年度）

総括	教育長	長野治己			
庶務	教育部長	中川シゲ子			
	文化課長	佐藤恭宏			
	埋蔵文化財係長	高田克二			
	文化振興係長	大田重信			
	主任主事	岡部大治	川谷　豊		
調査	主任技師	山本信夫	**狭川真一**	城戸康利	
		緒方俊輔	山村信榮（4年7月～）		
	技師	山村信榮（～4年6月）	中島恒次郎	塩地潤一	
	技師（嘱託）	田中克子			

整理作業（平成6年度）

総括	教育長	長野治己			
庶務	教育部長	白木三男			
	文化課長	花田勝彦			
	文化財保護係長	高田克二			
	文化振興係長	大田重信			
	主任主事	岡部大治	川谷　豊		
	主事	今村江利子			
調査	技術主査	山本信夫			
	主任技師	狭川真一	城戸康利	山村信榮	
		中島恒次郎	重松麻里子		
	技師	井上信正			
	技師（嘱託）	田中克子（～6年5月）	下川可容子		

（発掘調査参加者）

藤原重登	三上智久	田中平助	斉藤徳美	八柳健之助	竹林義之	萩尾　昇
萩尾泰祐	田部澄博	中島タキノ	中島タカ子	中島ウメノ	中島ハジメ	松島順子
萩尾万寿子	白水いせの	田原智恵子	高原改良子	白木ハルミ	徳永モモエ	平島優子
江島スミエ	山下澤子	渡辺ひとみ	花園美千子	楠林静香	吉田正子	萩尾カネ子
萩尾須磨子	田中テル子	戸渡洋美	大迫フミ子	近藤秋枝	南美智子	城戸邦典
渡辺太郎	服部大介	水村泰介	森　俊之	古賀恵一	水谷哲郎	太田ヤス子

大田敬子　古川民子　古川ヨシ子　宮原ハナエ　宮原圭子　高鍋キミヨ　山本洋子
柴田ツキエ　大田八重子　中溝洋子　境美佐子　高木宗代　鬼木寅雄　今崎良男
梶山サツキ　納富明美　岩男澄子　中嶋幸子　米原峰子　宮田恵子　川原田美千代
岸　邦子　中嶋さなみ　田口理恵　白石　正　長尾吉男　牛島イワヨ　白水スエ子
田中勝江　原田経子　渡辺律子　斉藤サヨ子　田村さち子　田口美智子　内田文子
出口直美　河田　聡
瀬口慎司（現滋賀県文化財保護協会）　藤城　泰（現東大阪市文化財協会）

（整理作業参加者）
山中幸子　中村房子　野田美子　林美知子　武堂年子　小西晴代　古賀里恵子
横山美津子　原野正子　吉田勝子　久保喜代香　酒井三保子　安芸朋江　菊武淑子
河田　聡　境　一美　鶴味加代子

発掘調査を実施するにあたって次の地権者の方々の御協力、御理解があった。記して感謝申し上げます。（五十音順、敬称略）
松嶋貞士　萩尾輿孝

発掘調査及び報告書作成にあたって次の方々からご教示、資料提供を受けた。記して感謝申し上げます。（五十音順、敬称略）
網田龍生　小田富士雄　木村明敏　沢村　仁　坪井清足　福田信夫
横田賢次郎

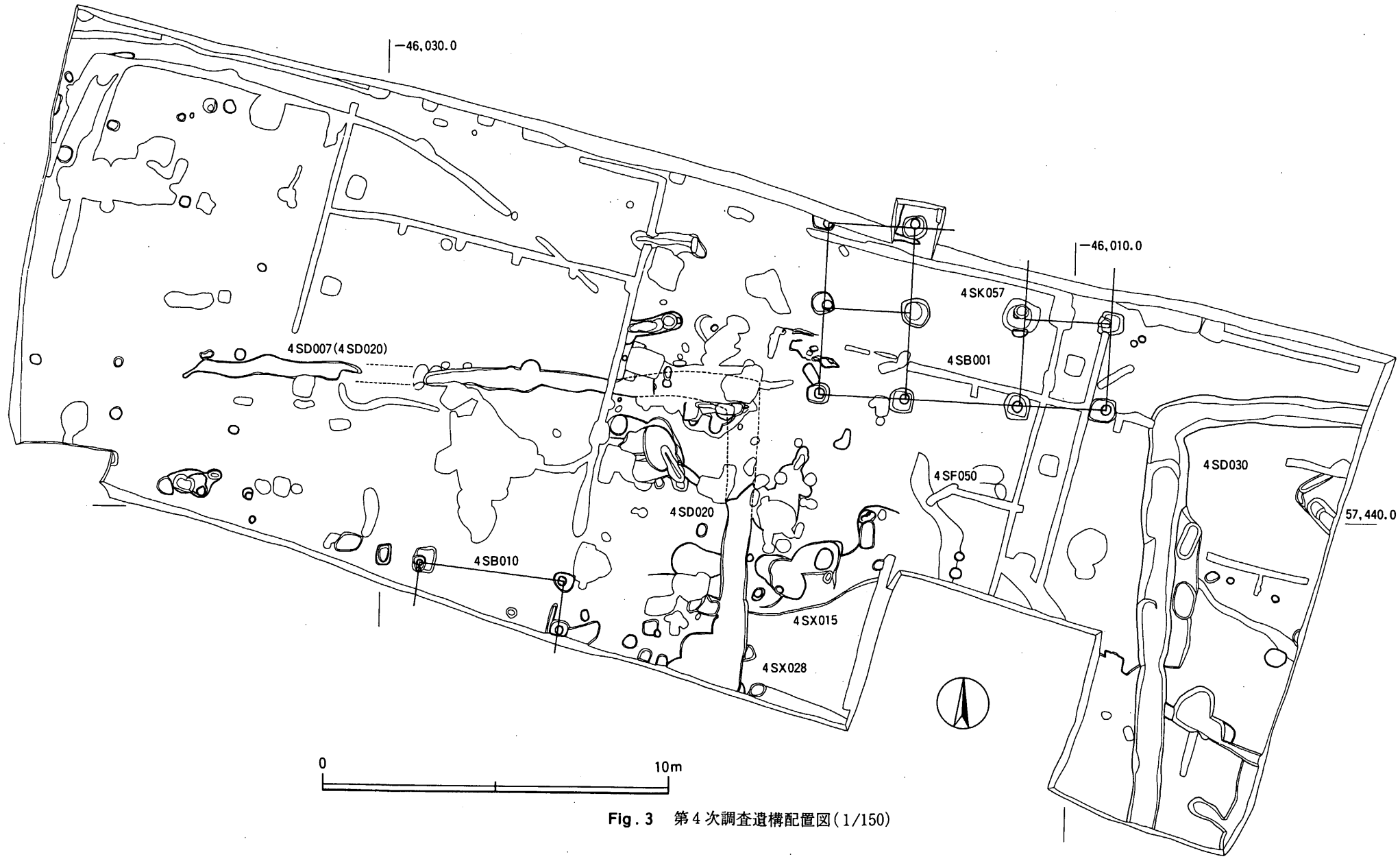


Fig. 3　第4次調査遺構配置図(1/150)

Ⅲ. 調 査 の 概 要

（1）第4次調査

調査地は、太宰府市大字国分字松本449－1に所在する。宅地分譲目的での申請に伴い、事前に発掘調査を実施した。調査は昭和63年3月1日から3月24日まで実施し、開発対象面積は969㎡（第9次調査区域を含む）、調査面積は366㎡である。調査は狭川真一が担当した。

1．層位など

調査直前の状況は既に水田を真砂土で盛り土した状況であったため、遺構面に到達するまでにはかなりの深さがあったが、旧水田面の直下は灰色砂質土（床土）層、黄灰色土層となり黄色粘土の地山に達する。調査地の南端で一部弥生時代の包含層とみられる黒灰色土層を認める部分もある。遺構の深さから見て、遺構面は過去に大きく削平を受けていると考えられる。

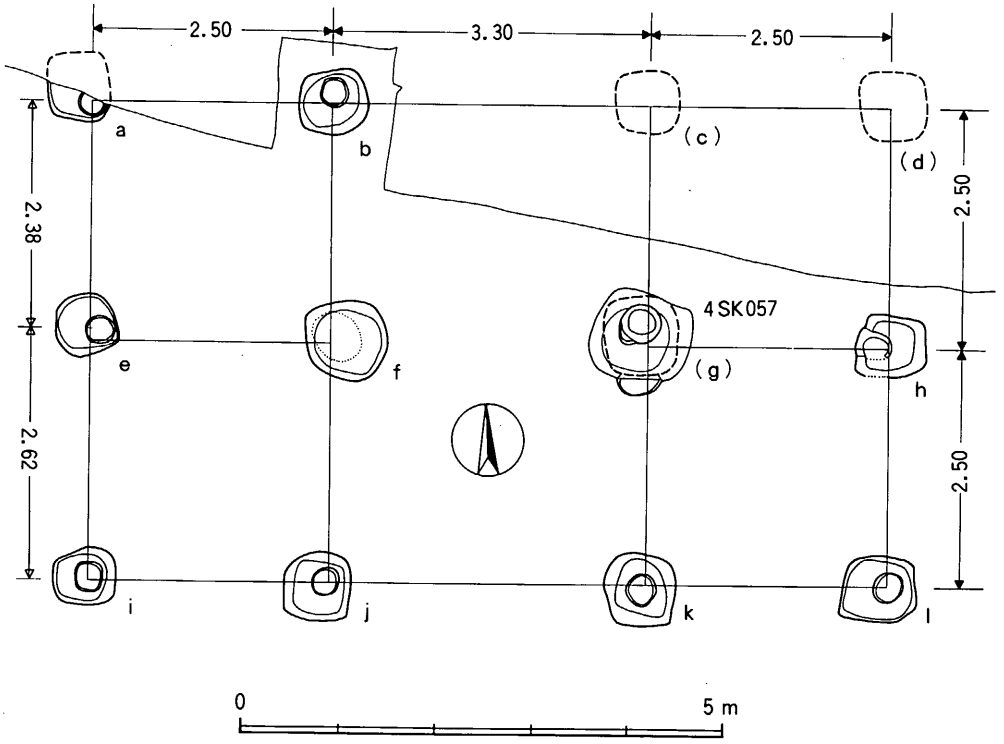


Fig. 4　4SB001実測図（1/80）

2．遺構

遺構の主体は奈良時代のものと弥生時代のものに大別できるが、奈良時代では掘立柱建物2棟、溝2条、その他土壙やピットを確認した。弥生時代では土壙やピットを確認したに留まる。

掘立柱建物

4SB001（Fig.4・5・7、Pla.2～5、別表2） 東西3間（8.30m）、南北2間（5.00m）で総柱形式の建物である。一部発掘調査区域外に延びているが、この規模で完結するものと考えられる。柱間は東西列が西から2.50m、3.30m、2.50mと中央間がやや広く、南北列は2.50m等間（西側柱列の柱痕跡の心々距離は、北から2.38m、2.62m）である。柱掘り形はやや不正形な隅丸方形を呈しており、一辺はおよそ0.65～0.80mである。柱痕跡を確認できたものから推定して柱の直径はおよそ0.25～0.3m、主軸の振れは約N-2°-Eである（別表2参照）。建物中央に2基ある柱掘り形のうち西側のもの(f)は、底部の一部を0.60m×0.57m、深さ0.18mに掘り窪め、そこに拳大から人頭大の石が詰まった状況で検出された。石の直下は僅かに灰白色粘土が堆積しており、その上面（石下面）に木質を確認した。木質は腐食が著しく形状や規模は確認できていないが、その検出状況から、下段の掘り形内に何らかのものを埋納したのち木で蓋をし、さらに石で覆ったものと考えられる。また石上面は断面V字状に黄色粘土が詰まっており、柱を抜き取ったあと埋め戻したことが窺える。これに隣接する中央東側の柱掘り形（g）は、土壙4SK057によって切られ、本来の形状を知れないまでに破壊されているが、土壙の底部が2段になっており、西側の柱掘り形fと底部付近では近似する状況を呈することから、当初はこの2本の柱掘り形のみ2段掘りされていたことが窺える（Fig.5）。

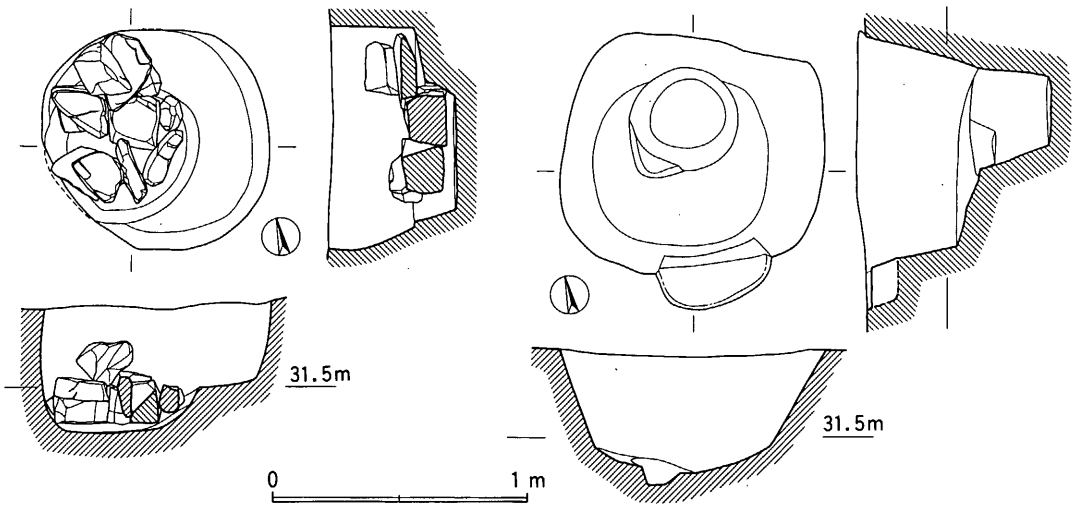


Fig.5 4SB001柱掘り形f(左)と4SK057実測図(1/30)

この建物の柱掘り形は地山に直接穿たれており、掘り込み地業や版築などによる基壇の形成は認められなかった。ただし、遺構面が著しく削平を受けていると考えられるため、当初から存在しなかったかどうかは不明である。

また出土遺物は、柱痕から無文塼片や縄目叩きの瓦片が出土した程度である。

4SB010（Fig.6・7、Pla.5、別表2） 東西1間、南北1間以上の建物と一応解釈しておく。東

西の柱間は4.16ｍと広いが、南北のものは1.47ｍと狭い。掘り形は一辺約0.6～0.75ｍ、深さ0.25～0.45ｍ程度の不整隅丸長方形を呈するもので、柱痕跡から柱の直径は0.2～0.25ｍであることが知られる。なお、東西柱の方位はN-96°20′-Eで4SB001の振れとは異なったものである。

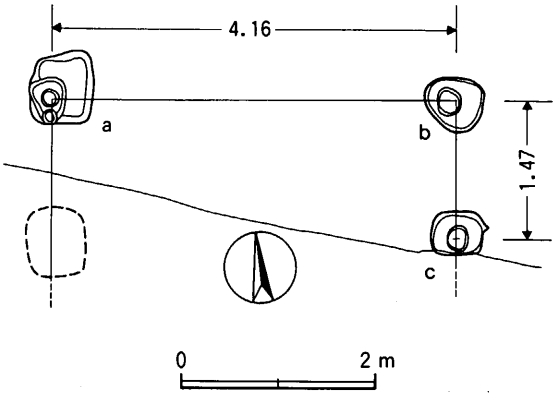


Fig. 6　4SB010実測図(1/80)

出土遺物は、掘り形内から口縁端部の折曲げがほとんど確認できない須恵器蓋の小片、鉱滓片、刀子とみられる鉄器小片、縄目叩き痕の認められる瓦片などが出土した。

溝

4SD007(別表2)　東西溝で極めて浅く、断続的に検出された。検出された最大長（途切れた部分を含む）は13.2ｍ、幅約0.4～0.7ｍ、深さ4～10cmと極めて浅い。埋土は淡灰色砂質土の単一層である。出土遺物は須恵器甕片、縄目叩き平瓦片、鉱滓片程度である。

4SD020(別表2)　南北溝で検出長5.5ｍ、幅0.7～0.9ｍ、深さ5～10cmを測る。埋土は暗黒褐色土で底部には淡灰色砂質土の堆積が若干ながら観察された。出土遺物は須恵器蓋3の小片、縄目叩きの平瓦片、鉱滓片である。なお4SD007と本溝は、次に解説する4SD030と対になる可能性が強く、本来は同一の溝であったのが後の削平によって寸断されたものと考えられる。したがって以下ではこの両溝を併せて4SD020と呼称する。

4SD030(別表2)　4SB001南東隅の柱から約1ｍ東側付近でほぼ直角に折れ曲がる。検出した溝の総延長は17.8ｍ、幅0.7～1.2ｍ、深さ6～17cmを測る。埋土は暗黒褐色土で底部には淡灰色砂質土の堆積が若干ながら観察された。一部溝幅の広くなるところがあるが他の遺構との切り合いによるものである。出土遺物には、須恵器蓋c3、皿aのほかヘラミガキのある土師器蓋、皿及び坏cの小片、縄目叩き痕の平瓦片がある。

道路遺構

4SF050(別表2)　南北方向の4SD020と030に挟まれた空間を道路と想定した。両溝の心々距離は12.3ｍ、路面の幅は11.4ｍ内外である。路面にあたる部分に整地などの舗装痕跡は認められなかった。

土壙

4SK057(Fig.5)　4SB001の中央東側の柱掘り形を切る土壙である(柱掘り形自体は残存していない)。長さ1.03ｍ、幅0.94ｍ、深さ0.76ｍで底部は僅かながら2段掘りになっている。4SB001

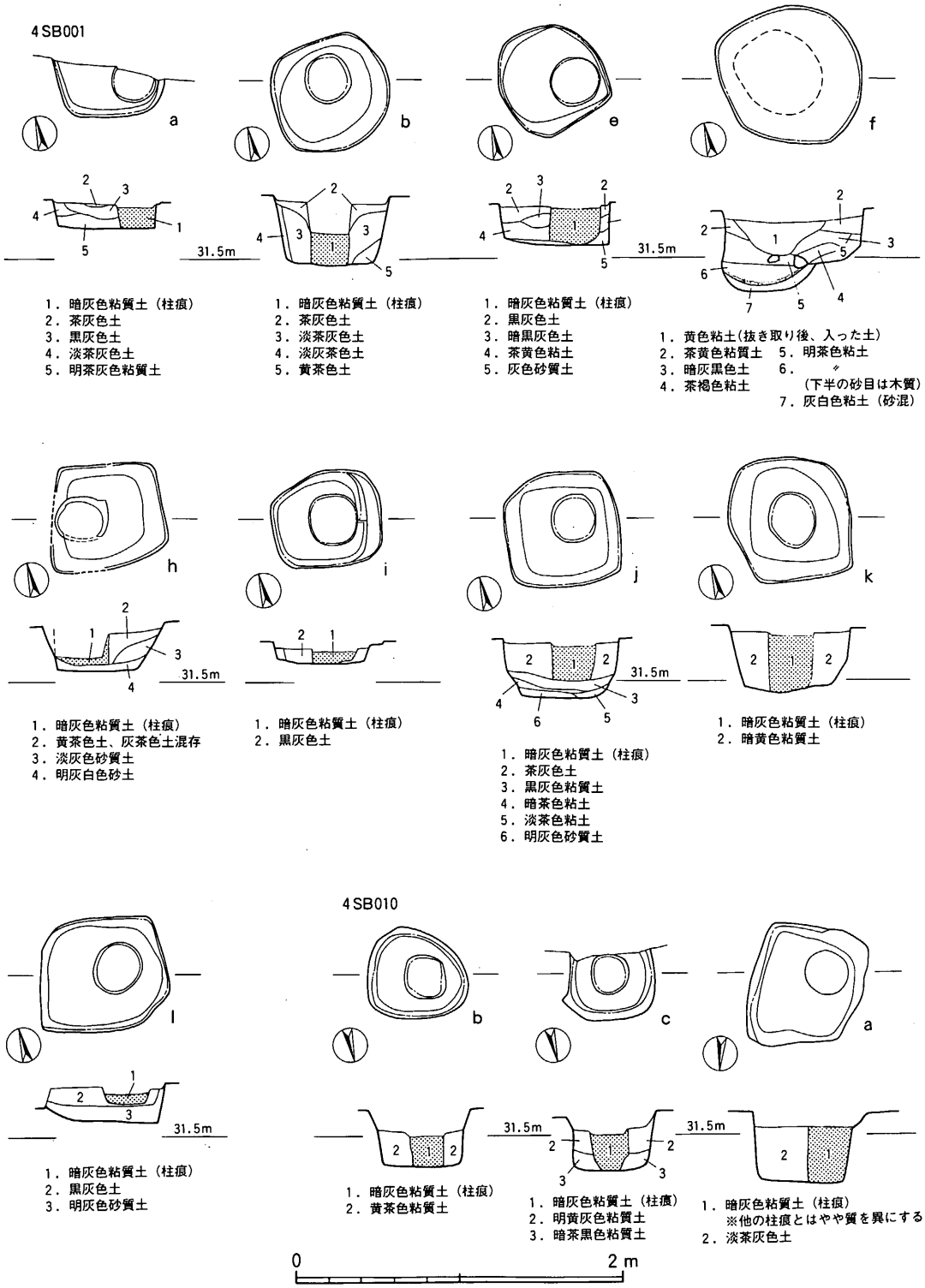


Fig. 7　4SB001·010　柱掘り形実測図及び土層観察図(1/40)

柱掘り形fの形状から、この土壙の底部付近は4SB001柱掘り形の形状を残す可能性が考えられる。出土遺物は瓦の小片を出土した程度である。

その他の遺構

4SX015 黒灰色粘土が埋没の主体をなす窪み状遺構である。遺構として報告しているが堆積層の一部が残存したものと考えたほうがよさそうである。埋土中から弥生土器片が若干出土した。なお、4SD020はこの遺構（層）の上から切り込む。

4SX028 4SD020に切られる直径約0.5mのピットである。弥生土器片が出土した。

これらのほか調査区内を縦横に走る溝および方形や略円形の穴は、現代のビニールハウスに伴うもので他の箇所もその折の撹乱とみられるものが多い。なお、現代の撹乱はFig.3において上端輪郭を細線で表現し、且つ下端輪郭を省くことにより、他の遺構と区別した。

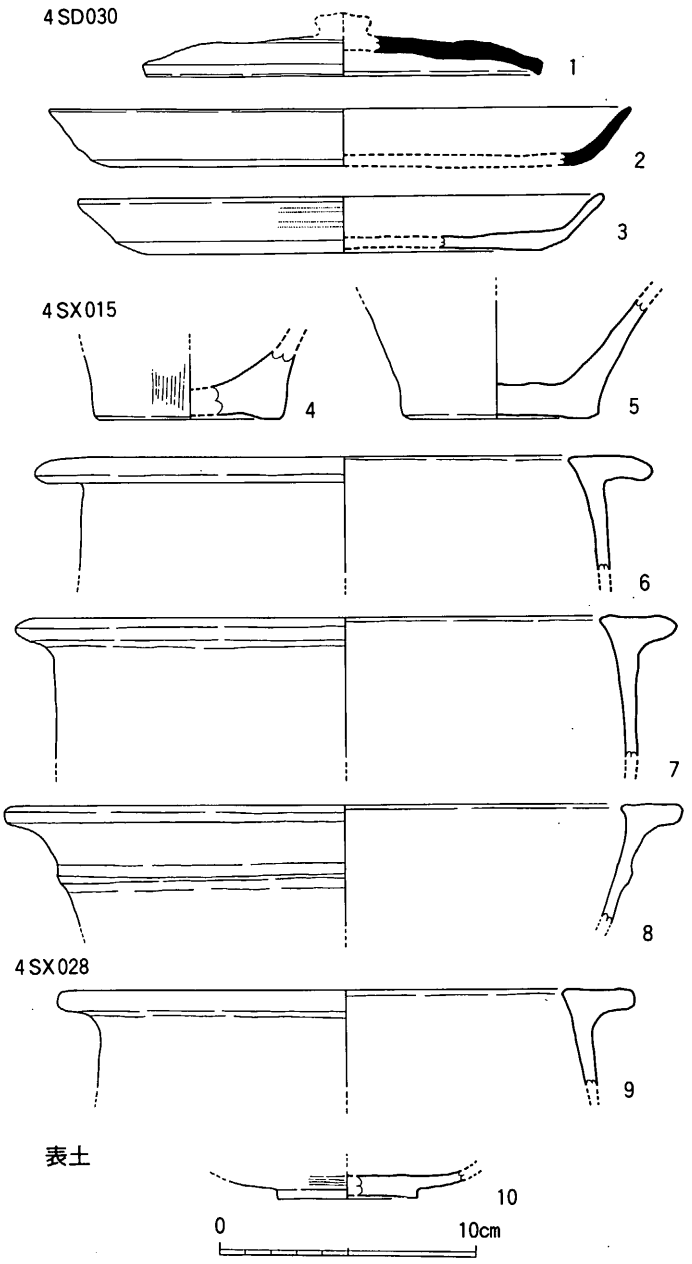
3．出土遺物

4SD030出土土器

(Fig.8、Pla.6)

須恵器

蓋c3(1) 口径15．5



Fig．8 第4次調査出土土器実測図(1/3)

cmを測る。口縁端部の断面形状は不明瞭な三角形を呈している。天井部はヘラ切り離しののち粗雑な面調整を行なっている程度である。

皿a(2) 口径22.8cm、高さ2.3cmを測る。底部は明らかでないが、ヘラ切りののち粗雑なナデとみられる。

土師器

皿a(3) 口径20.8cm、器高2.2cmを測る。底部を回転ヘラケズリし、内外面ともに回転ヘラミガキがわずかに観察される。

4SX015出土土器（Fig.8）

弥生土器

甕（4～8） 4・5は底部片で、表面の風化が激しく観察が困難な部分もあるが、外面をハケ目調整する。4は底径7.3cm、5は底径8.3cmである。6・7は口径24.4・26.2cmを測り、内面はナデ、外面は風化が激しく明らかではない。8は口径26.3cmで、口縁部下位に低い突帯を巡らす。

4SX028出土土器（Fig.8）

弥生土器

甕（9） 口径22.6cmを測る。

表土出土土器（Fig.8、Pla.6）

緑釉陶器

皿（10） 径5.5cmの円盤底は糸切りされる。硬質に焼成され、体部の内外面にはヘラミガキが施される。

その他の出土遺物

瓦類（Fig.9、Pla.6）

無文**塼**(1) 長さ19.8cm以上、幅18.0cm、厚さ6.7cmを測る。表面はナデ及びケズリによって仕上げられる。灰色砂質土出土。

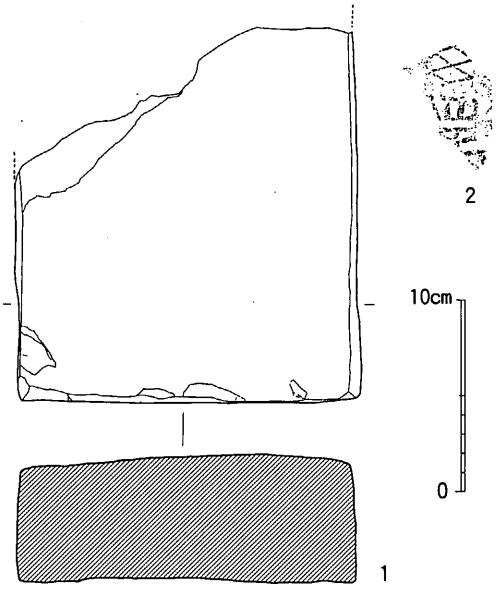


Fig.9 第4次調査出土瓦・塼(1/4)

文字瓦(2) 「四王」と記される。不定形な窪み状遺構4SX014から出土した。

石器（Fig.10、Pla.6）

石鏃(1) 安山岩製で、長さ2.4cm、幅2.2cm、厚さ0.65cm。抉りは浅めである。

石匙(2) 安山岩製で、長さ6.5cm、幅3.3cm、厚さ0.6cm。

石包丁(3) 緑泥片岩製で、現存長9.2cm、幅3.0cm、厚さ0.45cm。2箇所の穿孔部は、両側から回転具によって穿たれている。

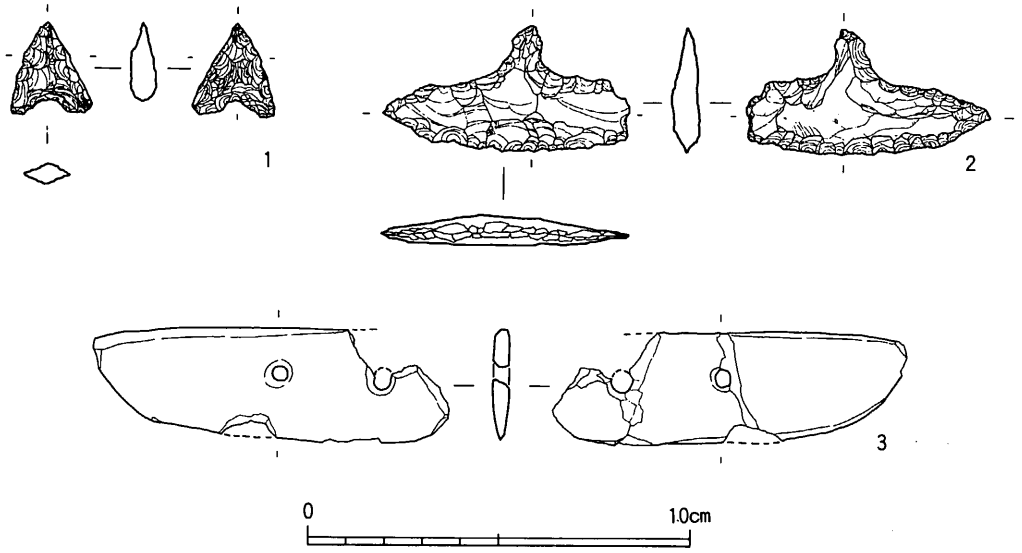


Fig.10 第4次調査出土石器実測図(1/2)

4．小結

弥生時代では特筆すべき遺構はないが、今回の調査で出土した遺物の大半が中期の所産であり、近辺に集落の存在が予想される。

奈良時代では、建物と溝がある。まず個別に整理し、後に両者の関連を見ておくこととする。

掘立柱建物 4SB001は小量の出土土器ながら8世紀後半に建てられたものと考えられる。総柱形式で且つ柱間中央間が広く造られる構造は、門的機能を持ったものと解釈される。また建物中央の2つの柱掘り形内には何らかの埋納物を納めていたことが窺え、且つ建物廃絶段階でこの2つの柱のみ抜き取っていることは、この建物にとって重要な意味をなす柱であったと考えられる。またこうした行為は建物の鎮壇に関係すると考えられるが、詳細を明らかにするには至っていない。今後の資料増加に期待したい。また廃絶は4SK057が参考になるが、残念ながら出土遺物に恵まれず年代は特定できなかった。

溝 2条の溝はいずれもほぼ直角に折れ曲がり、南北に方位を取った場合は両者が見事に並行して調査区外に延びている。埋土の状況や出土遺物の年代などにも近似性が認められ、2本で一対になるものと理解したい。この両溝の心心間の距離は12.3mを測るもので、その挟まれた空間は4SF050道路遺構と考えて差し支えなかろう。溝の埋土中から出土した土器は、8世紀後半の年代を示している。

両者の関係 掘立柱建物4SB001と溝4SD020・030（道路遺構4SF050）はその年代が近似しているだけでなく、次のような企画性が認められる点で、同時に設計され建設されたものと理

解できる。

1．建物及び溝の方位が近似していること。

2．建物の南端柱列の東西延長線が、東西の方位を採った両溝の心にほぼ合致していること。

3．建物南北中軸線と4SF050の南北中心線がほぼ一致すること。

4．溝のコーナーと建物の南東（西）隅との距離が、ほぼ同じ位置にくること（ただし西側は推定）。

などである。これらのことから、4SB001は「門」と捉えられ、4SF050はその門に通じる道と理解できる。両溝はこの場合道路の側溝と理解されるが、東西方向に折れ曲がった時の役割として敷地の外郭線的機能を考えておきたい。

筑前国分尼寺跡と早くから考えられていた地点には、寺院の形跡が認められなかった事※から、今回の地点に国分尼寺の本体を求められる可能性が濃厚である。詳細に付いては終章で述べるが、4SB001は筑前国分尼寺の「南門」、そして4SF050はそれに続く参道、東西に方位を取った両溝は寺の南外郭線である可能性が強い。

なお4SB010については現状でその性格を特定することは困難である。方位は門や溝と異なるものの年代は同時期あるいは寺院存続期間中の可能性が強く、同時に並存していたものと理解できる。寺院に直接関わるものでは無いかも知れないが、この柱掘り形及び4SD020から鉱滓が出土していることは注意しておく必要があろう。

※第7次、第10次調査で、従来考えられていた筑前国分尼寺跡の範囲のほぼ中心部分を調査している。城戸康利ほか『筑前国分尼寺跡Ⅱ』（太宰府市の文化財　第16集）1991　太宰府市教育委員会。

（2）第8次調査

調査地は、太宰府市大字国分字松本455－1に所在する。宅地分譲に伴う事前調査で、調査は平成元年8月21日から9月27日まで実施した。開発対象面積は370㎡、調査面積は325㎡で、調査は狭川真一が担当したが、一部山村信榮の協力を得た。

1．層位など

調査前の状況は宅地として機能していたため、その盛り土がかなりの厚さで堆積していた。それを除去すると旧耕作面が現われ、その直下に茶灰色土（包含層）があり、それを除去する

Fig.11　第8次調査遺構配置図

と淡茶色砂質土の地山が現われる。遺構はすべて地山から切り込んでいた。

2．遺構

調査区の中央に南北溝を検出したほか、掘立柱柵列2条、甕棺墓1基をはじめ土壙やピット群を検出した。遺構は南北の溝を境に東側では希薄であるが、西側ではかなり密な状況を呈している。

柵列

8SA005（Fig.12・13、Pla.8・9、別表3） 調査区西隅で検出された南北方向の柵列と思われるもので、2間分検出した。南北両側延長部分は調査区外に延びていると考えられる。柱間は約2.5m等間で、柱掘り形は一辺0.7～0.9mの隅丸方形を呈しており、掘り形bで辛うじて確認できた柱痕から、柱径は約0.25～0.4m程度とみられる。距離が短くまた柱痕をすべてで確認できていないため精度は良くないが、柵列の方位はおよそN-2°-E前後にとれよう。出土遺物は掘り形内から黒色土器椀、土師器坏のほか縄目叩きの瓦片も出土している。

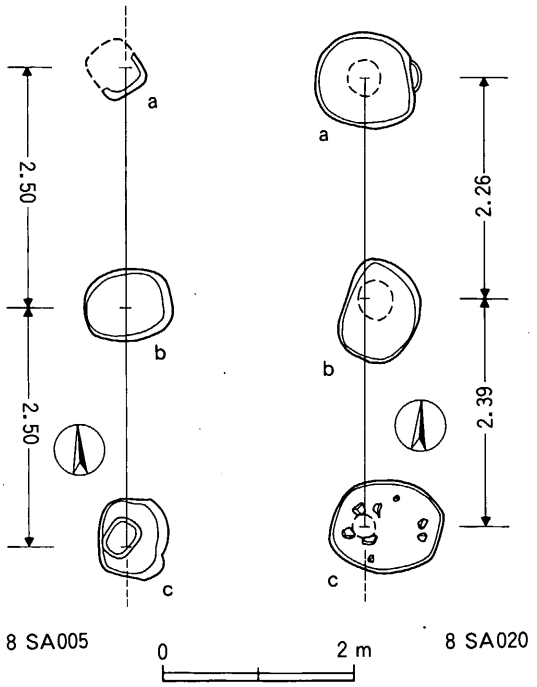


Fig.12 8 SA005・020実測図（1/80）

8SA020（Fig.12・13、Pla.8・9、別表3） 調査区の南端で2間分を確認した。南側はさらに延長されるものと思われる。柱間は北から2.26m、2.39mで、柱掘り形は長さ1.0～1.2mの略円形あるいは不整円形を呈している。柱掘り形内には柱痕が検出され、柱径は0.25～0.35m程度とみられる。また方位はおよそN-3°-Wで他の建物や溝とは異なり、北で西に振っている。なお、掘り形cでは柱の根巻き石が認められたが、掘り形内には別に小石が認められ、礎石の根石の可能性も考えられる。この柱穴については、掘立柱ののち礎石に変更した可能性を含めて考える必要があろう。

溝

8SD015（別表3） 検出長11.5m、幅0.6～0.9m、深さ約0.2mを測るもので、溝底には凹凸が目立つ。南側にはさらに延長される。埋土は灰茶色土の単一層で方位はおよそN-1°20′-Eである。後述する8SD025よりも新しい。8SA020付近（調査区境に近い位置）の埋土中には瓦が集中して検出された。

8SD025（Pla.9、別表3） 検出長20.0m、幅0.5～1.0m、深さ約0.3mを測るもので、南北

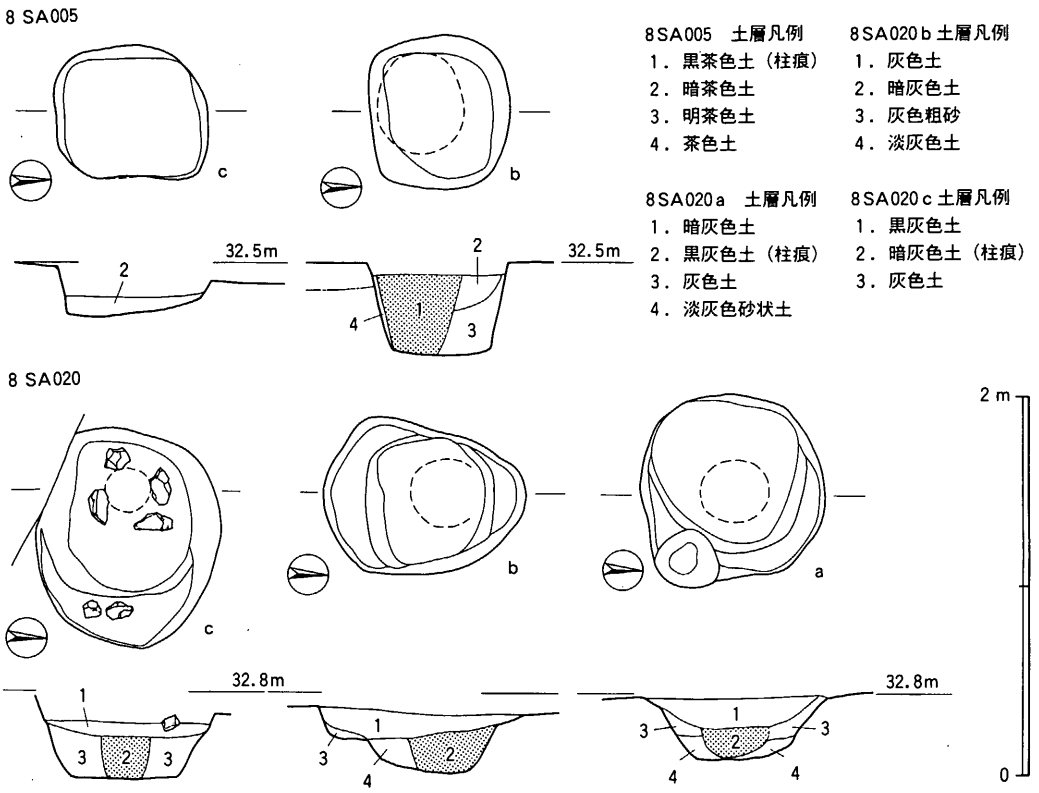


Fig.13 8 SA005·020柱掘り方実測図、土層観察図(1/40)

ともさらに延長される。調査区の中程で蛇行している。方位は北から屈曲部(X＝57,501.5付近)までがN-6°-E、次の屈曲部(X＝57,495.25付近)までがN-12° 30′-E、残る南半部はN-1°10′-Eである。埋土は茶褐色土の単一層で、8SD015に一部を切られている。

土壙

8SK035 長さ5.2m、幅1.5m、深さ約0.3mを測る不整形な土壙である。埋土は大きく3層に別れ、上から黒茶色土層、黒色土層、茶色土層の順に堆積する。埋土中から須恵器片及び縄目叩きの瓦片が小量出土した。

甕棺墓

8ST001 (Fig.14、Pla.7) 調査区西隅で検出された合わせ口式の小型棺（所謂小児棺）である。上棺の大半と下棺の約半分を削平によって失っているが、なんとか全体像は理解できる。甕棺墓の掘り形は長さ1.1m、幅0.72mで当初の挿入部と思われる南西側がやや広く幅約0.8mである。棺の埋置角度は約20°である。棺内からは骨を含めて出土品は発見されなかった。

その他の遺構

8SX063 径0.5m程度のピットで、砥石が出土した。

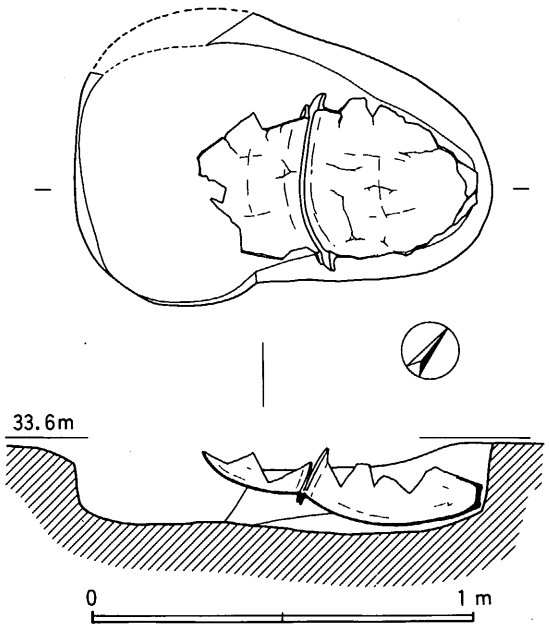


Fig.14　8ST001実測図(1/20)

8SX073　径0.5m程度の弥生時代のピットで石包丁が出土した。

3．出土遺物

8SA005出土土器（Fig.15、Pla.10）

土師器

坏a（1）　口径12.4cm、器高4.1cmで、底部はヘラ切りである。暗黄灰色を呈している。掘り形内黒茶色土（柱痕）中から出土しており廃絶の時期の一端が窺える。

黒色土器

椀　（2）　小片ながら口径15.2cm程度に復元される。内外面ともヘラミガキを行なうが、炭素の吸着は内面のみに行なう。A類

8SA020出土土器（Fig.15）

製塩土器

壷　（3）　口径7.2cm程度に復元される。外面には指圧の痕跡が認められる。

8SD025出土土器（Fig.15）

土師器

坏d（4）　体部下半から底部にかけて回転ヘラケズリされ、内外面ともに回転ヘラミガキが施される。

皿a（5）　口径17.2cm、器高2.3cmを測る。底部は回転ヘラケズリされ、体部の内外面には共に回転ヘラミガキが認められる。

8ST001出土土器（Fig.16、Pla.10）

弥生土器

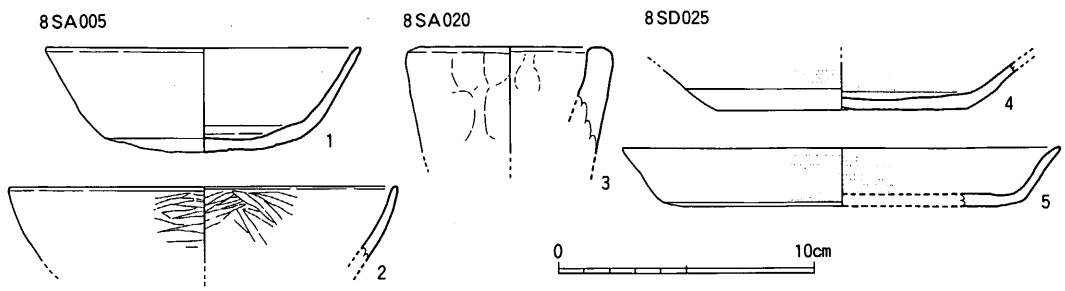


Fig.15　第8次調査　各遺構出土土器実測図(1/3)

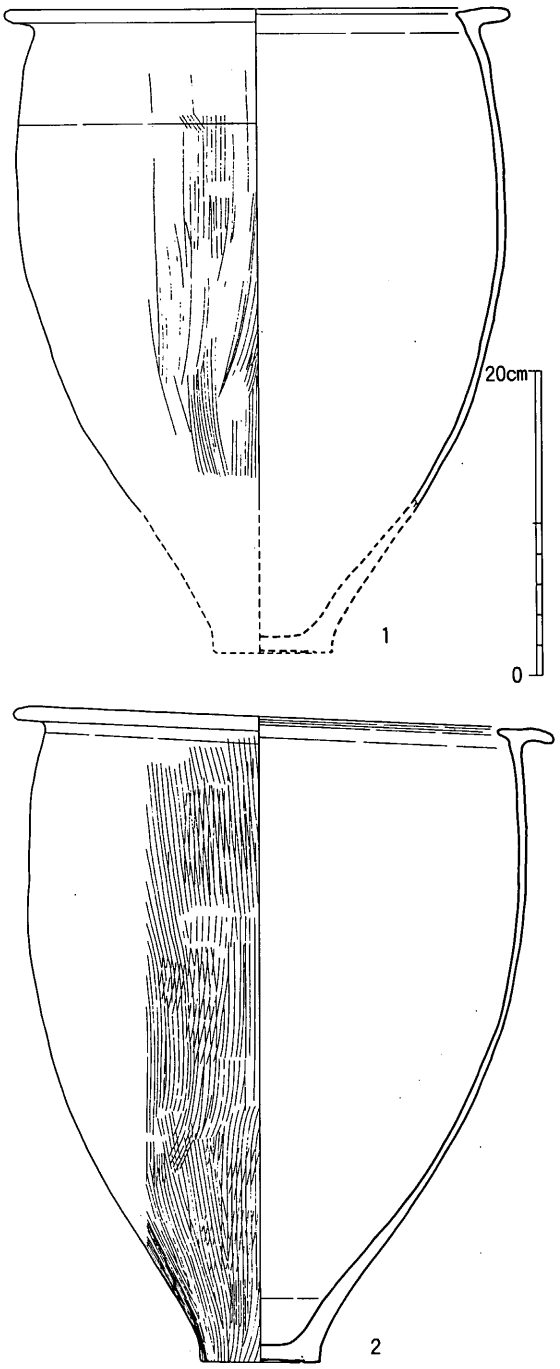


Fig.16　8 ST001出土土器実測図(1/5)

甕(1・2)　1は上棺に用いられた甕で、口径33.3cmを測る。外面は縦方向のハケ目、内面はナデである。口縁部付近はヨコナデされる。2は下棺に用いられた甕で、口径35.8cm、器高42.4cm、底部径7.8cmを測る。外面は縦方向のハケ目、内面はナデである。口縁部付近はヨコナデされる。底部の周囲は未調整とみられるが中央部分は簡単なナデが認められる。

表土出土土器(Fig.17、Pla.10)

須恵器

硯(1)　先端部分を失っているが、2本の貼り付けによる脚を持つ風字硯と見られる。現存する幅は12.3cm、長さは12.2cmを測る。側縁部分は折り返しによって立ち上がりを作るが、末端部分は特に遮るものを設けていない。底部は平行叩き痕跡を残しているが他の面はナデによって仕上げられる。陸部は使用による研磨が著しい。底部には脚と脚の間に2条の沈線がある。8SD025直上の表土中から出土した。

土製品

坩堝(2)　口径12.4cmに復元される。砂粒を多量に含むスサ入りの胎土で、焼成はややあまい。内面は指圧により仕上げられる。口縁部の外面に一条の沈線が巡り、段状を呈している。

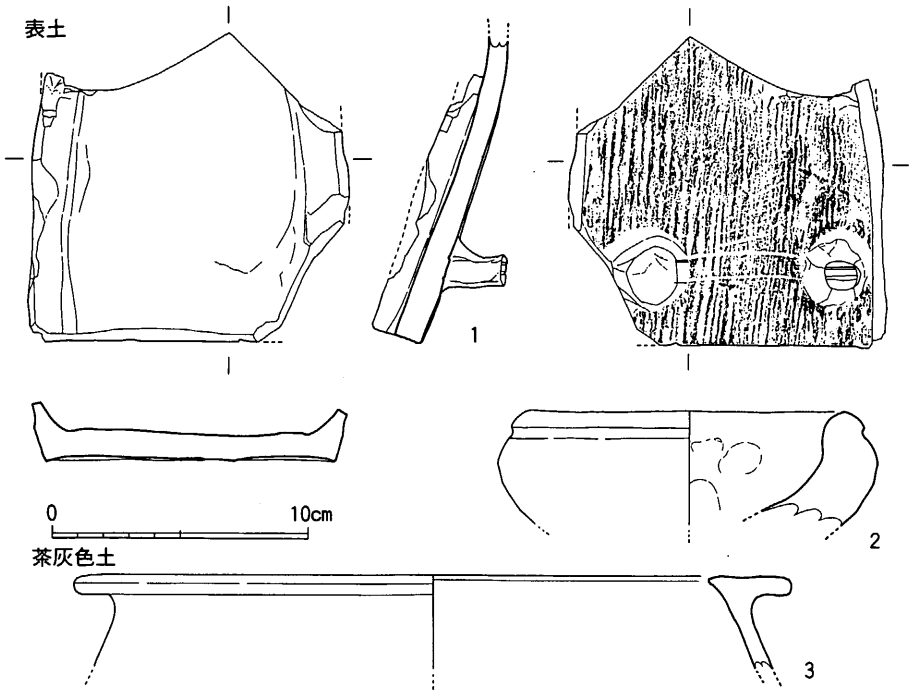


Fig.17 第8次調査 各層出土土器実測図(1/3)

茶灰色土層出土土器 (Fig.17)

弥生土器

甕(3) 口径28.4cmを測る。内面はナデである。

その他の出土遺物

瓦類 (Fig.18)

軒平瓦(1) 均整唐草文の中心飾りの部分である。外区下半には突鋸歯文がみられる。上半は平瓦の剥離に伴って失われている。顎部は横方向のケズリ。表土出土。

平瓦(2～4) 2は縄目叩きのもので、桶巻作りである。端部は丁寧に篦で削られている。3は筑前国分尼寺では数が少ない格子叩きの例である。他に数例あるが絶体数は極めて少ない。4は平瓦の凸面の一部に波状文を篦書きしたものである。すべて表土出土。

石器 (Fig.19)

石鏃(1) 長さ2.0cm、幅2.0cm、厚さ0.35cmの黒耀石製である。形状は低い二等辺三角形を呈し、抉りはない。8SA020柱掘り形出土。

石包丁(2・3) 2は長さ4.5cm、幅3.1cm、厚さ0.5cmの泥岩製である。8SX073出土。3は左

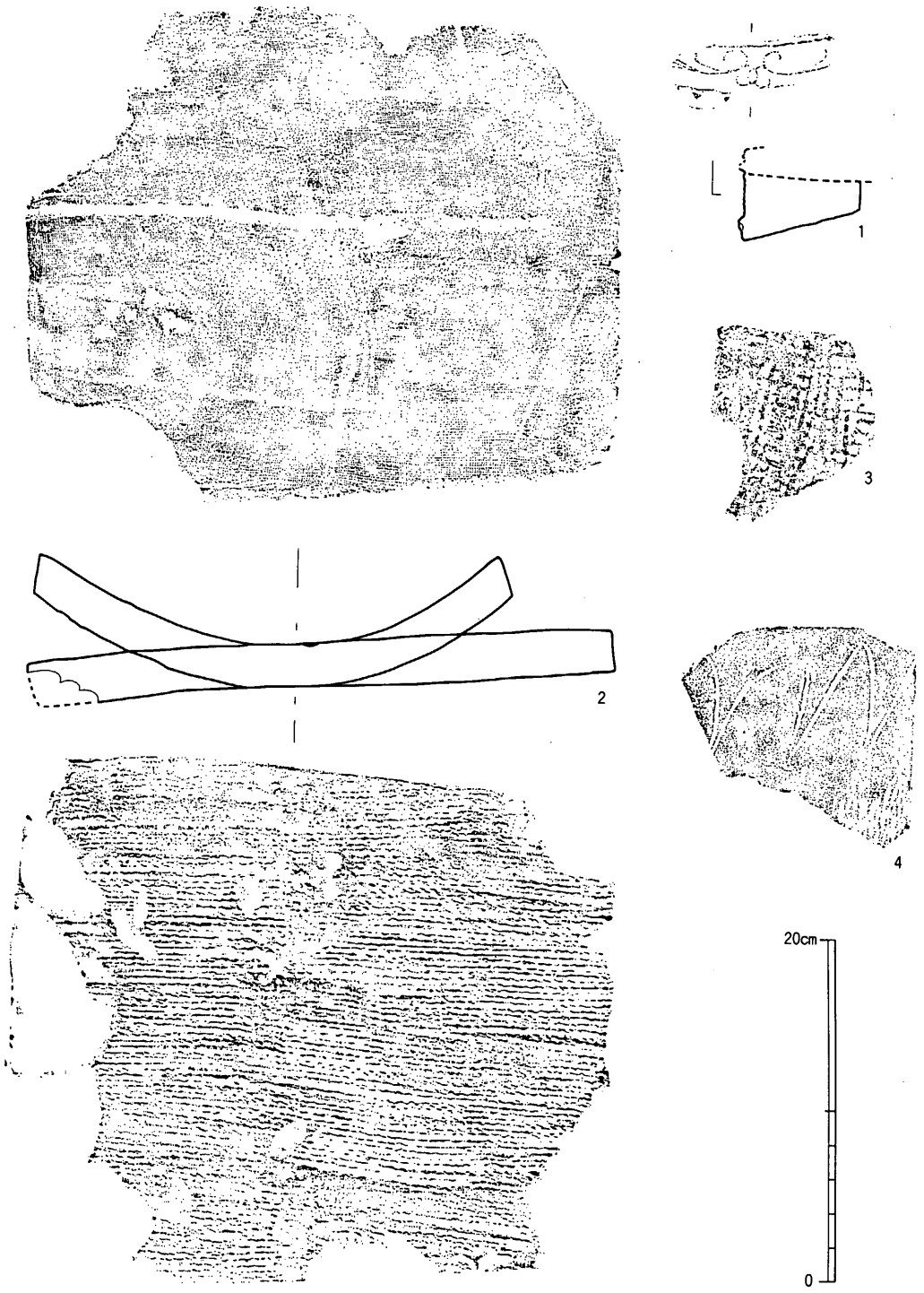


Fig.18 第8次調査出土瓦類実測図及び拓影(1/4)

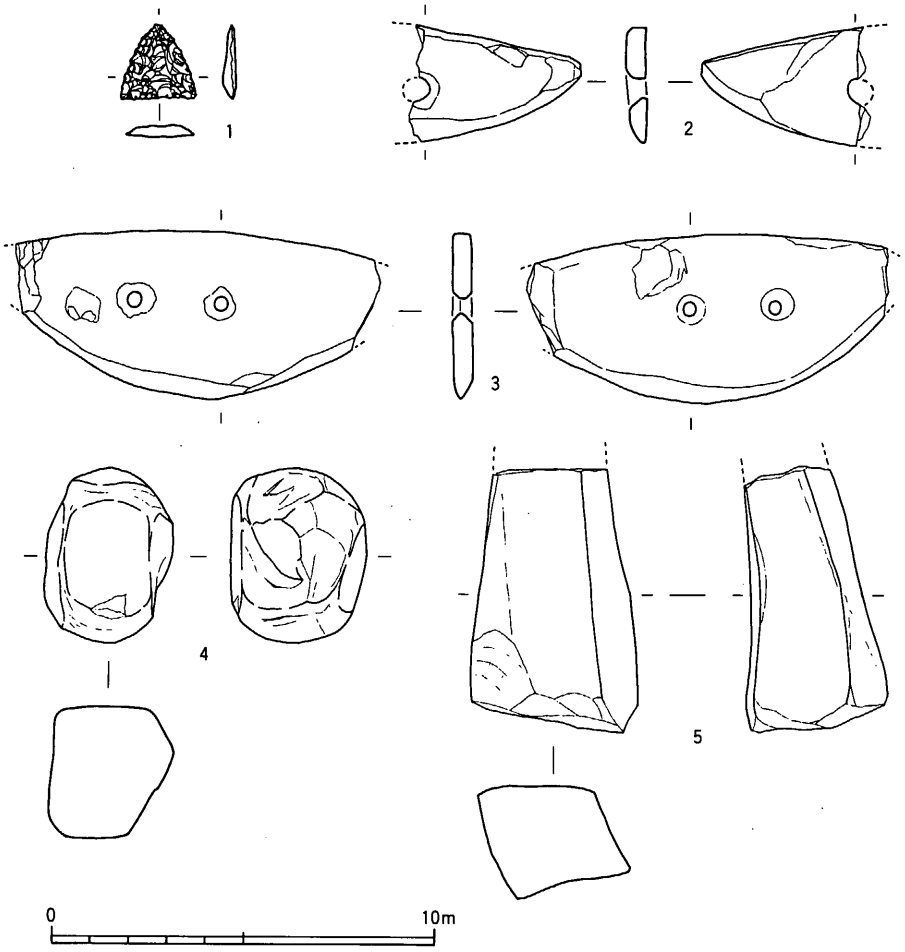


Fig.19　第8次調査出土石器実測図(1/2)

右の端部を失う。現存長9.5cm、幅4.4cm、厚さ0.5cmで、穿孔は両側から回転具を用いて行われる。穿孔の心々間は2.25cmを測る。輝緑凝灰岩製。茶灰色土層出土。

砥石(4・5)

4は長さ4.7cm、幅3.1cm、厚さ3.5cmの砂岩製で、四側面ともに使用痕がみられるが、上下面は球面状に加工される程度で使用されていない。茶灰色土層出土。5は上面を欠失するが、下面は自然面のままで使用痕はない。他の四面はすべて使用されているが、うち2面は使用面の中央がわずかに窪んでいる。現存長7.0cm、最大幅4.4cm、厚さ3.0cmの砂岩製である。8SX063出土。

4．小結

ここでは、各遺構を個別にまとめておきたい。なお建物や溝の位置関係は、終章において検討するのでここでは省略する。

8SA005　掘り形埋土中から出土した土師器坏は、大宰府の編年でⅦ～Ⅷ期とみられ、9世紀中頃から後半に考えられている。この遺物の出土状況はこの柵列の廃絶の一端を示しているといえよう。黒色土器椀も同時期前後に考えられるものである。

8SA020 この遺構の東側にある溝8SD015の瓦出土状況は、この遺構が（部分的かもしれないが）瓦葺であった可能性を示している。このことは柱掘り形cが礎石を据えたものである可能性と対応しているようである。つまり8SD025を掘り替えて8SD015を造る際に、8SA020南端（この部分から別の建物になる可能性も考えられる）以南を礎石建ちにして、8SA020を付けたしたと考えるのである。方位の異なりは建て増しによることも考えられる。また8SD025に瓦がほとんどなく、8SD015に集中するのもその事を物語るものではなかろうか。今後の南隣接地の調査に期待したい。なお年代は製塩土器がその一端を示しており、8世紀以降のものである。

8SD025・015 8SD025は南北に調査区を貫通しており、その東側と西側では遺構の密度が明らかに異なっていることから、第4次調査で検出した4SD030に関連する可能性が考えられる。つまり国分尼寺の東側外郭線として捉えられる可能性が指摘できるのである。埋土中から出土する遺物は8世紀後半に位置づけられ、溝存続時期の一端が窺える。この溝が埋没したのちにその位置を僅かに西（約0.75m）へ寄せて8SD015が掘削されている。この溝は調査区中程で止っており、8SA020所用と推定される瓦で一部が埋まっているところから、8SA020を強く意識して作られた可能性が考えられる。またこの視点で8SD025をみると、8SD015の切れるあたりで溝が蛇行しそこから南側ではみぞが直進しており、この蛇行の意味も8SA020と関連付けて考える必要があると思われる。

甕棺墓8ST001 今回の調査区内には甕棺と同時期の顕著な遺構は検出されていないが、調査区の最も隅部での検出であり、現状ではこの甕棺が単独で存在していたという確証は得られていない。甕棺の存在意義については周辺部分の調査が待たれるところである。ちなみに甕棺墓は弥生時代中期後半の所産とみられる。

（3）第9次調査

調査地は、太宰府市大字国分字松本449-1に所在し、4次調査地の南隣接地である。住宅建築に先立つ事前調査として実施した。発掘調査は平成元年9月28日から11月11日まで行なった。開発対象面積は500㎡、調査面積は280㎡である。調査は城戸康利が担当した。

1．層位

当該地は、水田を埋立てビニールハウスによる畑として使用されていた。また調査区の北東には4m角程の貯水槽の抜き跡があり、遺構は破壊されていた。約1mの客土･旧耕土･床土を除

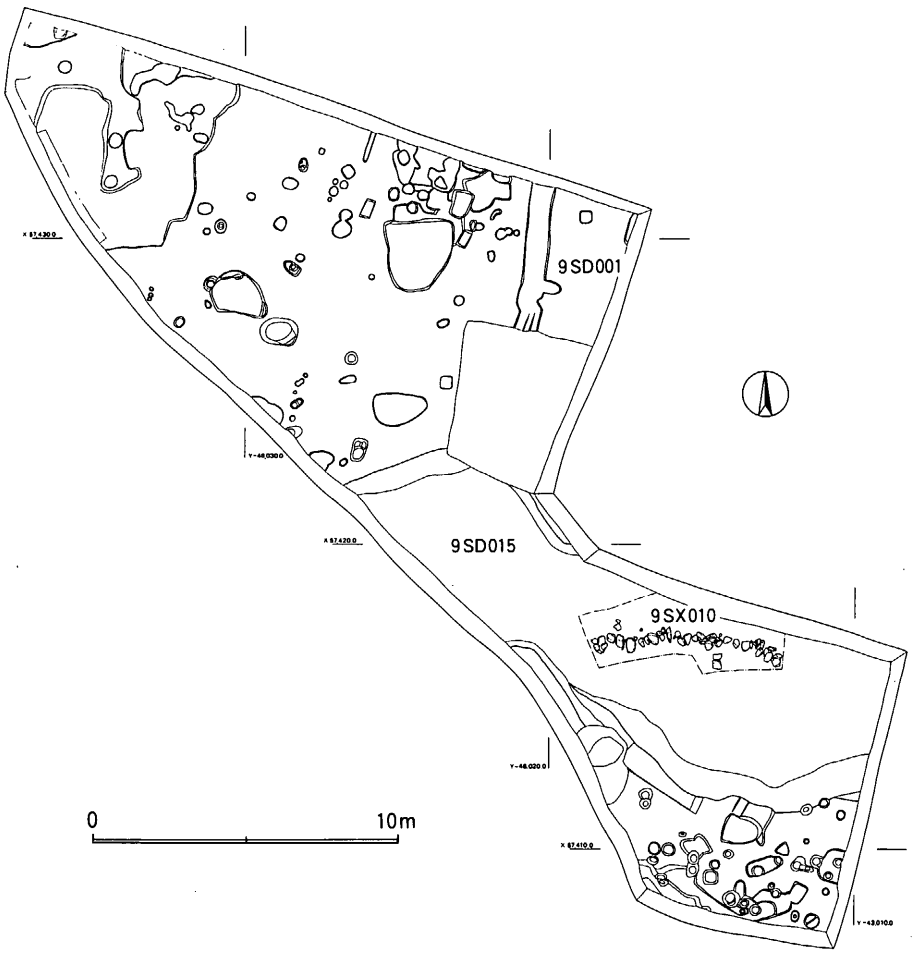


Fig.20　第9次調査遺構配置図(1/250)

去すると黄茶色土層となり、その直下が黄色粘質土の地山にあたる。調査区北端には弥生時代遺物を含む黒灰色土の溜まり状のものがあり包含層と考えられる。4次調査と同様に、遺構面は大きな削平を受けていると考えられる。

2．遺構

遺構は奈良時代・弥生時代のものを主体とし、溝・流路・土壙・ピット・石列を検出した。特に調査区南端部で弥生時代の遺構の密度が高い。(Pla.11)

溝・流路

9SD001 南北溝でごく浅い。幅約0.8m、深さ約0.1m、検出長約4.8mである。埋土は灰色砂質土の単一層で、硬くしまっていた。出土遺物は縄目叩き瓦片、砂岩質擦り石(?)、弥生土器片である。なお本溝は、位置、規模、埋土から4SD020の南の続きと考えられる。奈良時代のものと考えられる。

9SD015 調査区南を流れる自然流路もしくは氾濫跡である。幅7m以上、深さ0.8～1m程である。方向は調査区が狭いために正確には判明しないが、ほぼ東から西へ流れていると考えられる。埋土は下層から上層に向けて円礫混じりの灰色砂層から暗灰色粘質土層に変化している。出土遺物は、古代を中心とした須恵器、土師器、陶器、瓦類と弥生土器、石器であり、上層から下層まで任意に出土している。最上層（暗灰色土）出土の陶器片が最新遺物であり、平安時代のものと考えられる。

石列

9SX010 9SD015の埋没後に設けられた石列である。30～40cm程の円礫をかなり雑に、ほぼ東西に一列に並べている。レベルは東から西へ約0.3m低くなっている。出土遺物は須恵器蓋3、坏片、甕片、縄目叩き平瓦、弥生土器片、黒曜石剥片である。いずれも下層の9SD015に属するものと思われる。本石列の時期、性格は不明である。

3．出土遺物

9SD015出土土器（Fig.21、Pla.12、別表1）

出土土器は須恵器坏a、坏c、蓋3、蓋c、長頸壷、短頸壷、鉄鉢、高坏、甕、土師器坏、カマド、縄目叩き瓦、無文塼、陶器甕（?）、弥生土器甕、支脚である。これらの土器はほとんどが細片であり、図示できるものは以下のものだけである。

須恵器

蓋3(1・2) 1は口径12.4cm、2は14.4cmに復原される。1は口縁部を引き出したような断面三角形に、2は折り曲げたような断面三角形につくる。残存部分の調整は1・2ともにヨコナデである。

蓋4(3) 復原口径14.6cmを測る。口縁端部は天井部から直線的に延びそのまま終わる。内面やや内側に工具により凹線様の段を巡らす。内外共にナデ調整である。

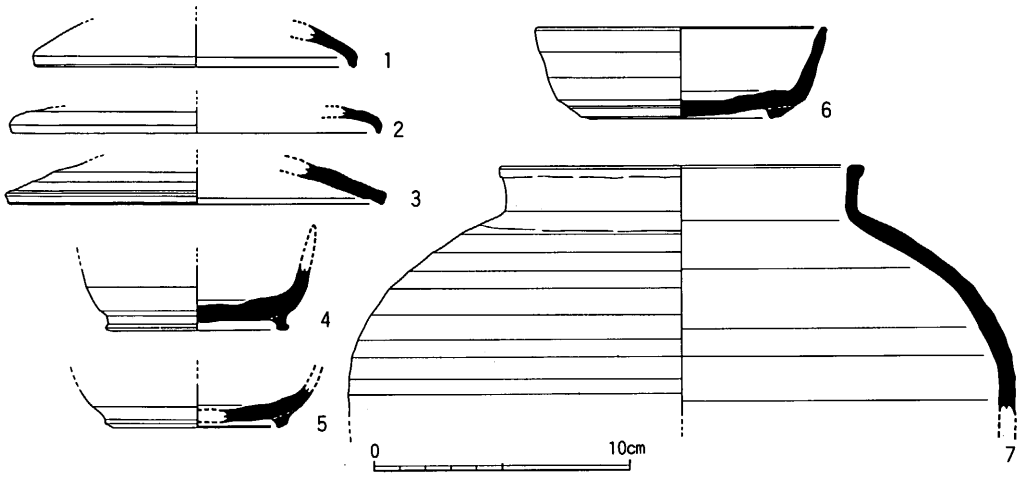


Fig.21　9 SD015出土土器実測図(1/3)

小坏c(4・5)　共に底部破片であるが、口径10cm前後の小坏に復原できる。4は高台断面形が長方形で、貼り付けの際に中位が絞られた形状を示す。底部はヘラ切り後粗いナデを施している。体部は内外ともナデ調整である。高台径6.6cmである。5は方形の高台が、やや丸みを持った体部屈曲部に雑に貼り付けてある。底部処理はヘラ切り後粗いナデを行なう。体部内外はナデである。高台径6.6cmを測る。

坏c(6)　口径11.5cm、高さ3.6cm、高台径7.0cmを測る。高台断面形は逆台形で体部屈曲部直下についている。底部処理はヘラ切り後粗いナデを行なう。

壷a(7)　口径14.4cmの短頸壷である。調整は内外共に回転を利用したヨコナデである。肩部には、蓋を被せて焼成したと思われる熔着痕がある。

2・5・6・7が暗灰色粘質土、1・3・4が灰色砂層からの出土である。

陶器(Pla.)

甕(a)　胴部の破片である。白色の砂粒を多く含むザックリした胎土である。暗灰色土からの出土である。

その他の出土遺物

石器・土製品(Fig.22)

石庖丁(1～4)　1は輝緑凝灰岩製で杏仁形をしている。刃部は片刃ぎみの両刃である。背部には、一部切断しかけた跡がある。2～4はシルト岩製で半月形をしている。2は紐穴芯と背部間が0.8cmと狭い。刃部は片刃ぎみの両刃である。3・4は風化が著しく器表面を欠失する。1・4が9SD001、2が黄茶色土、3が9SD015より出土した。

石鎌(5)　シルト岩製である。風化のため器表面のほとんどを失っている。刃部は片刃ぎみ

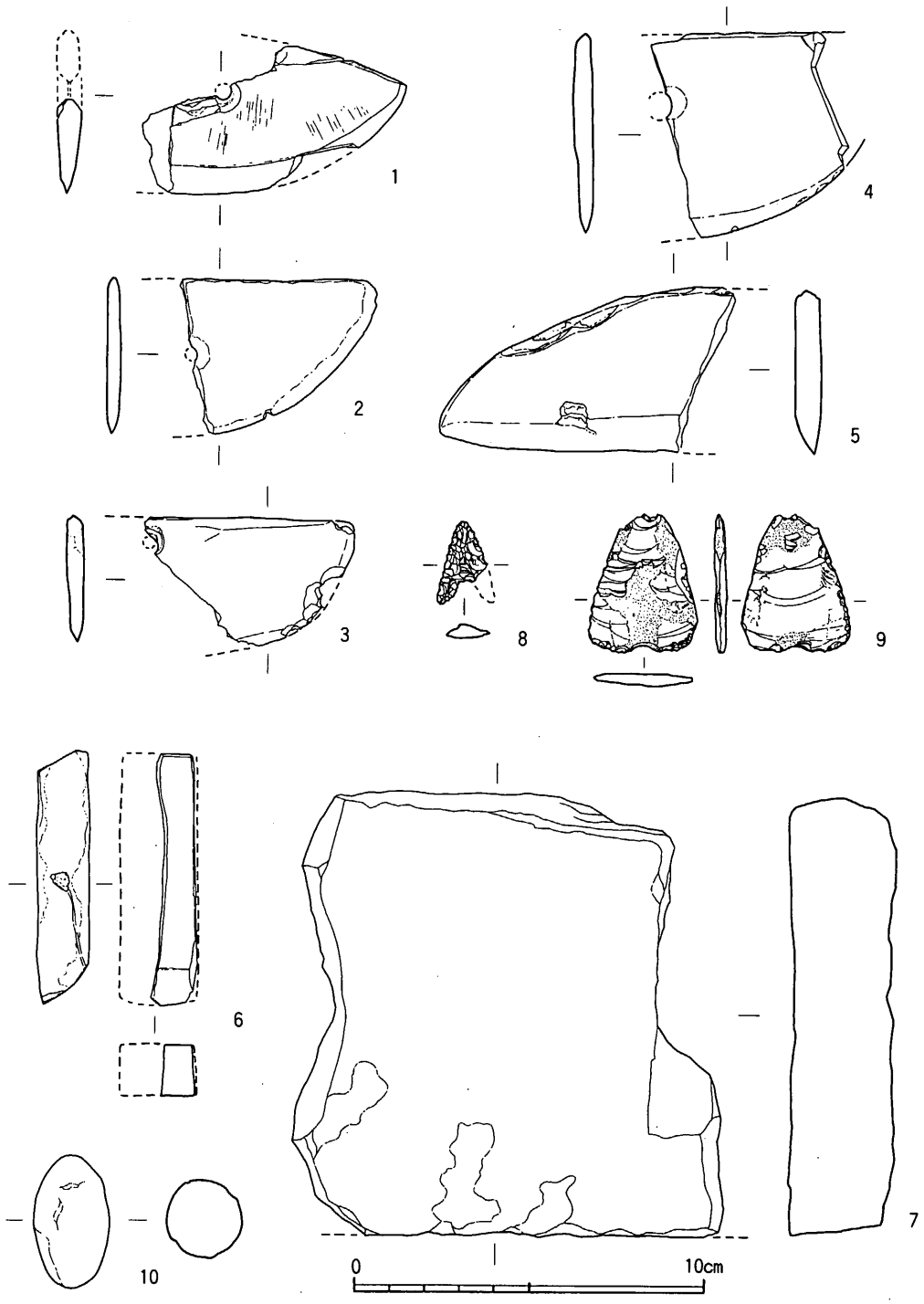


Fig.22 第9次調査出土石器・土製品実測図

の両刃である。背部は形成時の小剥離痕を残している。厚さは0.7cmである。黄茶色土出土。

柱状片刃石斧(6)　珪質泥岩製である。縦方向に断裂したものを砥石に転用しており、反りのある剥離面を研ぎ面に利用している。長さ7.2cm、厚さ1.5cmである。黄茶色土出土。

砥石(7)　砂岩製の荒目砥石である。方形をしており一面しか使用していない。長さ12.7cm、幅12.5cm、厚さ3.0cmである。9SD015灰色砂層出土。

石鏃(8)　黒曜石製の打製石鏃で抉りが深めのものである。石材も風化しており縄文時代でも古い時期のものと思われる。長さ2.3cm、復原幅1.6cm、重量0.7gである。調査区南端のピットから出土した。

剥片(9)　黒曜石の縦長剥片に研磨を施すものである。研磨は両面と側面に行なわれている。使用目的は不明であるが、局部磨製石鏃の素材の可能性もある。縄文時代の所産と考えられる。長さ4.0cm、幅3.2cm、厚さ0.4cm、重量6.4gである。黒灰色土出土。

投弾(10)　土製投弾である。長さ3.8cm、幅2.2cmである。器表面は風化している。黄茶色土からの出土である。

4．小結

本調査では、4次調査で確認されていた4SD020の延長部を9SD001として確認した。これにより推定国分尼寺南門跡から南に延びる参道は16mとなった。しかし自然流路である9SD015により切られていると考えられることから、遅くとも平安時代には使用できなくなっていたようである。一方、弥生時代中期の遺物、遺構も散在しており、当該期の集落の一部の可能性がある。

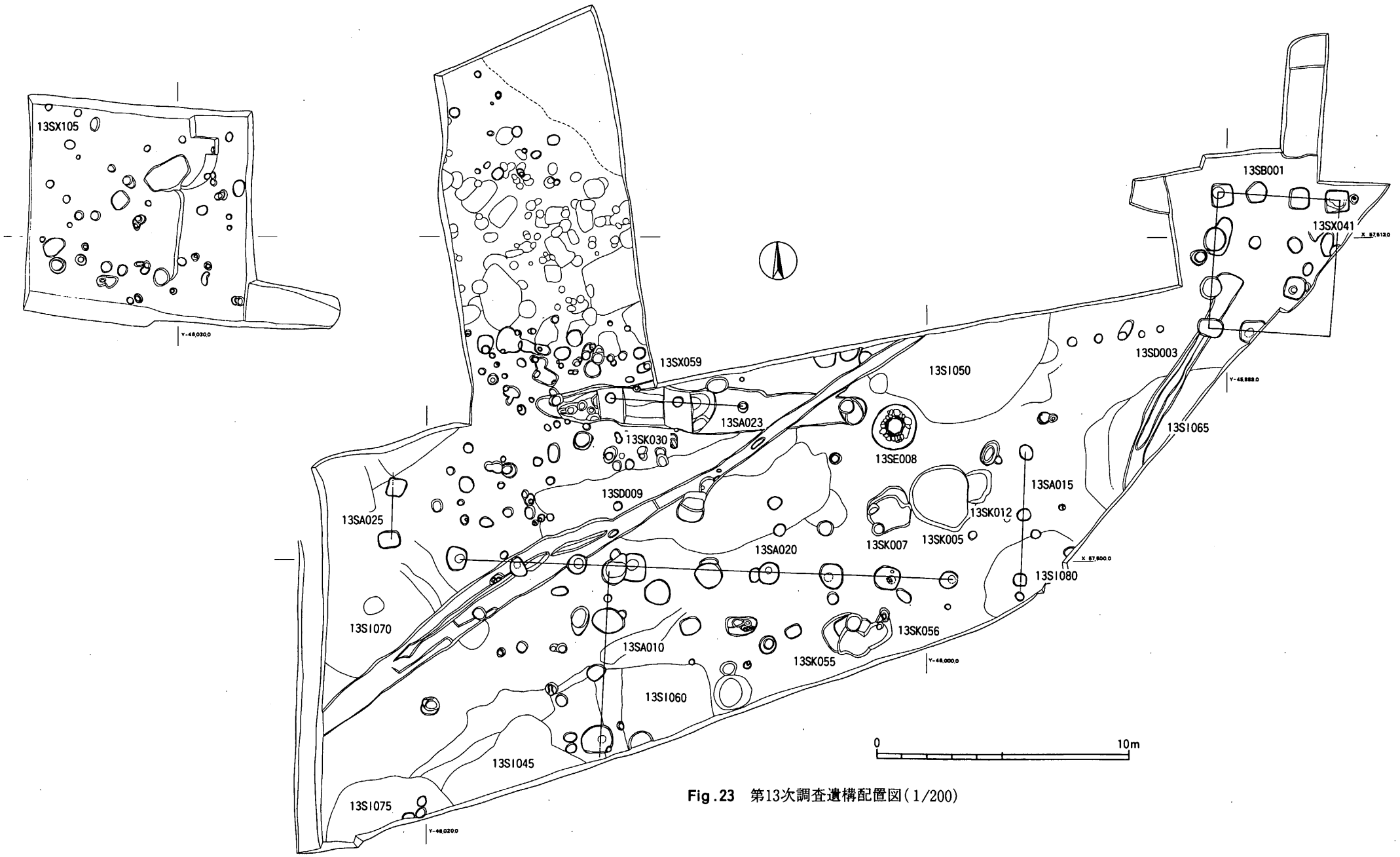


Fig.23 第13次調査遺構配置図(1/200)

（4） 第13次調査

調査地は、太宰府市大字国分字陣ノ尾140－1に所在する。先に報告した第4次、第8次の結果からこの付近が筑前国分尼寺跡の伽藍中軸線上で且つ中枢部分と推定されるようになったが、周辺が急激な宅地開発によって年々変貌を遂げていることから、地権者の協力を得て重要遺跡確認調査として発掘調査を実施した。調査は平成3年1月16日から3月15日まで実施し、対象面積は2229㎡、調査面積は668㎡である。調査は狭川真一が担当した。

なお、調査の性格上国分尼寺関連の遺構を中心に調査を実施した。したがって切り合い関係において新規になるものはほとんど完掘したが、当該期と判断された遺構の一部については土層ベルトを除去せずそのまま埋め戻したものもある。また、弥生時代の竪穴住居跡と判断される遺構については尼寺関係遺構と重複関係にあるものもあり、遺構掘り下げに伴って尼寺関連遺構を消滅させる恐れがあったことと、地山が砂質土であったため崩壊しやすい状況であることなどから、そのほとんどをプラン確認程度にとどめることとした。このため弥生時代の遺構については詳細なデータを得ることができなかった。また、尼寺関連建物遺構探索の目的で調査区北側に拡張部分を設けたが、建物と認識できる遺構が確認されなかったため、この部分もプラン確認にとどめた。これらの地点に関しては将来の調査に委ねたいと思う。

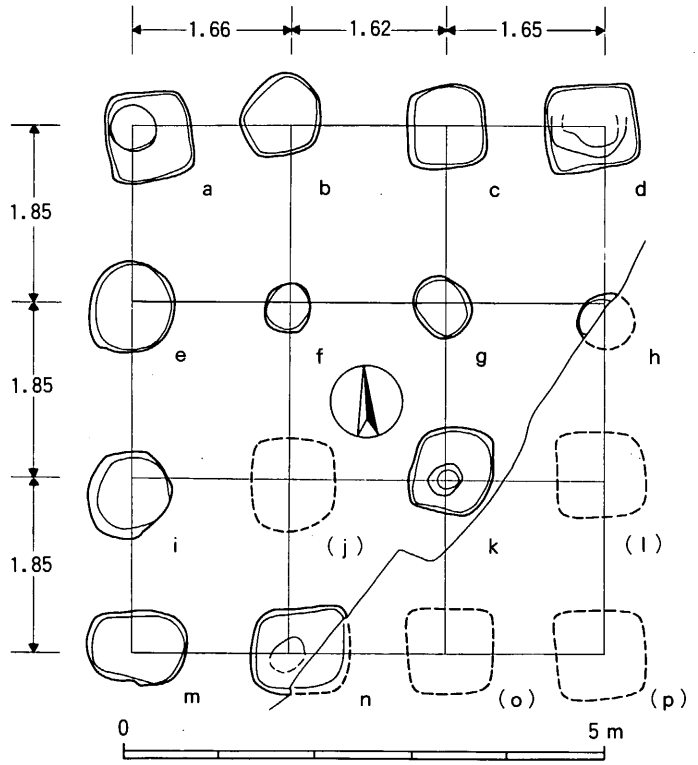


Fig.24 13SB001実測図(1/80)

1．層位など

調査直前の状況は畑地で、耕作土の直下は茶色土層となり淡茶色砂質土および灰白色粗砂の地山に達する。また敷地の西北部分に開けたトレンチ（13SB001を推定尼寺中軸線で折り返した位置）では耕作土直下から暗茶色土

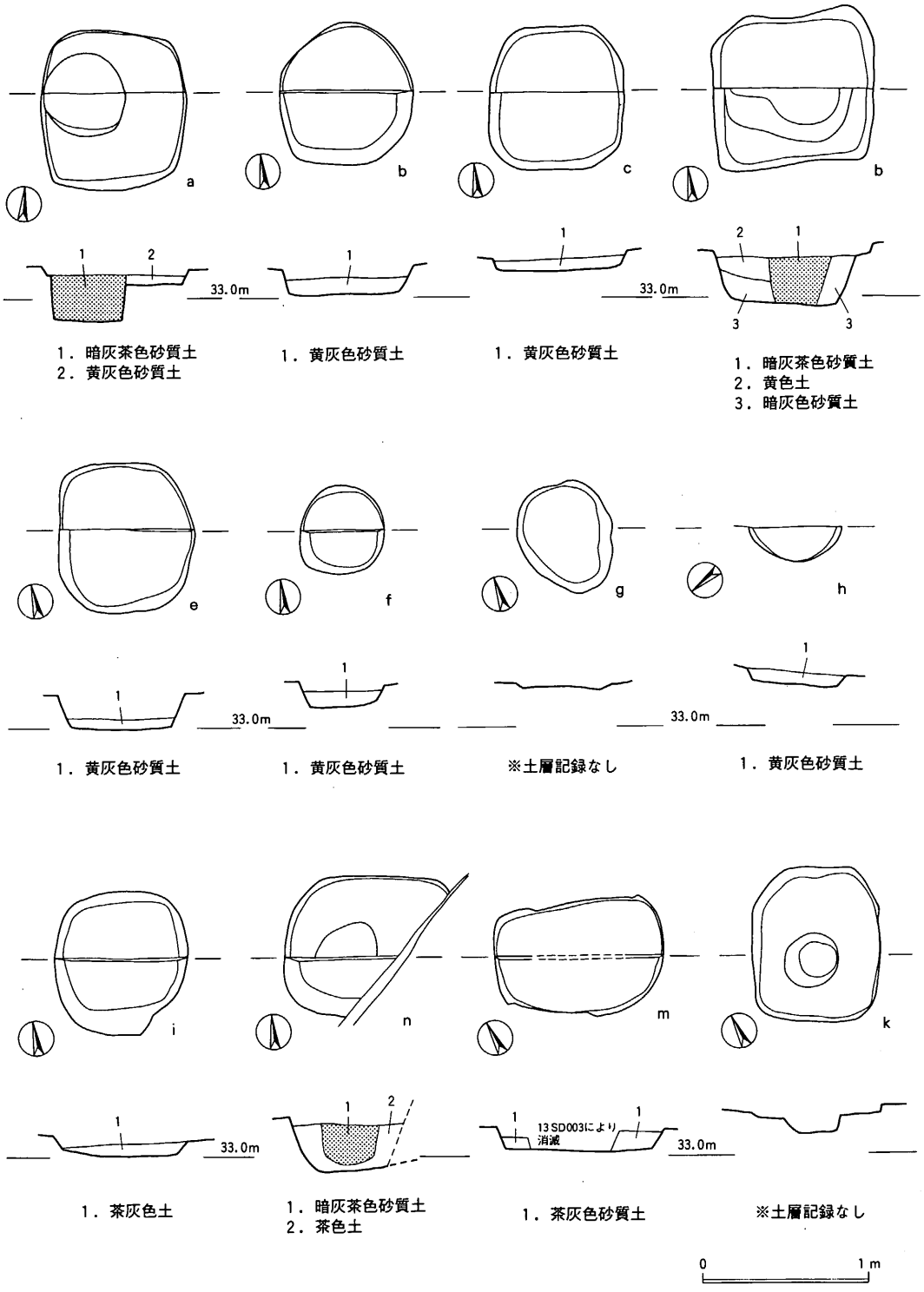


Fig.25 13SB001柱掘方実測図及び土層観測図(1/40)

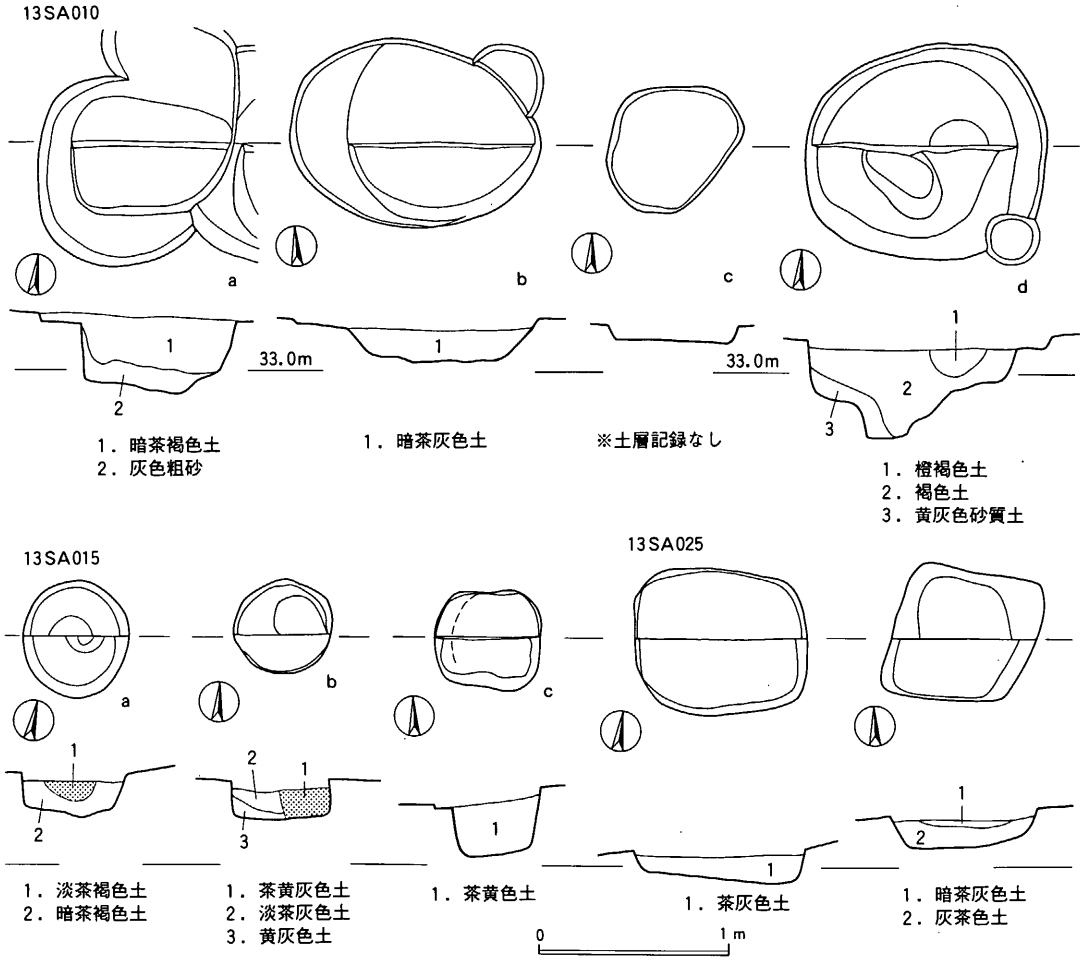


Fig.26 13SA010·015·025柱掘方実測図及び土層観察図(1/40)

とした包含層が確認された。この層は地形が西に向かって緩やかに傾斜していた関係から、かなり厚く堆積していた。またいずれの調査地点も遺構の深さから見て、遺構面は過去に大きく削平を受けていると考えられる。

2．遺構

遺構の主体は弥生時代から近世にかけて断続的に分布している。弥生時代では竪穴住居跡、奈良時代では掘立柱建物、柵列、土壙やピット、中世では井戸、近世では溝などを確認した。以下遺構種類別に報告する。

掘立柱建物

13SB001（Fig.24·25、Pla.15·18～20、別表4） 調査区東端で検出されたもので、遺構の東側

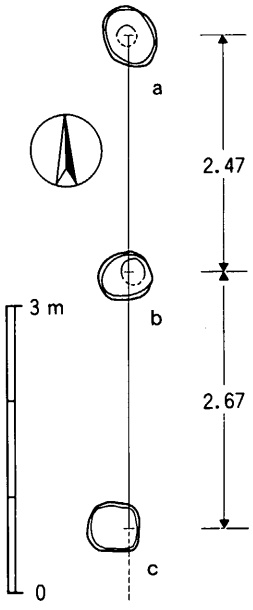


Fig.27 13SA015実測図(1/80)

は調査区外に延びているものの3間×3間の建物と推定される。建物内にも規模は異なるが柱掘り方とみられる遺構があり、総柱形式の建物であった可能性が強い。ただし中央南西地点（j）に柱掘り方は確認されていない。

建物の規模は南北5.55m、東西4.92m（推定柱心々間）で、柱間は図に示すとおりほぼ等間である。建物の振れは、柱痕の確認できた掘り方a-dのデーターからおよそN-94°-E程度であることが知られる。柱掘り方は外周のものがほぼ隅丸方形で、長さは0.7～0.9mを測る。遺構の残存が悪く、深さは0.3m程度残存するものが最も深い。このうち柱痕を確認できるものでは、柱の直径はおよそ0.35～0.4m程度であったことが知られる。

柵列

13SA010（Fig.26、Pla.14･15･22） 13SA020柵列の西側から4番目の柱掘り方（d）を切っている。調査区域内では柱掘り方を4つ確認しているが北から3番目のもの（c）は他に比較して極度に小さく、また心もやや外れている。掘り方の埋土をみるとその全てで柱痕は確認できず、茶褐色系の土で埋まっている。したがってこれが柵列でない可能性も考えておく必要があり、この場合これらは土壙群として捉えるべきかもしれない。

13SA015（Fig.26･27、Pla.14･15･23、別表4） 13SA020東端の柱掘り方から東へ2.5mの位置で検出された南北方向の柵列である。調査区域内では3つの柱掘り方を検出したがさらに南に延びることも考えておく必要があろう。この柵列の南端の柱掘り方は13SA020の柱筋の延長上にあり何らかの関係が想定できる。柱間は北から2.47m、2.67mで、柱掘り方は略円形及び略方形で長さ0.5m内外、深さ0.2～0.4mである。土層観察から確認できた柱痕は、径約0.25mで、それから得られる柵列の振れは、およそN-0° 40′-Eである。

13SA020（Fig.29･30、Pla.14･15･21･22、別表4） 調査区中央で検出した東西方向の柵列である。全長19.82m（柱心々間）を測る。柱間は西から2.30－2.49－2.18－(5.46)－2.41－2.53－2.45mで中央が広くなっていると思われる。調査当初掘り方eを一連の柱掘り方と見做していたが、先述した13SA010の埋没状況に近似していることや心がやや南側にずれることから、別性格の遺構と考えるに至った。したがって柱列は7間、または東西別々と理解するならば各々3間のものと見做すことができよう。ここでは前者の7間案で進めてゆく。柱掘り方は隅丸方形あるいは略円形で長さ0.7～1.1m、深さ0.2～0.6mとややばらついている。土層観察から得られた柱痕から柱径は0.25～0.35m程度とみられる。柵列の方位は、およそN-92° 20′-Eである。

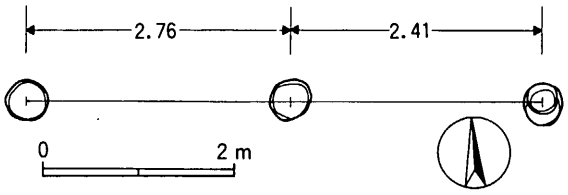


Fig.28 13SA023実測図(1/80)

13SA023 (Fig.28、Pla.14·15、別表4) 13SK030土壙の埋没土上から切り込んでいる東西方向で2間の柵列である。全長5.37mを測るが、柱掘り方は他のものに比較して小さい。

13SA025 (Fig.26、Pla.14·15·20) 13SA020の西端から約2.5m西の地点で検出された南北方向の柵列と思われる。柱筋はややずれるが、13SA015を意識したものと思われる。柱掘り方は略方形で一辺0.8~0.9m、深さ約0.2mのものを2個確認したが、柱痕は確認できていない。さらに北へ延びている可能性もある。

土壙

13SK005 (Pla.23) 13SA020の北東側に位置する円形に近い形状をした土壙である。規模は東西2.35m、南北2.7m、深さ0.2mを測り、土壙底はすり鉢状を呈している。埋土は黒色土が主体を占め、下層に灰白色土が若干堆積していた。上層埋土中から瓦の破片が若干出土した。13SK007に切られ、13SK012を切っている。

13SK007 (Pla.23) 13SK005を切る土壙である。形状は不定形で長さ1.8m、幅1.8m、深さ0.2mを測る。埋土は暗黒茶色土の単一層で、埋土中から弥生土器の出土をみているが、遺構の時期は奈良時代以降まで下るものである。

13SK012 (Pla.23) 13SK005に切られる土壙である。形状は不整円形で長さ1.35m、幅0.9m以上、深さ0.15mを測る。埋土は下層に若干の黄茶色土の堆積をみるが、主体は暗茶黒色土である。

13SK030 (Pla.17) 13SA023柵列に切られている土壙で、検出段階のプランでは東西13.6mを測る長いものであったが、東半分はごく薄い溜まり状を呈する程度で、土壙として認識可能な部分は西側の約半分にとどまる。その土壙の規模は、長さ(東西)7.25m、幅1.6m、深さ

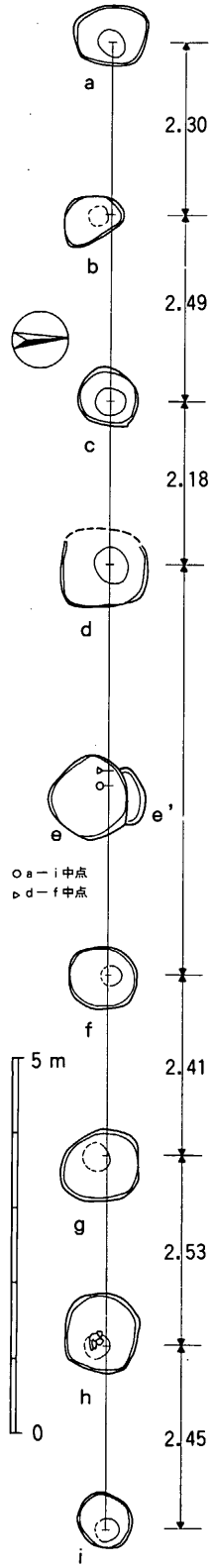


Fig.29 13SA020実測図(1/100)

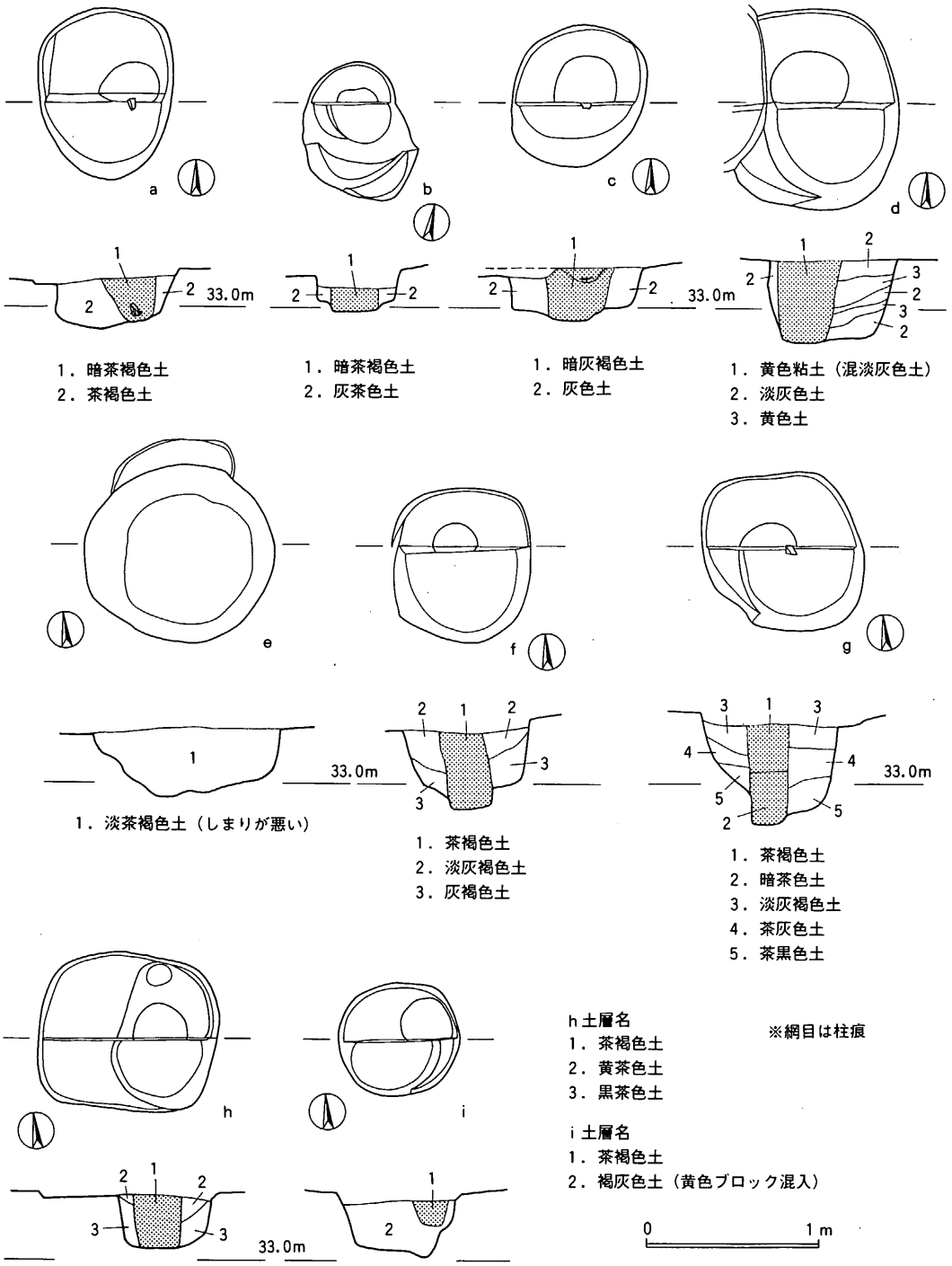
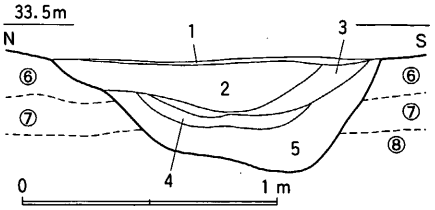


Fig.30 13SA020 柱掘方実測図及び土層観察図(1/40)

0.45ｍを測る。埋土は溜まり状の部分も含めて大半が灰茶色土で形成されるが、底部分に暗茶灰色土の堆積が認められる。遺物はきわめて少なく、層位の時期差は掴めていない。

13SK055 いくつかの土壙やピットが重なりあっているが、最もしっかりしたプランを形成していたのが本土壙とこれを切る13SK056である。土壙は長さ1.3ｍ、幅1.0ｍ、深さ0.25ｍを測る。埋土中から製塩土器が出土した。



(土層名一覧)
1．茶灰色土　4．淡灰色砂質土　⑥　黄色土
2．灰茶色土　5．暗茶灰色土　⑦　淡白灰色砂質土
3．灰色土　⑧　灰色砂質土
1～5　遺構埋土　⑥～⑧　地山

Fig.31 13SK030土層観察図(1/30)

13SK056 13SK055を切っている。長さ1.3ｍ、幅0.9ｍ、深さ0.2ｍを測る。埋土中から製塩土器が出土した。

井戸

13SE008 (Fig.32、Pla.16) 調査区中程で検出した円形の石組井戸である。検出面の内径は約0.8ｍで石組は検出面から1.2ｍのところまでで終わっており、以下には確認されなかった。石組最下面の内径は約0.6ｍである。また、石組以下は円形のプランを保ちながらさらに下に掘り下げることが可能な状況であったため、当初は桶組になっていたものと推定している。なお石組の崩落する恐れが出てきたため完掘はできていない。井戸の掘り方は検出面で直径1.8ｍの略円形プランを

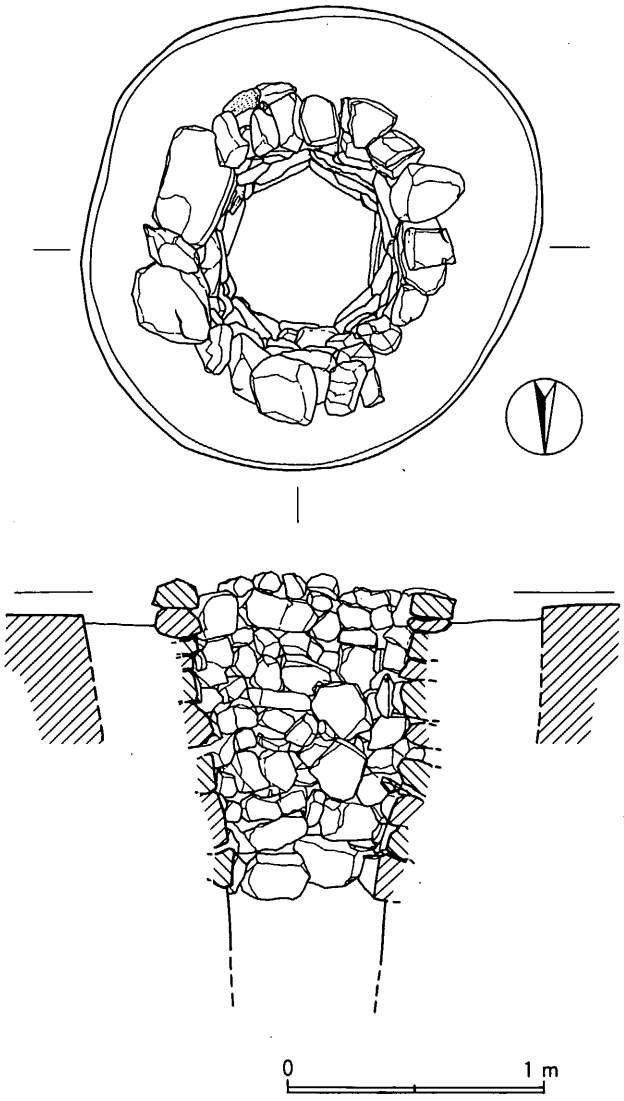


Fig.32 13SE008実測図(1/30)

呈し、裏込め土は暗灰色粗砂（掘り上げた地山をそのまま埋め戻したものと考えられる）である。

溝

13SD003 13SB001南西隅付近から南西方向に流れる溝で、検出長約9.7m、幅0.6～1.0m、深さ約0.1mを測る。埋土は上層が灰色砂土、下層が茶褐色土である。13SB001柱掘り方を切っている。

13SD009 調査区中央北辺から南西方向に流れる溝で、検出長29.1m、幅0.6～0.8m、深さ0.1mを測る。埋土は上層が灰色砂土、下層が茶褐色土で、13SD003とほとんど同じ状況を呈していた。なお、この溝は他のすべての遺構を切っており、最も新しいものに属すると考えられる。

住居跡

竪穴住居と思われる遺構を7基分確認したが、掘り下げを行っていないので詳細な情報は得られていない。したがって、将来の調査で住居跡とする今回の見解を否定する結果が待ち受けている可能性が強い遺構もあると思われる。

13SI045 直径6m以上で円形プランの住居跡と推定される。

13SI050 直径7.3mで円形プランの住居跡と考えられる。

13SI060 東西4.5m、南北3.5m以上で長方形プランの住居跡と考えられる。遺構の西側には幅約1mのベッド状遺構とみられるものが確認できる。

13SI065 直径7.5m以上で円形プランの住居跡と考えられる。

13SI070 直径約5mで円形プランの住居跡と考えられる。住居の中央部分では床面が露出しており、中央の炉とみられる炭化物で埋まった直径0.75mのピットを確認している。

13SI075 直径約5mで円形プランの住居跡と考えられる。

13SI080 直径4.5mで不整円形プランの住居跡と考えられる。

その他の遺構

13SX041 13SB001柱掘り方に切られるピットである。長さ1.0m、幅0.5m、深さ0.05mを測る。埋土中から石鏃が出土した。弥生時代の遺構である可能性が考えられる。

13SX105 調査対象地の北西に設定したトレンチにあるピットである。直径0.35m、深さ0.15mを測る。弥生土器が出土した。なお、このトレンチ内の遺構は奈良時代後半の包含層である暗茶色土層の下に形成されており、遺構中から出土した遺物はすべて弥生時代である。

3．出土遺物

13SB001出土土器（Fig.33、Pla.24）

須恵器

坏蓋3（1） 口径15.6cmで天井部は篦切りの後、簡単な指おさえを行う。柱掘り方c出土。

坏(2)　口径13.0cmで体部はヨコナデ調整される。柱掘り方n出土。

土師器

坏d(3・4)　口径13.3・14.2cm、器高2.9cm、底径6.9・8.4cmを測る。3は底部を回転ヘラケズリ、内底をナデ、他はヨコナデである。柱掘り方n柱痕出土。4は、内外面ともに回転ヘラミガキで調整される。柱掘り方b出土。

椀(5)　口径15.5cm。表面は風化が著しく調整は明らかではない。柱掘り方n柱痕出土。

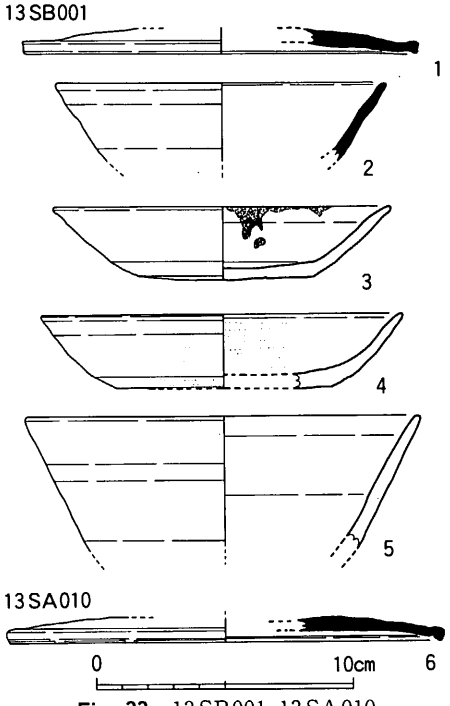


Fig.33　13SB001・13SA010
出土土器実測図(1/3)

13SA010出土土器(Fig.34)

須恵器

坏蓋3(6)　口径17.6cmで、天井部を回転ヘラケズリする。最も南端で検出された柱掘り方(d)から出土した。

13SK030出土土器(Fig.34)

須恵器

坏蓋c3(1)　口径16.6cmで、天井部を回転ヘラケズリする。天井部分の中央にヨコナデが観察されたことから摘みの付く形式と判断した。土壙埋没土中の上位から出土した。

13SK055出土土器(Fig.34、Pla.27)

製塩土器

壷(2)　胴部の破片で、最大径10.0cmを測る。外面には指圧痕が明瞭に残り、内面には細かな布目痕が観察される。

13SK056出土土器(Fig.34)

製塩土器

壷(3・4)　3は口径9.0cmを測り、口縁端部は指圧によって整えられる。4は口縁端部をわずかに失うが口径10.7cm程度に復原されるものと思われる。両者とも外面には指圧痕が明瞭に残り、内面には細かな布目痕がわずかに観察される。

13SE008出土遺物(Fig.35、Pla.27)

越州窯系青磁

椀(1)I-2-a類の底部片で、高台径10.0cmを測る。見込み部分および畳付部分に目跡が観察される。釉は畳付を除いた全面に施され、黄緑色に発色する。

古瀬戸系陶器

おろし皿(2)　底部径6.8cmで糸切りされる。見込み部分には篦による格子状のおろし目が施され、施釉されるものの発色がわるい。なお、口縁部分の破片が13SX059から出土しているが接合しない。この資料は釉を内外面ともに施し、乳橙黄色に発色する。

滑石製品

石鍋（3）　底部径11.2cmを測り、内外面ともケズリによって調整される。底部、体部とも外面には煤が付着している。

暗茶色土層出土遺物（Fig.36～39、Pla.25～27、別表1）

須恵器

坏蓋a3(1)　口径12.7cmで、天井部はヘラ切りされる。

坏蓋c3(2～16)　口径14.4～19.2cmを測る。2は宝珠形の摘みを有するが他はボタン状のものである。また、6の口縁端部の断面形状は明瞭な三角形を呈しているが、他のものは小さくやや不明瞭な三角形を呈している。調整は11と16が天井部を回転ヘラケズリするが、他はヘラ切りのままで一部に簡単なナデを施すものが認められる。

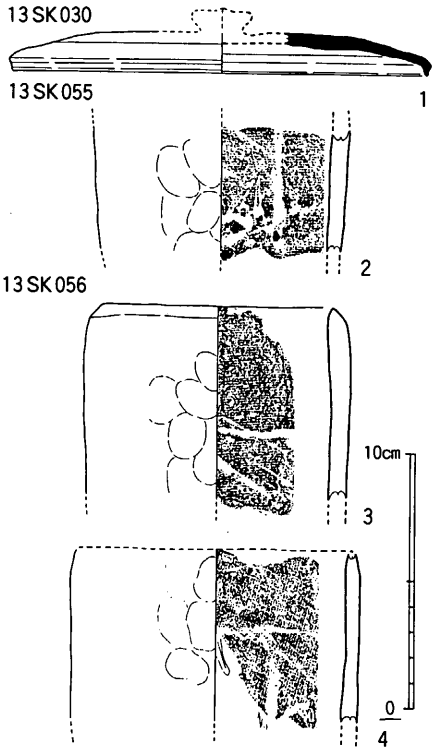


Fig.34　第13次調査各土拡出土土器実測図(1/3)

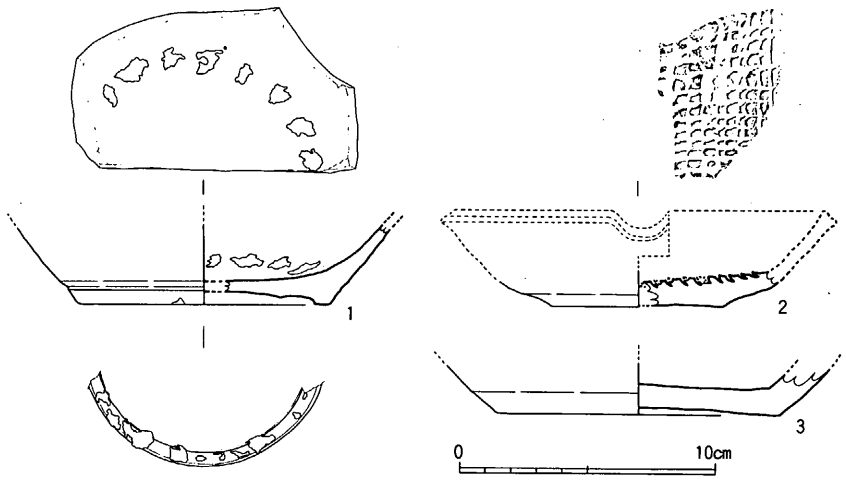


Fig.35　13SE008出土遺物実測図(1/3)

坏a(17)　口径13.4cm、器高3.9cm、底径8.6cmを測る。底部はヘラ切りで、体部との境は明瞭である。口縁部分に油煙が付着している。

坏ｃ(18～24)　口径12.2～17.0cm、器高3.8～5.3cmを測る。底部はすべてヘラ切りで、体部との境目よりやや内側に高台を張り付ける。高台は断面台形を呈するものが主体ながら、小さく低いものも含まれている。23の口縁部付近に油煙が付着している。

椀ｃ(26)　口径16.2cm、器高6.3cm、高台径11.6cmで、体部は内湾気味に立ち上がる。底部は回転ヘラケズリされ、やや高めで外方に踏ん張る形状の高台が張り付けられる。

坏ｄ(25)　口径17.6cm、器高5.0cm、底径10.0cmを測る。この時期の土師器にみられる坏ｄと同様の調整で、形状もほとんど同じである。調整は、外面が体部中程から底部全面にかけて回転ヘラケズリ、内面底部がナデ、他はヨコナデである。ヘラミガキは行われていない。

皿ａ(27～30)　口径18.1～19.6cm、器高2.4～2.9cmを測る。底部はすべてヘラ切りのままで板状圧痕の残るものがある。

皿ｃ(31・32)　32は、口径26.8cmと大きなものである。両者とも底部を回転ヘラケズリし、断面形状が四角形の高台を張り付ける。

鉢(33～38)　33～35は口径17.0～21.0cmを測る。体部外面の大半を回転ヘラケズリする。33はやや内傾気味に復元される。36・37は底部の破片で前者の形状に復原されるものと思われる。両者とも外面は回転ヘラケズリである。38は鉄鉢形のもので、口径20.5cm、器高12.2cmを測る。口縁端部を外方に屈曲させ、底部は尖っている。調整は体部外面の下半を回転ヘラケズリ、その内面が強いナデ、他はヨコナデである。

壷(39～41)　39は底部の資料で、外面を回転ヘラケズリしたのち高台を貼り付けている。40・41は口径17.4・21.1cmに復原され、頚部以上の立ち上がりは低い。体部、口縁部ともヨコナデ調整される。42は、口縁端部をＴ字状に作るもので、調整は全面ヨコナデである。本来の形状は不明。

土師器

小坏ａ(43)　口径9.7cm、器高3.7cm、底径5.7cmを測る。底部は回転ヘラケズリされ、体部の内面には回転ヘラミガキが認められる。

坏ａ(44・45)　口径13.4・15.4cmで、底部を回転ヘラケズリする。45は風化が著しく観察が困難ながら、回転ヘラミガキの施されていた可能性がある。

坏ｃ(46・47)　46は口径15.7cm、器高4.3cmで、底部はヘラ切りのままである。47は底部を回転ヘラケズリし、体部にまで及んでいる。両者とも内外面に回転ヘラミガキが観察される。

坏ｄ(48・49)　口径15.2・17.2cm、器高3.4・3.3cmを測る。体部中程から底部にかけて回転ヘラケズリを行う。一部不明瞭な部分もあるが、両者とも表面には回転ヘラミガキを施す。

大皿ｃ(51～53)　52・53は口径27.0・28.2cm、器高4.1cmを測る。体部内外面には回転ヘラケズリを施す。51を含めて体部下位から底部にかけて回転ヘラケズリを施す。高台はやや高めで、各々その径は、20.0・17.9・20.7cmである。

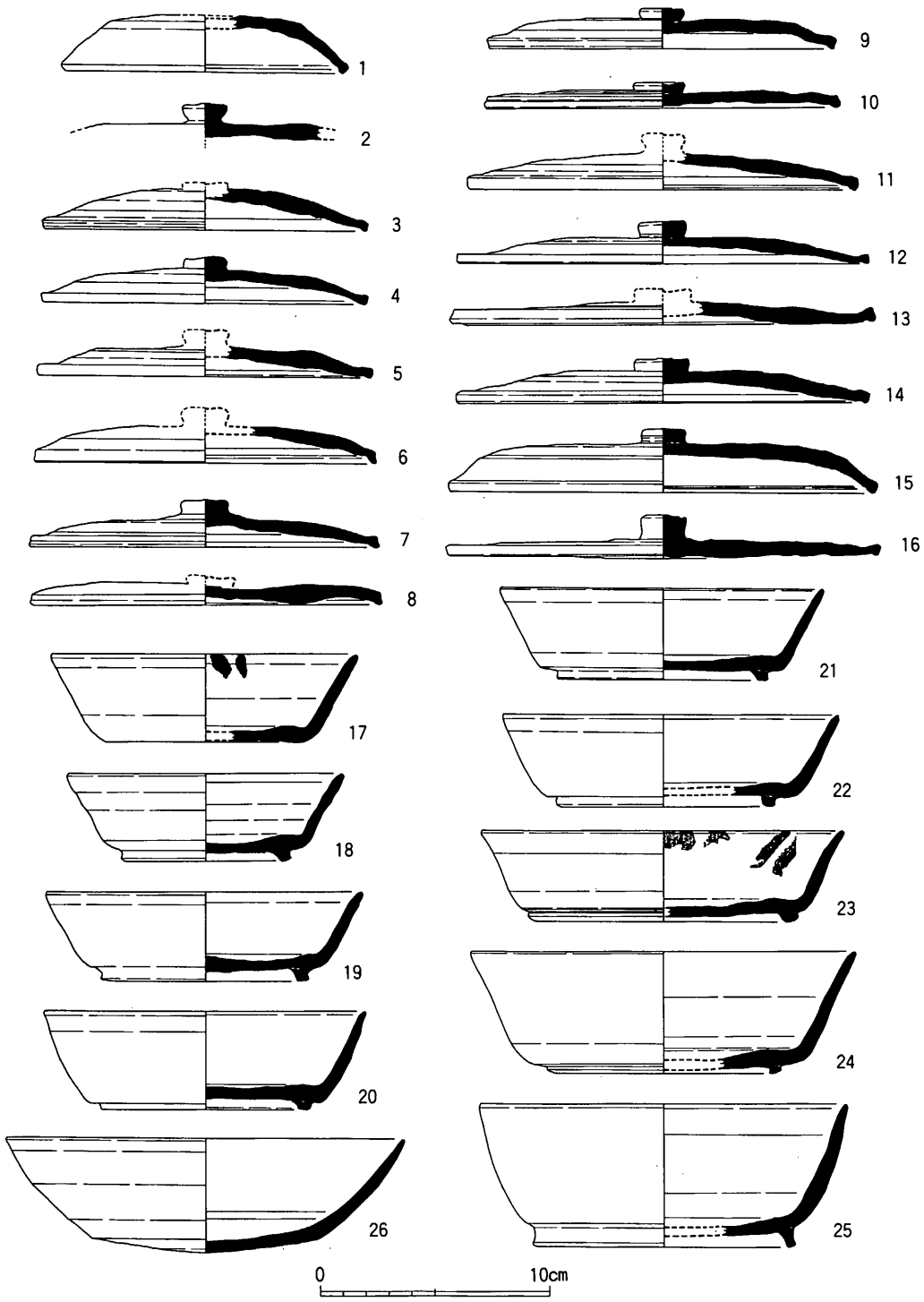


Fig.36 第13次調査暗茶色土層出土土器実測図Ⅰ(1/3)

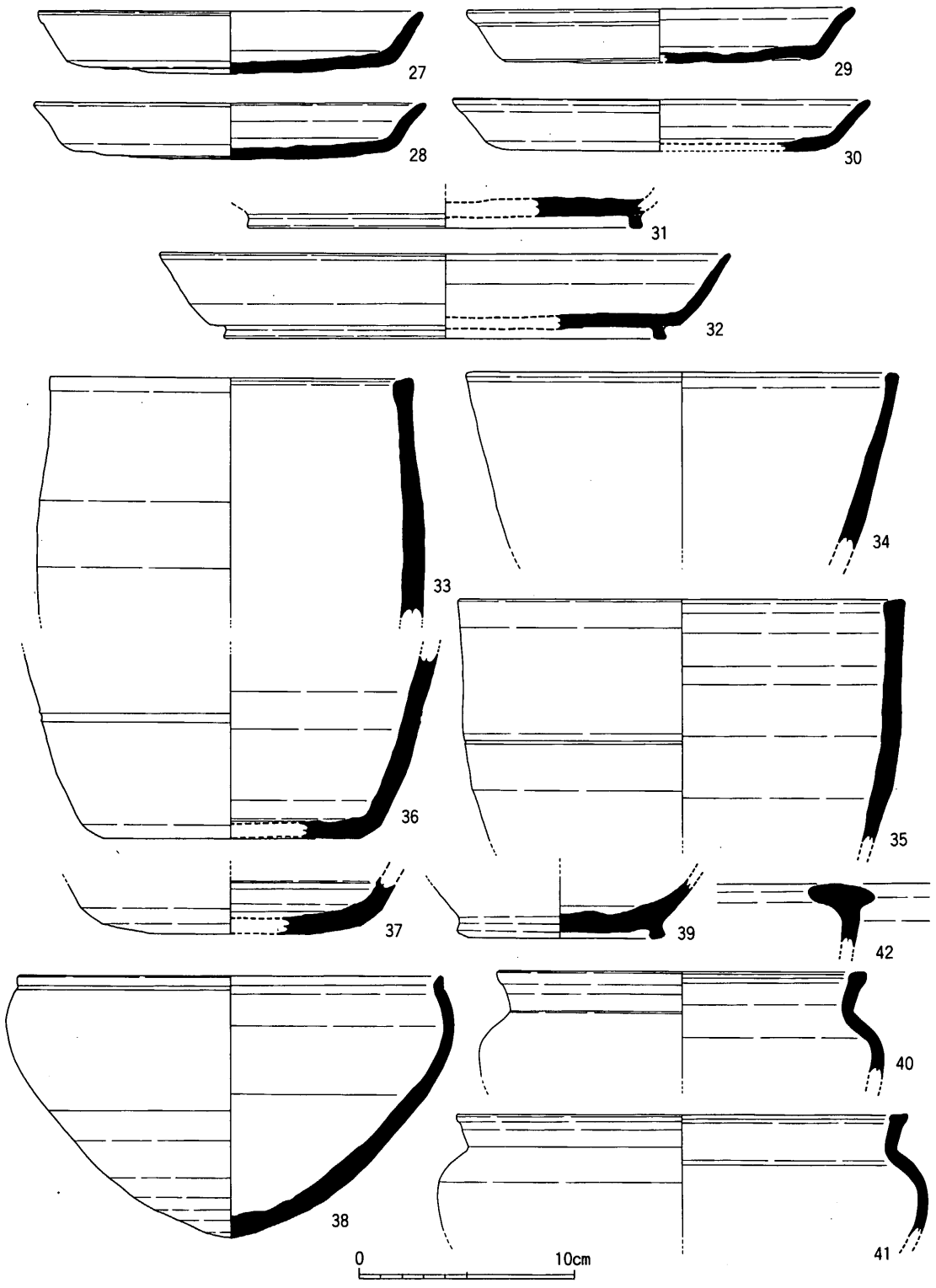


Fig.37 第13次調査暗茶色土層出土土器実測図Ⅱ(1/3)

鉢(54・55)　54は高台径16.6cmを測る。体部内外面ともに回転ヘラミガキを施すが、内面には縦方向で細かな暗文をいれている。55は口径43.5cm、器高8.3cm、高台径14.8cmを測る。外方に大きく開く体部を有し、口縁端部内面を浅い沈線状に作る。調整は体部外面下半から底部

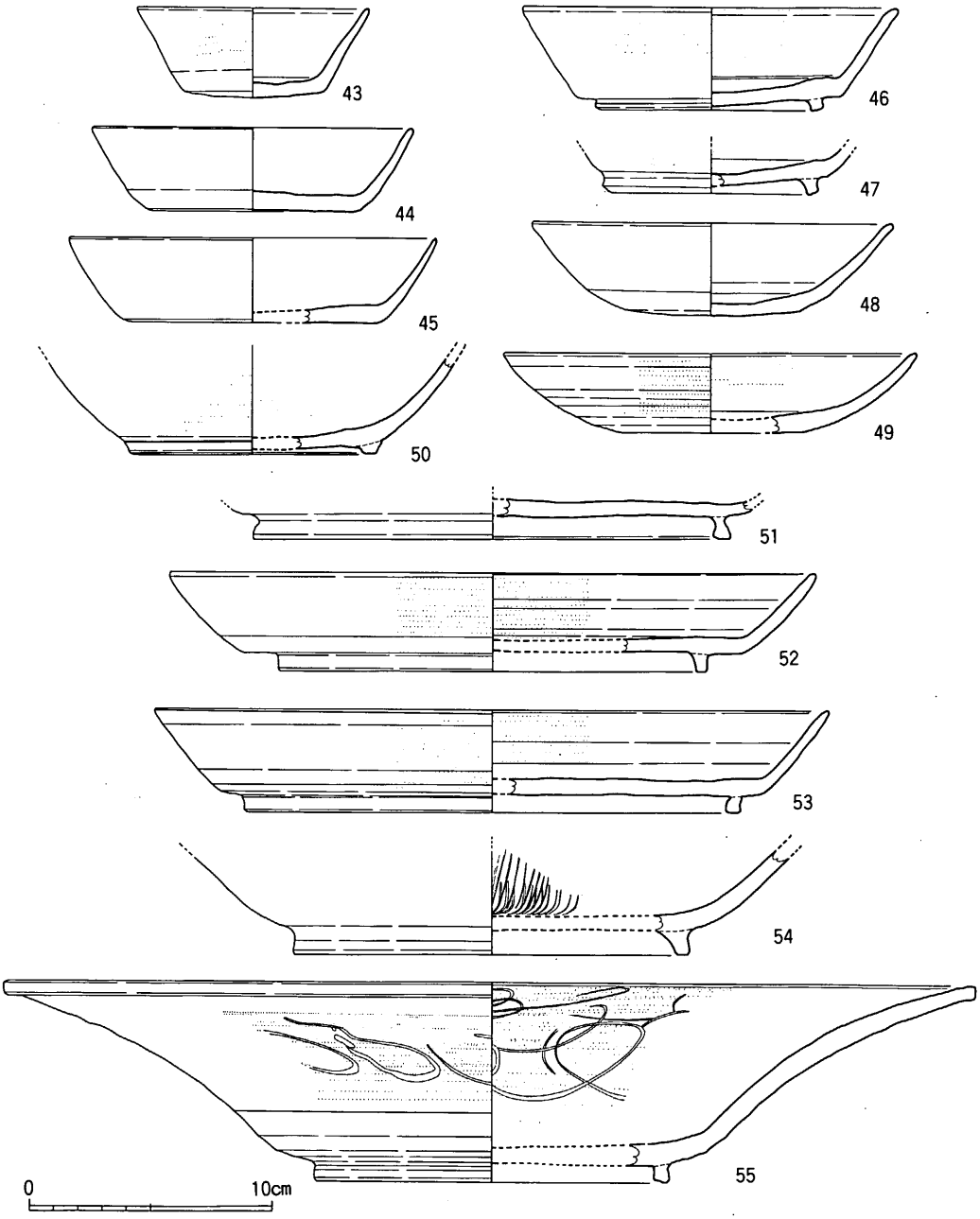


Fig.38　暗茶色土層出土土器実測図Ⅲ(1/3)

にかけて回転ヘラケズリを行い、併せて内外面ともに回転ヘラミガキを施す。さらに内面には螺旋状の暗文を3段に入れる。暗文は下のものほど大きめな弧を描く。また外面にも暗文が1段あるが螺旋状にはならず、上端が切れた不整楕円形を呈している。こうした形状の鉢は、類似のものが観世音寺や田川市天台寺跡で出土例があり、寺院に関連する行事に用いられていた可能性が考えられる。

甕(56～59)　56・57は、口径23.2・27.4cmを測る。口縁部付近はヨコナデ、体部外面は縦方向のハケ目、内面は横あるいは斜め下から上方へ向かうヘラケズリである。58・59も前者と同様な調整が観察される。

製塩土器

壷(60・61)　両者とも体部の破片である。外面は指圧痕が明瞭に残り、内面は細かな布目が観察される。

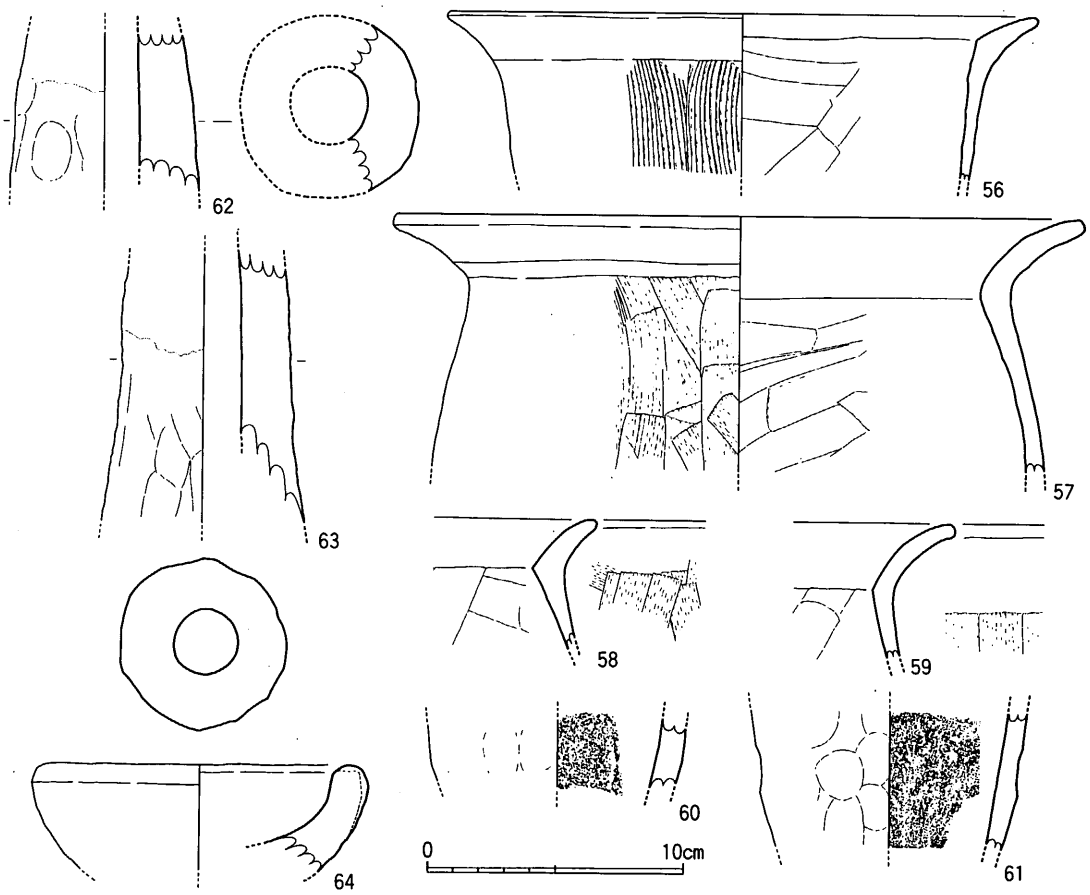


Fig.39　第13次調査暗茶色土層出土土器実測図Ⅳ(1/3)

生産用具

鞴羽口(62・63)　径6.5cm前後のものである。円柱状を呈した径2.5cm内外の棒材に粘土を巻きつけて成形したものと考えられ、表面には指圧痕が観察される。胎土は砂粒を多く含んだものである。図の上半部は灰色に変色しており、先端部分に近い位置であると思われる。

坩堝(64)　口径約12cm、器高4.2cm以上、深さは推定で約3.5cmを測る。口縁部付近に飴状に溶解した付着物が認められる。外面は付着物によって淡茶灰色を呈するが、内面は暗灰色である。

生産関係遺物は図示したほかにも多くの羽口片を検出している。また、炉壁の可能性がある資料も出土している。

茶色砂層出土土器（Fig.40、Pla.27）

青磁

皿(5)　ごけ底を呈する底部は、径5.9cmを測る。見込み部分に草花文を陰刻する。釉は畳付けから内側には無いが、他の部分には施され、淡緑色に発色する。外面の底部に目跡が観察される。

弥生土器

蓋(6)　口径12.6cm、器高2.2cmを測る。口縁部近くに2箇所の穿孔があり、本来対になっていたものと思われる。口縁端部付近はヨコナデ、他はナデ調整を行い、外面には丹が塗付される。

高坏(8)　口径23.6cmを測る。内外面とも丹塗りである。

甕（7・9・10)　7は口径18.9cmを測り、口縁端部はヨコナデながらそのすぐ近くまで叩き調整が行われている。9・10は、口径33.0・29.6cmで、10の外面はハケ目調整される。

表土出土土器（Fig.40、Pla.24）

須恵器

坏蓋ｃ3(1)　口径14.8cm、器高2.4cmを測る。天井部は回転ヘラケズリされる。

円面硯(2)　口径10.0cmに復元される。残存部分はすべてヨコナデされる。小片のため透かし等の装飾の有無については明らかではない。

土師器

坏蓋ｃ3(3)　口径13.6cmで天井部はヘラケズリされる。内外面ともに回転ヘラミガキが施されるが風化により不明瞭である。

高麗青磁

椀(4)　高台径4.8cmで、見込みおよび畳付けに目跡が認められる。釉は全面に施され、暗黄緑色に発色する。Ⅲ-1類。

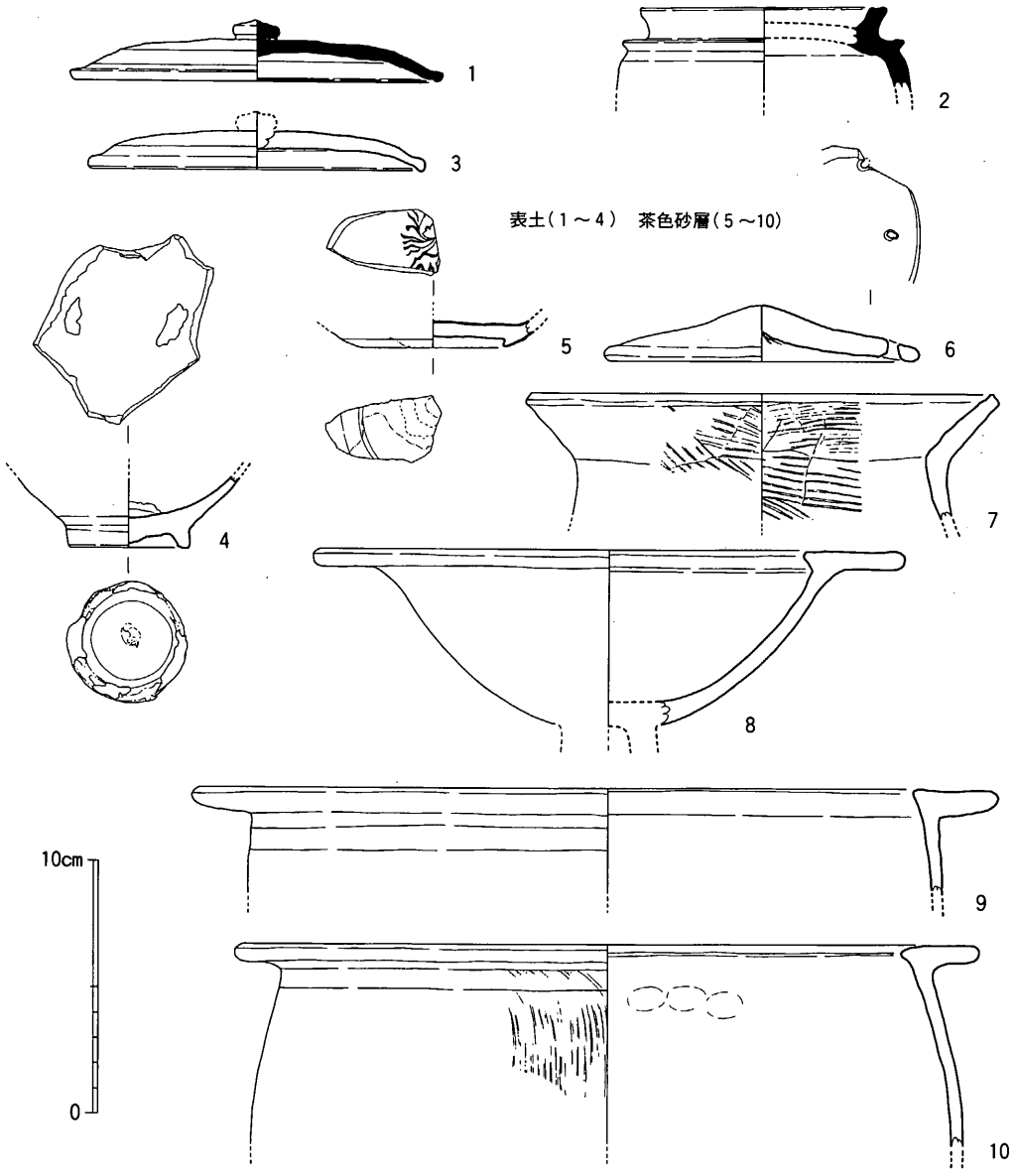


Fig.40　第13次調査各層位出土土器実測図(1/3)

その他の出土遺物

弥生土器(Fig.41、Pla.24)

甕(1・2)　1は口径29.3cmで、外面はハケ目調整される。13SX105出土。2は口径33.0cmで、頸部に低い三角形の突帯が巡っている。口縁部内面および体部外面はハケ目、口縁部外面はヨコナデされるが、叩きの痕跡が認められる。13SE008埋土中から出土した。

鉢(3・4)　3は口径21.8cm、器高10.8cmを測る。口縁部はヨコナデ、体部は内外面ともナ

デ、底部外面はケズリとみられる。13SA010最北端の柱掘り方から出土した。4は端部の小片である。甕の可能性もある。13SK007出土。

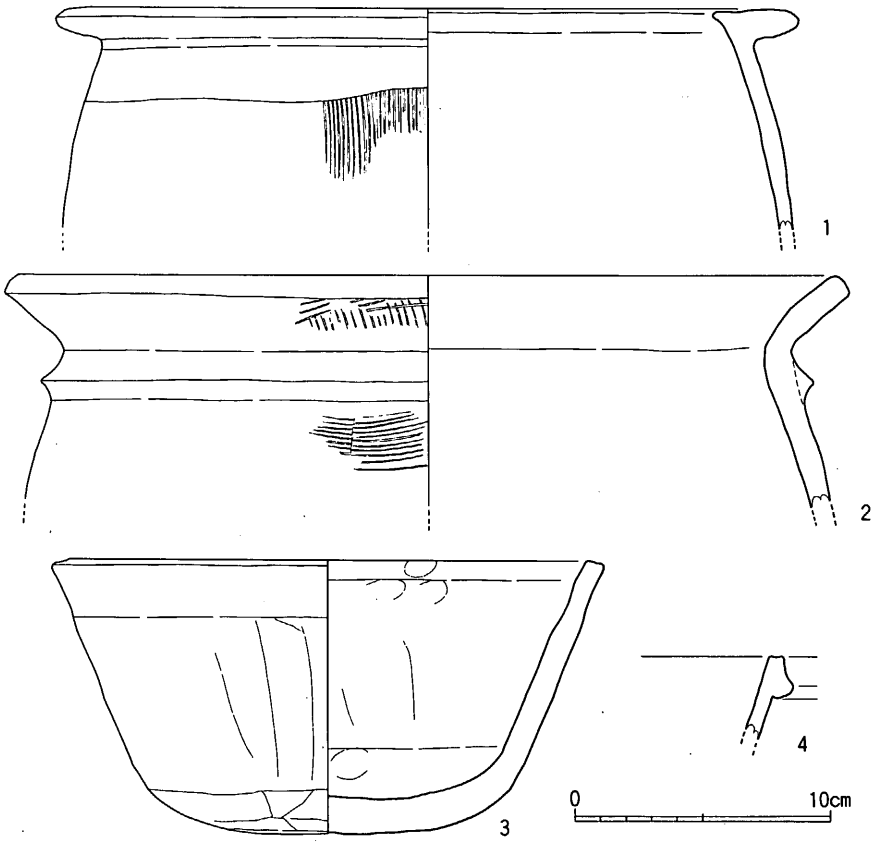


Fig.41　その他の出土遺物実測図(1/3)

石器(Fig.42)

石包丁(1)　輝緑凝灰岩製で、現存の長さ7.7cm、最大幅4.0cmを測る。紐穴は両面から穿たれ、芯間は2.8cm、背までは2.2cmである。刃は両刃である。暗茶色土層出土。

石鏃(2)　黒曜石製の打製石鏃で先端を欠失する。現存長1.7cm、幅1.7cm、厚さ0.4cmで、抉りは深い。13SX041出土。

石斧(3)　挂質泥岩製の磨製石斧である。長さ4.9cm、幅3.4cm、厚さ0.6cmを測り、片刃である。暗茶色土層出土。

石製品

硯(4)　滑石製で、長さ5.9cm、現存幅3.4cm、高さ1.8cmを測る。表面はケズリによって調整される。破損後に割れ面を研磨した形跡がある。茶色砂層出土。

4．小結

ここでは、各遺構を個別にまとめておきたい。なお建物や柵列の位置関係は、終章において検討するのでここでは省略する。

掘立柱建物　13SB001は、柱掘り方及び柱痕から若干の遺物を出土しているが、いずれも年代

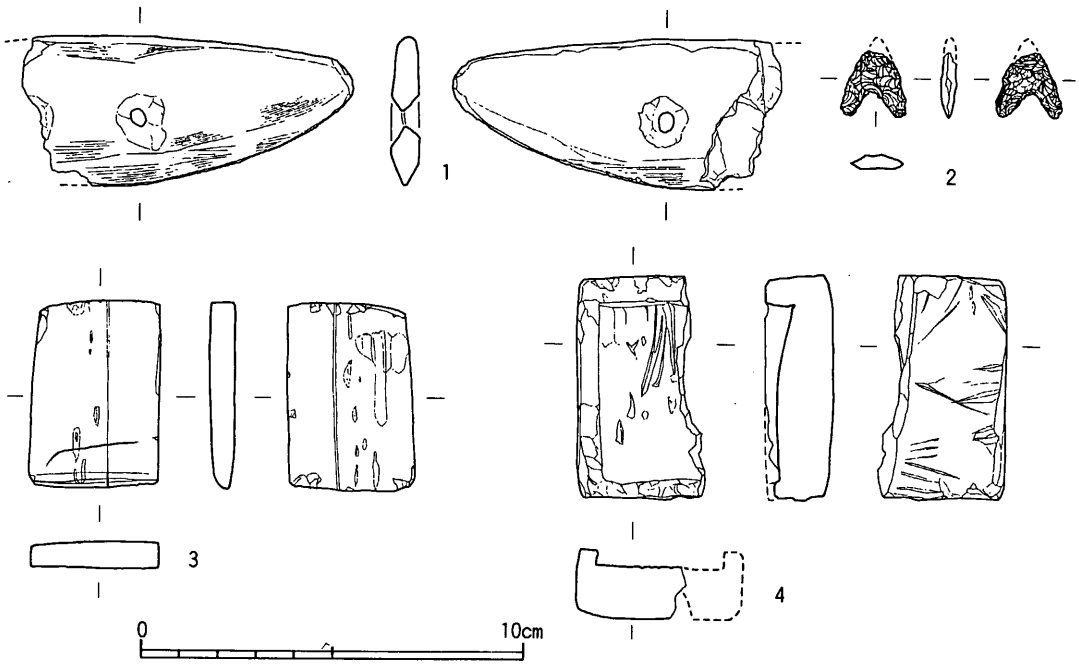


Fig.42 石器・石製品実測図(1/2)

的にはあまり隔たりはないようで、8世紀後半の範囲で捉えられよう。柱痕の資料がその廃絶を示すのであれば、かなり短期間の存続幅しか想定しえない。

柵列 13SA020は、敷地を南北に分断するように存在していたものと思われる。中央間を広く捉えた場合は、そこが通路的な役割をしていた可能性が考えられよう。他の南北方向の柵列は、規模も小さく全体が調査できていないので役割を想定するのは困難であるが13SA020とどのように関わって存在していたのかが課題である。単独で存在せず、3者（13SA015・020・025）が有機的に結びつくものであれば、13SA020以北の空間を簡易に囲い込む施設であったことも考えられる。

土壙 13SK005・007・012は集中して存在しているが、出土遺物に乏しく年代は特定できない。13SK055・056はそれぞれ切り合い関係にあるが、出土遺物から8世紀後半の範囲で考えられよう。製塩土器が破片ながら多く出土していることは注意される。

井戸 13SE008は出土遺物からみて中世まで下るものである。この時期に該当する明確な遺構はこの井戸の南側ではあまり確認されておらず、わずかに北側へ延長したトレンチでピット等を確認した程度である。

溝 2条検出したがいずれも切り合いでは最も新しい。遺物が出土していないことから年代は特定できないが、埋没土の状況から近世以降の所産とみられよう。

竪穴住居　すべて調査を行わなかったので年代等の詳細は不明である。調査区内の遺構などから出土した土器から推定して弥生時代中期以降のものと推定している。

他に注意しておくべき資料に生産用具の出土がある。出土地点は西側に設けたトレンチで、且つ暗茶色土層と名付けている包含層である。この層位の年代は出土土器から8世紀後半と考えられ、ここが国分尼寺であると推定されることからその関連が考えられる。付近の調査では寺跡推定地の東側で行った第2次調査で羽口が数点出土しており、寺の周辺で生産活動が行われていたことが窺われる。この包含層の形成は寺の成立以前とみるのか以後と見るのかはこの地点の状況だけでは判断できない（第17次調査及び第Ⅴ章参照）。

（5） 第17次調査

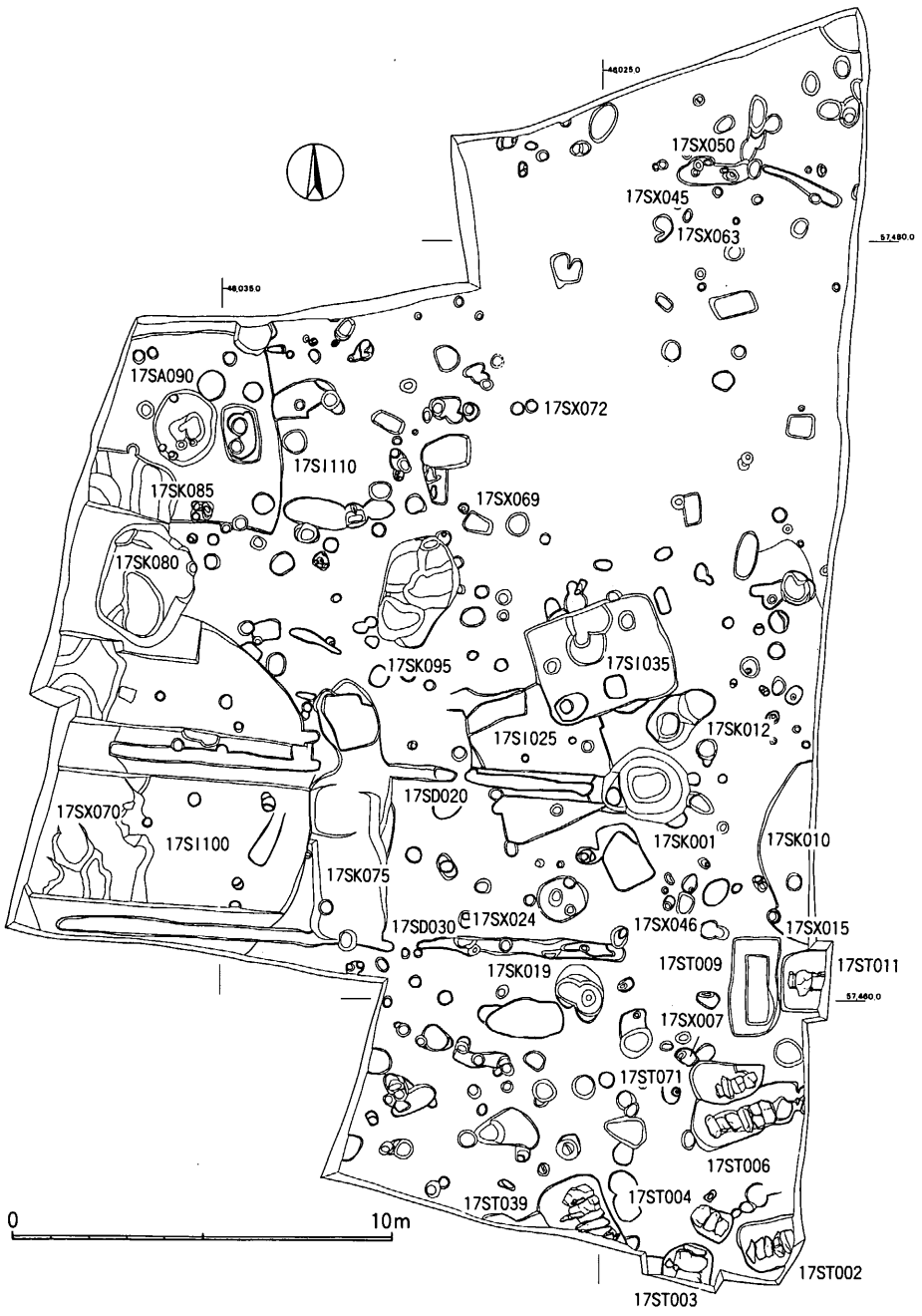


Fig.43 第17次調査遺構配置図（1/200）

調査地は、太宰府市大字国分字松本448－1に所在する。先に報告した第4次、第8次、第13次調査の結果からこの付近が筑前国分尼寺跡の中枢部分の一角と推定されるようになったが、周辺が急激な宅地開発によって年々変貌を遂げていることから、地権者の協力を得て重要遺跡確認調査として発掘調査を実施した。調査は平成4年10月29日から平成5年1月18日まで実施し、対象面積は591㎡、調査面積は508㎡である。調査は狭川真一が担当し、井上信正、河田聡の協力を得た。

なお、発掘調査の性格上尼寺跡に関連する遺構を中心に調査を実施したが、第13次調査のようにそれ以前（主として弥生時代）の遺構にまったく手をつけないことは、この地域の弥生時代研究に対して何らの資料も提供できないという反省から、時間の許す限り尼寺関連遺構を残しつつ調査を行うこととした。また、発掘調査終了後の埋め戻し作業については、遺構内に真砂土を入れるとともに、墳墓については実測図にしたがって石蓋を復原的に配置した後、旧状に復旧した。

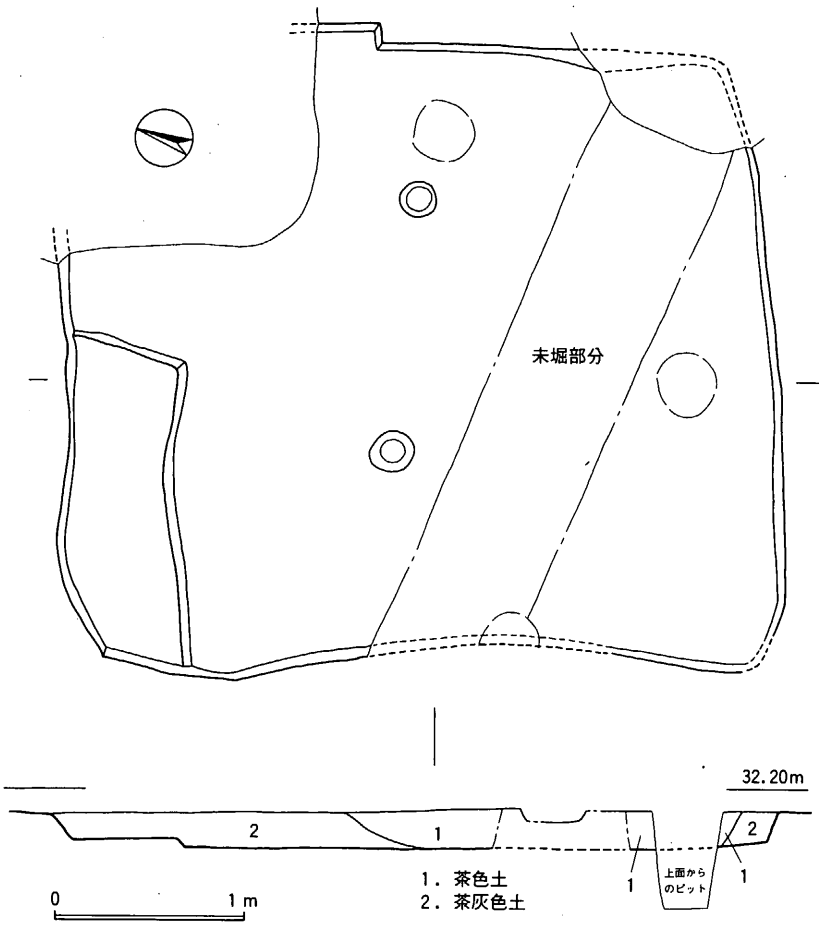


Fig.44 17SI025実測図(1/40)

1．層位

調査前の現況は水田で、表土下は黄褐色粘質土、茶色土（両者同じもので水田の床土）となりこの直下が遺構面を形成する地山となる。地山は南側で黄色粘土の固くしまった地盤であったが、北側の一部では暗茶色砂土のやや不安定な地盤である。遺構面は、墳墓の

石蓋が床土である黄褐色粘質土に一部入り込んでいるところから、かなり削平されているものと考えられる。

2．遺構

調査の結果、弥生時代の竪穴住居5棟、石蓋土壙墓6基、箱式石棺墓1基、木棺墓1基、埋甕遺構1基、歴史時代では溝2条のほか土壙や溜まり状遺構、ピットなどを検出した。

竪穴住居

17SI025(Fig.44、Pla.31・32・34)　南北3.75m、東西3.20m内外、深さ約0.20mを測り、隅丸方形を呈する。遺構の北東隅は17SI035に切られているほか、中央部を17SD020が走っているため十分な調査は行えていない。また遺構の平面プランが北東隅で段状を呈しているが、遺構の切り合いによって、詳細は明らかではない。貼り床は存在しないが、北側壁際西寄り部分を長さ約1.5m、幅約0.5mの範囲に削り残し、ベット状遺構を形成している。

主柱穴は床面中央に穿たれた二つのピットで、深さ約5cmを測る。柱穴の心々距離は1.33mである。埋土は17SI035に比べると単純で、人為的に埋め戻された可能性も考えられる。

17SI035(Fig.45、Pla.31・33・35)　東西3.55m、南北2.80m、床面までの深さ0.21mを測る隅丸長方形の住居跡である。明確な主柱穴は確認されなかったが、南西隅にある長さ0.85m、幅0.71m、深さ約0.04mの浅いピット及び北東隅の直径約0.45m、深さ約0.28

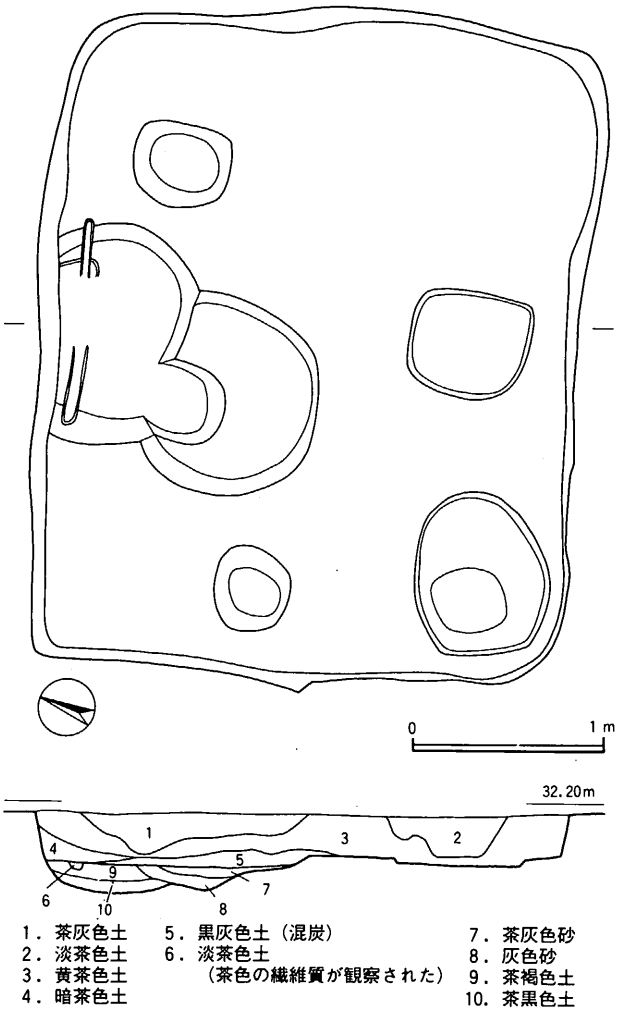


Fig.45　17SI035実測図(1/40)

mのピットはその可能性がある。貼り床は存在しない。住居の北壁際中ほどで、長さ0.30m・0.42m、幅0.07m、深さ約0.04mの小溝を二つ検出した。両者が連続するものであるかどうかは明らかではない。住居の北側中央に存在するピットは住居に伴うものと考えられるが、検出段階ではピットの上面部分が若干窪んでいたもののこの面が生活面として捉えられるものと考えられ、生活段階では埋まっていたものと判断される。なお、小溝はこのピットが埋没したのちに形成されたものである。

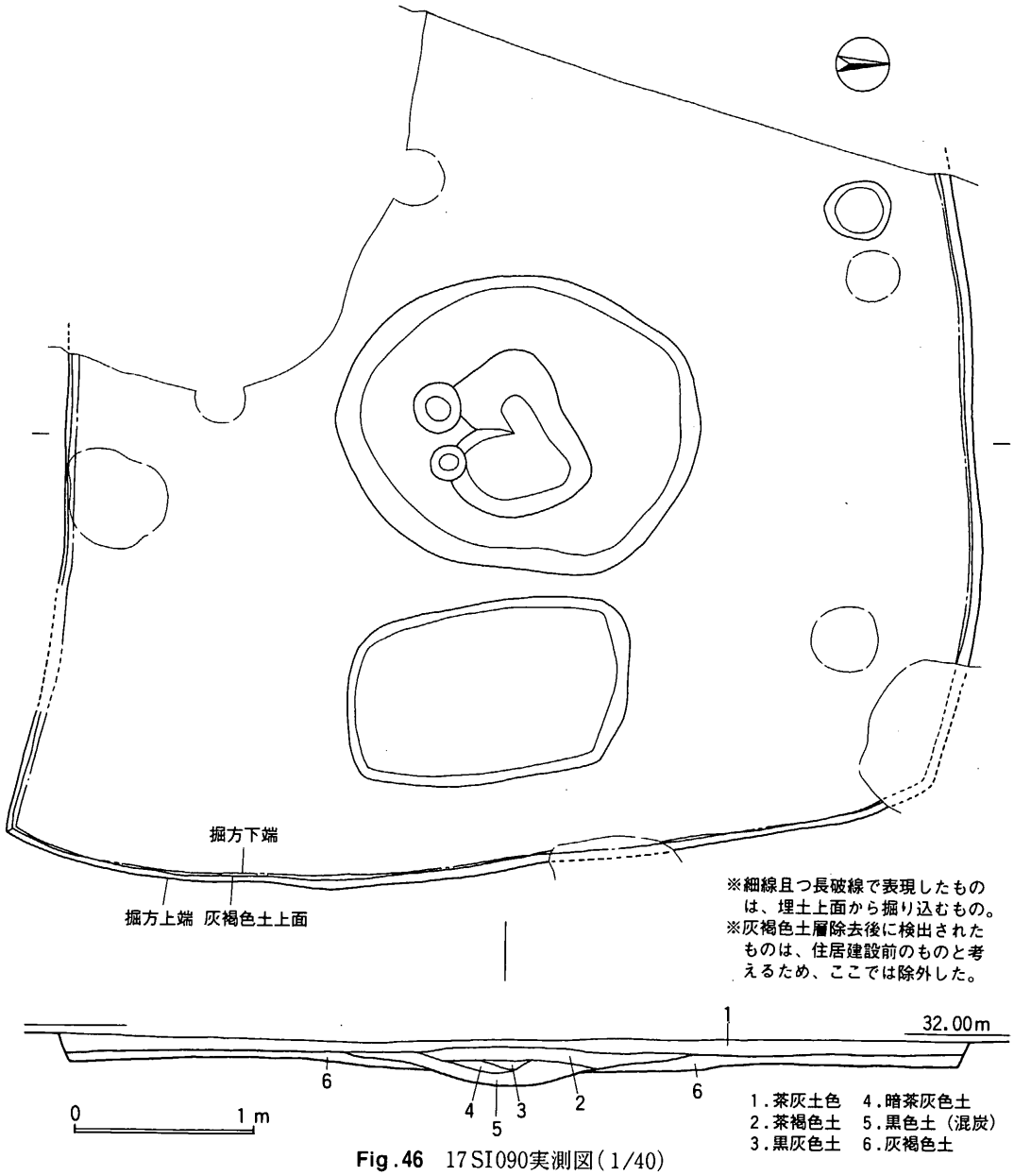


Fig.46 17SI090実測図(1/40)

17SI090(Fig.46、Pla.35)　調査区北西隅で検出された大型でやや歪な方形を呈するものである。南北5.05m、東西4.83m以上、床面までの深さ約0.1mを測る。ほぼ安定した平坦面を形成し、中央部分を除いて検出された灰褐色土を貼り床と判断した。その厚さは約0.05m内外である。明確な主柱穴の痕跡は確認できなかった。床面の中央部は2.00m×1.65m、深さ約0.2mの範囲が盆状に窪んでおり、最下層には炭化物を多く含んだ黒色土が堆積していたことから、炉として使用されていたことを窺わせる。これに隣接する西側のピットは浅い窪み状を呈するものである。

17SI100(Fig.47、Pla.36)　西側を17SX070に切られ、上面には2条の溝があり、さらに調査区外にまで延びているため全体は明らかではないが、推定される直径約9.5m前後の円形を呈する住居跡である。埋土は主体を淡茶色土で占めるが、床面付近に薄く茶褐色土が存在する。当初は床面の可能性も考えたが、柱痕を確認し得なかったこと、全体に広がっていないことなどから堆積土の一部と判断した。

柱穴と考えられるピットは、直径0.3～0.4m程度、深さ0.2～0.3mで、壁際から約1.2m内側を2.2～2.9mの間隔で並んでいる。推定される住居の中心部近くで床面に密着した状態で0.3m×0.2mの平石が検出されたが、性格は不明である。

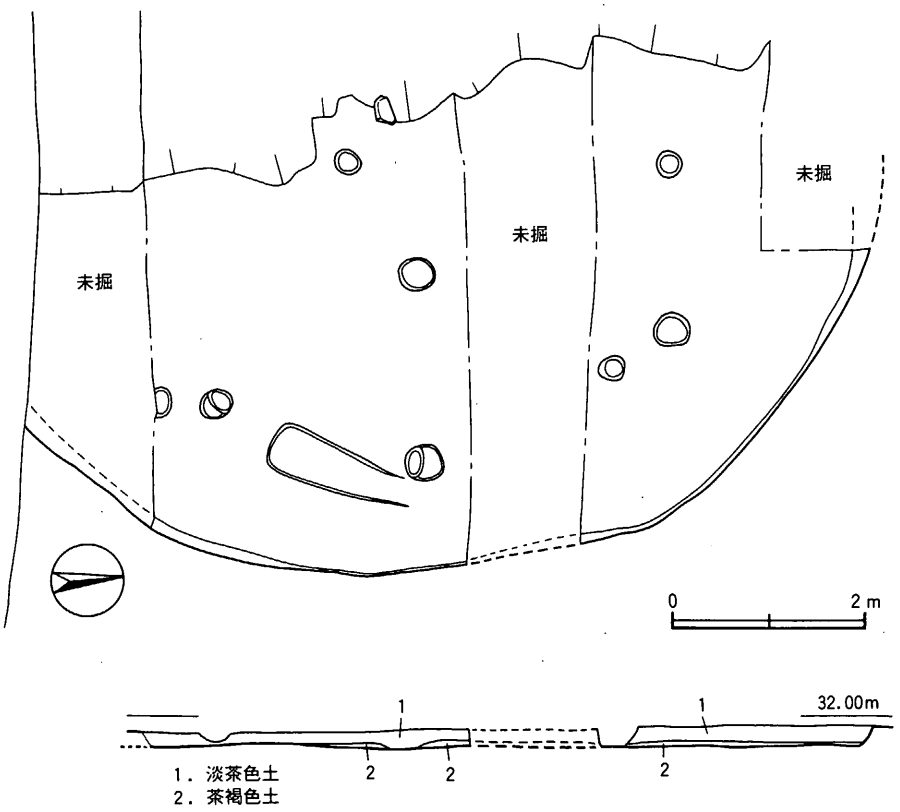


Fig.47　17SI100実測図(1/80)

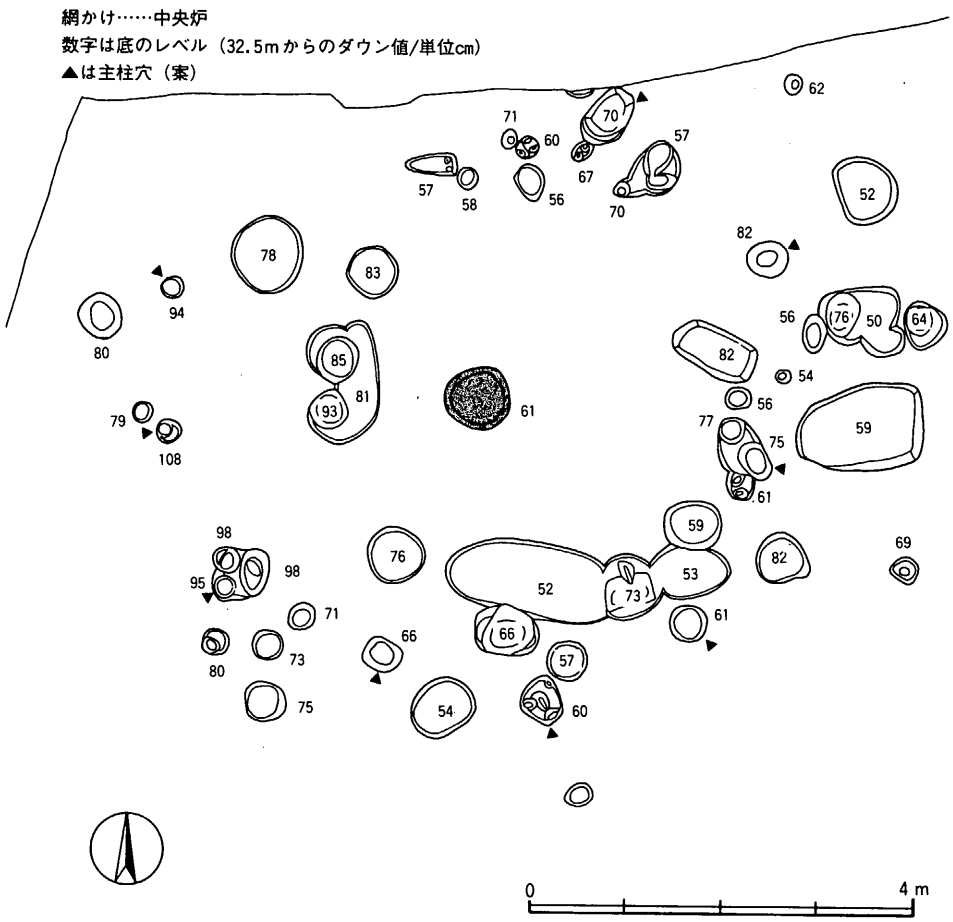


Fig.48 17SI110実測図(1/80)

17SI110(Fig.48、Pla.36) 17SI090 に重複して検出された円形の住居跡である。掘り方はすでに失われており、当初の規模は確認できない。提示した実測図には柱穴の可能性のあるピットをすべて表記したが、妥当ではないかと思われるものに▲印を付した。それらはおよそ1.6m～2.2mの間隔で並び、深さも水準から－0.6m～1.0m程度のものである。これらの柱穴設定部分の直径は約6mである。なお、中央に位置する円形のピットには炭化物が充満しており、炉としての使用が考えられる。17SI090より古いと判断される。

溝（Pla.48･49、別表5）

17SD020 東西方向の溝である。17SK075に切られるほか2箇所で途切れる部分があるが、埋土の共通性と形状から一連のものと判断した。検出した総延長12.8m、幅0.4m内外、深さ0.05～0.1mである。埋土は黒灰色土である。この溝は、およそN-90°40′-Eの振れを有している。

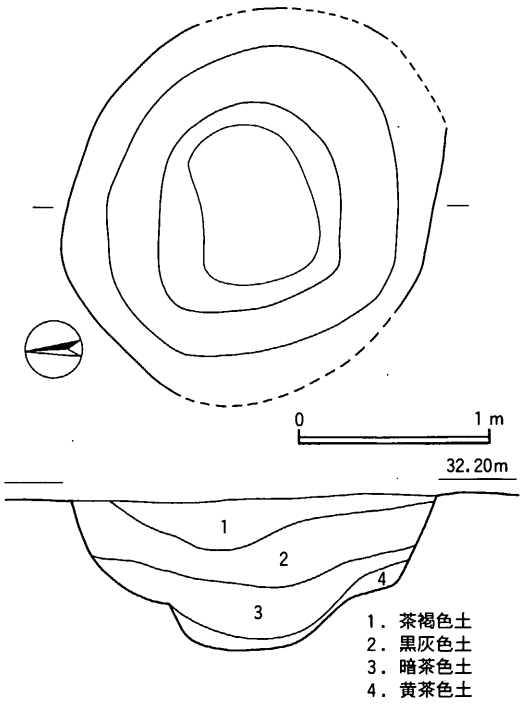


Fig.49　17SK001実測図(1/40)

17SD030　東西方向の溝である。17SK075に切られるほか1箇所で途切れる部分があるが、検出当初は辛うじて連続した状況で検出された一つの溝遺構である。検出した総延長15.0m、幅0.4m内外、深さ0.05～0.1mである。埋土は黒灰色土である。この溝は、およそN－92°50′－Eの振れを有している。

両溝は規模、形状、埋土などが共通するとともに、振れも近似していることから、2本が平行して同時に建設された可能性が強く、2本で一対のものと解釈したい。

土壙

17SK001(Fig.49、Pla.46)　東西1.93m、南北2.22m、深さ0.80mの土壙で、2段になっている。井戸の可能性も考えられるが、ここでは土壙として捉えておきたい。埋土は4層に分層できる。

17SK005(Fig.46)　箱式石棺墓17ST006の上面にある土壙で、長さ2.1m、幅1.05m、深さ0.15mを測る。土壙掘削によって石棺の蓋の一部が剥がされたようで、石棺内に蓋石が落ち込むとともに土壙埋土と同じ土が流れ込んでいた。

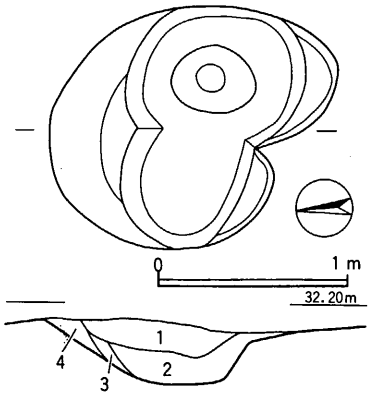


Fig.50　17SK019実測図(1/40)

17SK010　長さ4.1m、幅1.4m以上、深さ0.1mで調査区外に延びる浅い土壙である。

17SK012　17SI035の南東に隣接する小土壙である。長さ2.0m、幅1.0m、深さ約0.2mを測る。埋土中には丹塗の土器が含まれていた。弥生時代に帰属する遺構と考えられる。

17SK019(Fig.50、Pla.45)　墳墓群の北西に位置する土壙である。検出段階では略円形のプランとして認識できたが、完掘すると二つの土壙が合体したような形状を呈している。あるいは切り合っていた遺構ではなかったかと思われる。弥生時代に帰属する遺構と考えられる。

17SK075　長さ7.0m、幅2.2m内外、深さ0.1mを測

る浅い土壙である。埋土は暗灰色系の土で、地山のブロックが混在している。17SD020・030を切っている。

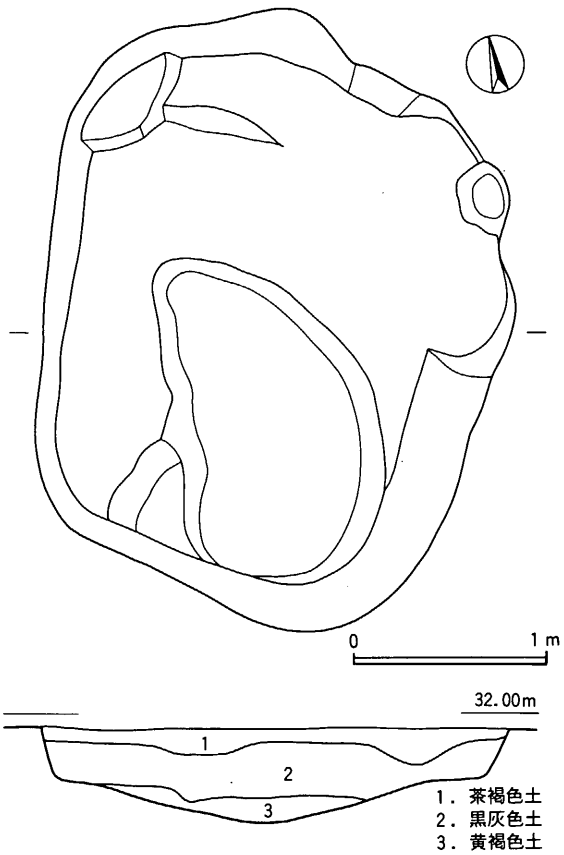


Fig.51　SK080実測図(1/40)

17SK080(Fig.51、Pla.47)　17SK085・17SX070・17SI100を切る大きな土壙で、長さ3.25m、幅2.45m、深さ0.50mを測る。土壙底は凹凸が目立つ。

17SK085　長さ1.4m以上、幅1.2m、深さ0.2mの土壙で、17SX070の埋土の一部を除去すると検出された。また、遺構の南側は17SK080に切られている。

17SK095　長さ2.8m、幅2.0m内外、深さ0.3mの土壙である。灰黒色土を埋土の主体とする。

箱式石棺墓

17ST011(Fig.52、Pla.37)　遺構の大部分を調査区外に残している。検出長1.15m、幅1.68m、検出面からの深さ0.32mを測る墓壙を有する。いつの段階かは不明だがすでに蓋の一部は抜き取られており、内部には土が充満していた。石棺は西小口部分の幅が0.21mであるのに対して検出部東端の幅は0.35mあり、頭位は東に置いていた可能性が考えられる。出土遺物はない。

石蓋土壙墓

17ST002(Fig.53、Pla.38)　墓壙の一部は調査区外に延びており全体は把握できていない。長さ1.45m以上、幅1.33m、検出面から底部までの深さ0.47mを測る。墓壙は東西に主軸を有するもので2段に作られるが、下段は棺としての役割を直接的に担っている。下段墓壙の規模は、長さ1.20m以上、幅0.64m程度である。蓋石は5枚確認されたが、西から東に向かって順に被せたようである。

また東側の蓋石が最も大きいことを併せると、頭位は東に推定しておきたい。なお、後世に開けられた形跡はないが、下段墓壙内にも土砂が充満していた。出土遺物は、埋土中に弥生時代中期とみられる土器の小片が若干みられたが、周辺からの混入品とみられ、直接この遺構の年

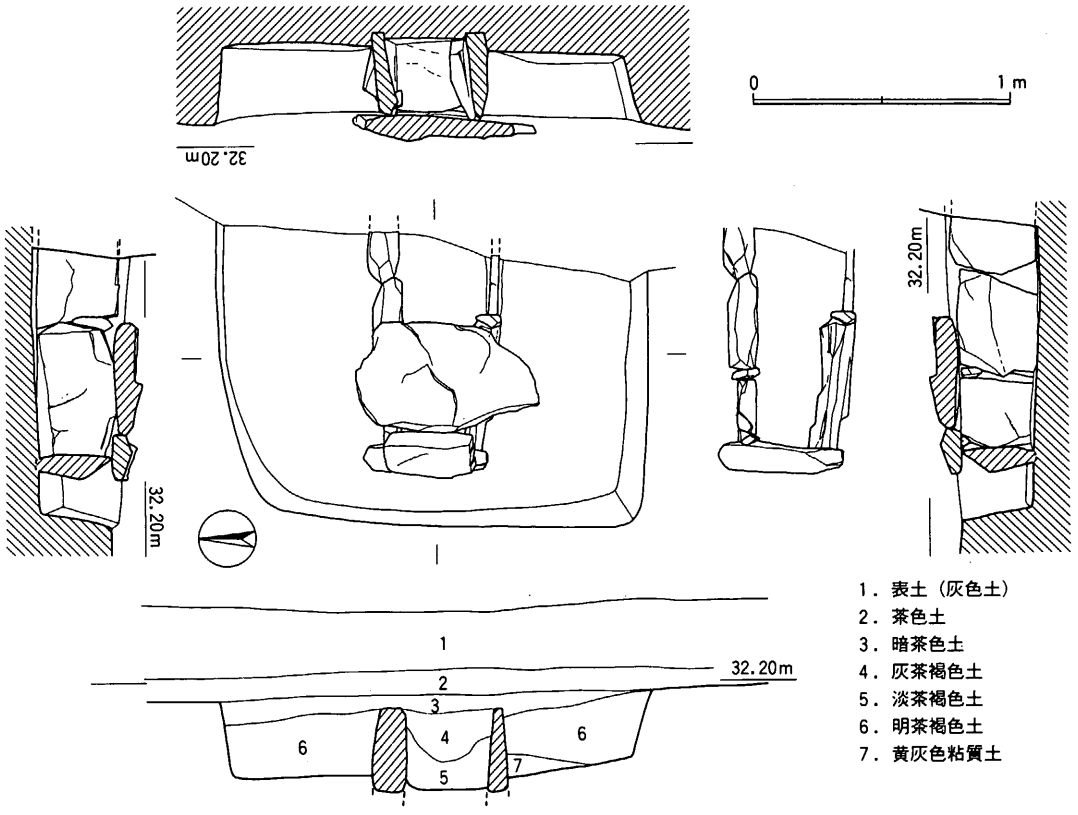


Fig.52 17ST011 箱式石棺実測図及び土層観察図(1/30)

代を語るものではない。

17ST003(Fig.53、Pla.39) 墓壙の一部は調査区外に延びており全体は把握できていない。長さ1.00m以上、幅1.32m、検出面から底部までの深さ0.35mを測る。墓壙は南北に主軸を有するもので2段に作られるが、下段は棺としての役割を直接的に担っている。下段墓壙の規模は、長さ0.72m以上、幅0.63m程度である。蓋石は3枚確認されたが、おそらく南から北に向かって順に被せたものと思われる。また下段墓壙の北小口部分に西に片寄った形ながら小さな段が設けられており、これを作り出しの枕と想定すると、頭位は北に推定しておきたい。後世に開けられた形跡はないが、下段墓壙内にも土砂が充満していた。出土遺物は、埋土中に弥生時代中期とみられる土器の小片が若干みられたが、周辺からの混入品とみられ直接この遺構の年代を語るものではない。

なお、西側に隣接する遺構（切り合いでは17ST003が新しい）にも蓋石と思われる石材が確認されたが、十分な調査を行うことはできなかった。ここにも箱式石棺墓あるいは石蓋土壙墓が存在するものと考えられる。

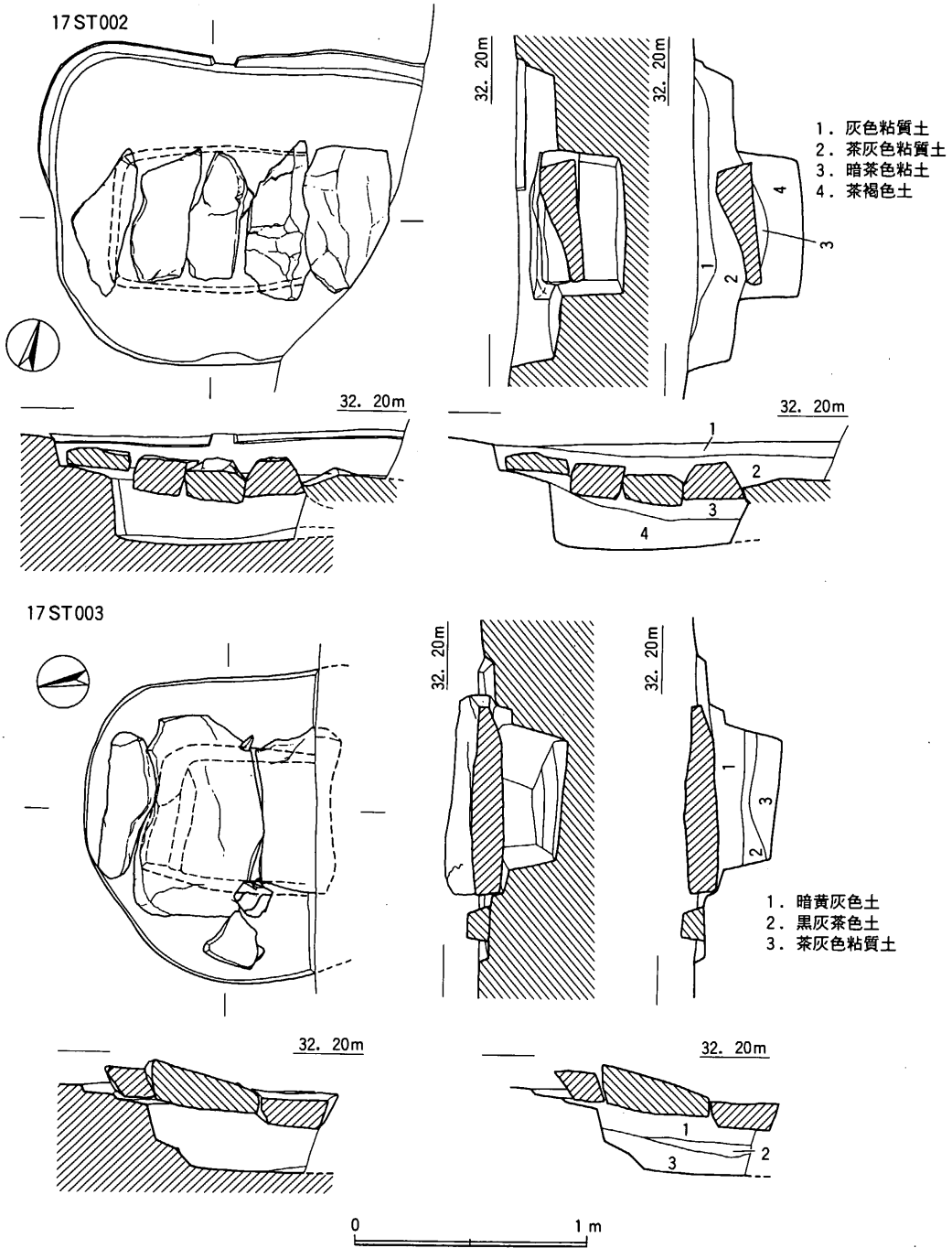


Fig.53 17ST002·003実測図及び土層観察図(1/30)

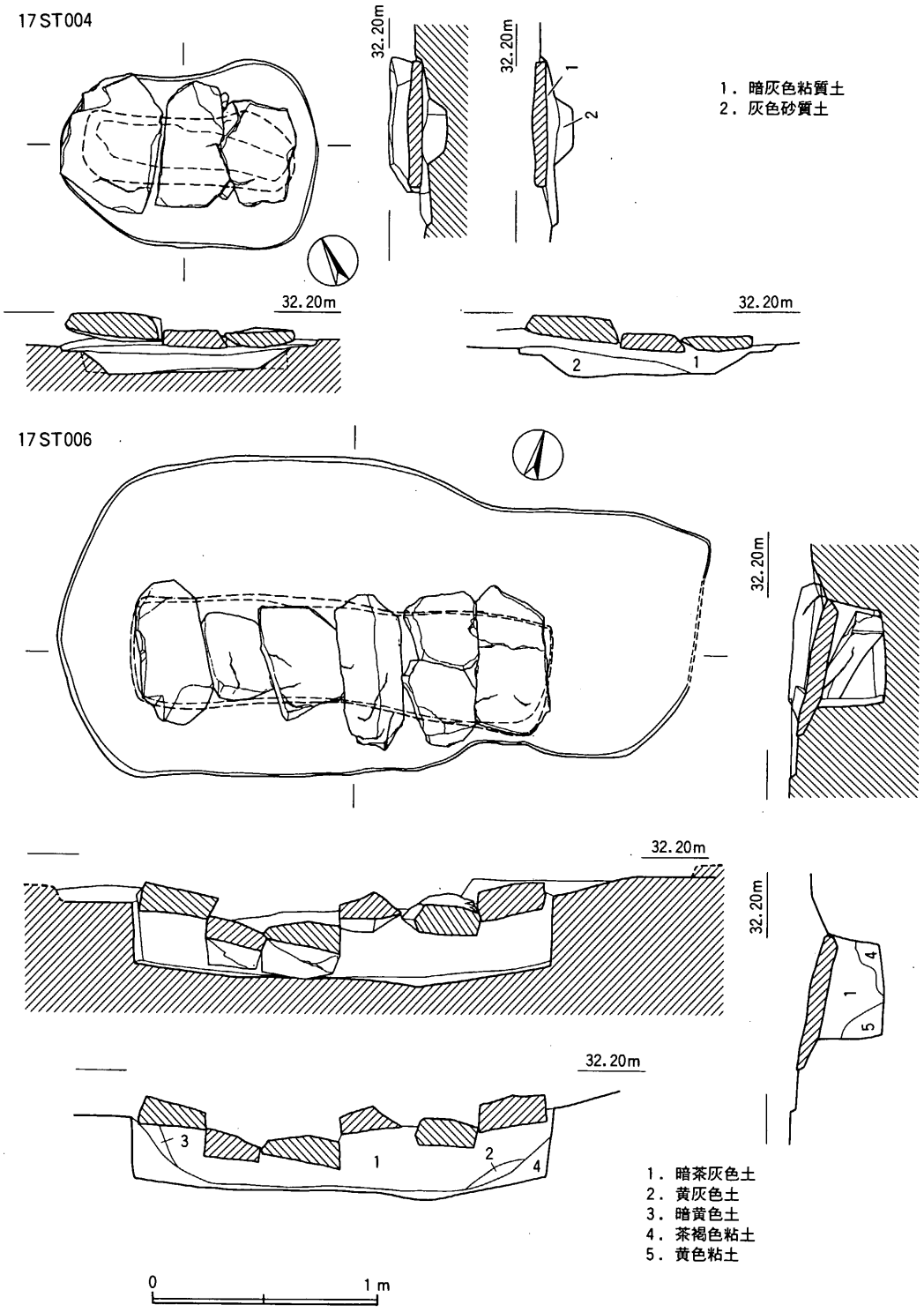
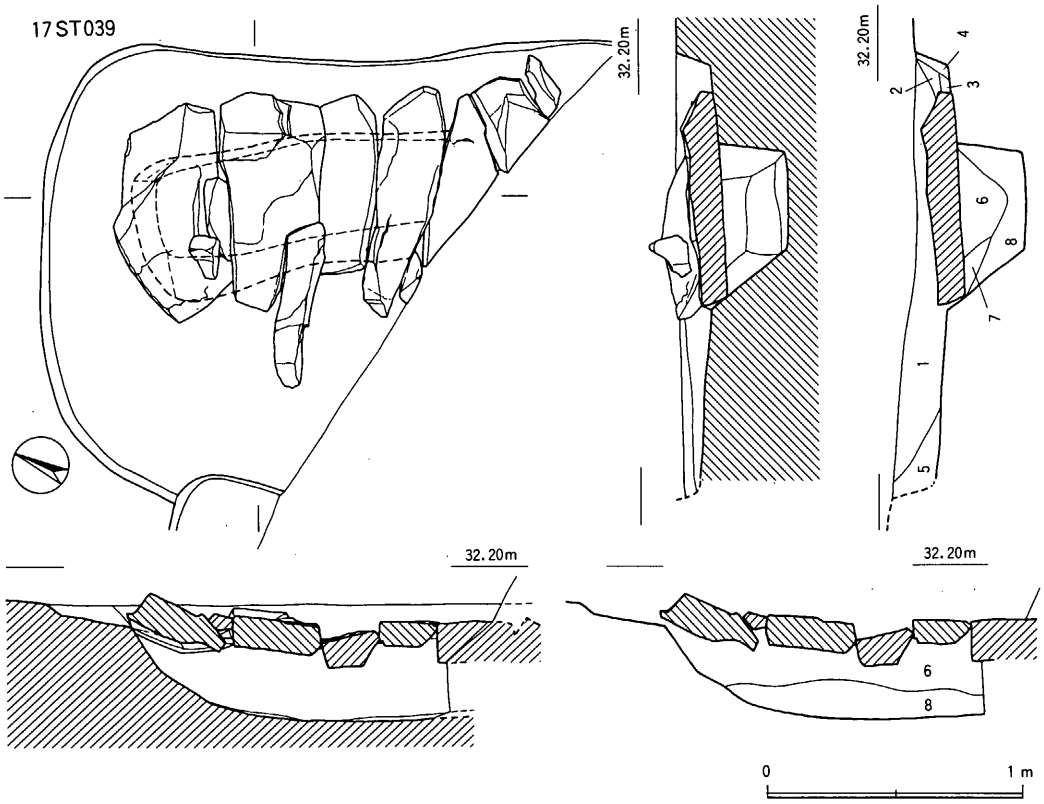
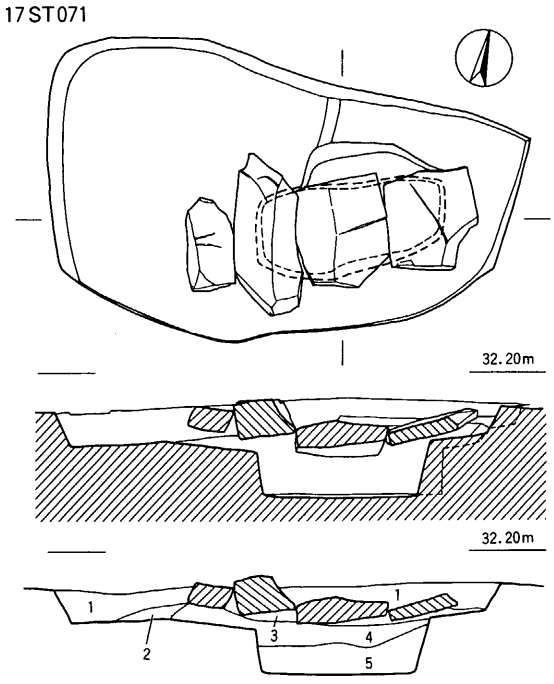


Fig.54 17ST004·006実測図及び土層観察図(1/30)





17ST071土層名一覧

1．灰茶色土
2．灰色砂
3．暗茶色粘土
4．黄灰色土
5．暗灰色土
6．茶褐色粘土

17ST039土層名一覧

1．暗茶褐色土
2．灰黄色砂質土
3．茶灰色粘質土
4．淡黄色砂
5．暗茶色粘質土
6．淡灰茶色土
7．淡茶色砂質土
8．灰色土（地山土ブロック混）

Fig.55　7 ST039·071実測図及び土層観察図(1/30)

17ST004(Fig.54、Pla.40)　略東西軸を有するもので、上段墓壙の規模は、長さ1.15m、幅0.85mを測り、主体となる下段墓壙の規模は、長さ0.94m、幅0.33mで小さな墳墓である。検出面から底部までの深さは約0.15mである。蓋石は3枚で構成され、西から東に向かって被せられたようである。なお、削平段階で透き間が開いたためか、下段墓壙内にも土砂が充満していた。出土遺物は、埋土中に弥生時代中期とみられる土器の小片が若干みられたが、周辺からの混入品とみられ、直接この遺構の年代を語るものではない。

17ST006(Fig.54、Pla.41・42)　略東西軸を有するもので、上段墓壙の規模は、長さ2.85m、幅1.42mを測る。主体となる下段墓壙の規模は、長さ1.89m、幅0.46mである。また下段墓壙はかなり南に片寄った位置に穿たれている。検出面から底部までの深さは約0.40mである。蓋石は6枚で構成される。17ST071箱式石棺と切り合っており、こちらが新しい。また、上面から17SK005が穿たれておりその時に蓋が外されたようであり、墓壙内に土砂が進入している。出土遺物は、埋土中に弥生時代中期とみられる土器の小片が若干みられたが、周辺からの混入品とみられ、直接この遺構の年代を語るものではない。

17ST039(Fig.55、Pla.43)　墓壙の一部は調査区外に延びており全体は把握できていない。長さ2.50m以上、幅1.75m程度、検出面から底部までの深さ0.46mを測る。墓壙は略南北に主軸を有するもので2段に作られるが、下段は棺としての役割を直接的に担っている。

下段墓壙は掘り方内の東に片寄って穿たれており、その規模は、長さ1.50m以上、幅0.57m程度である。蓋石は6枚確認されたが、南から北に向かって順に被せたようである。下段墓壙の北小口部分が他の部分より若

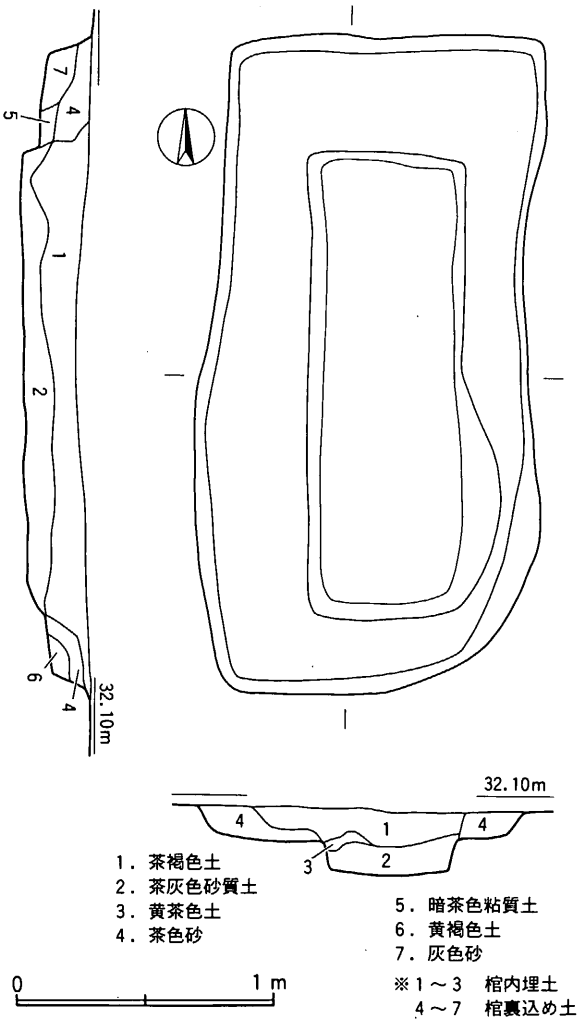


Fig.56　17ST009実測図(1/30)

干広いことから、頭位は北に推定できるのではなかろうか。なお、後世に開けられた形跡はないが、下段墓壙内にも土砂が充満していた。出土遺物は、埋土中に弥生時代中期とみられる土器の小片が若干みられたが、周辺からの混入品とみられ直接この遺構の年代を語るものではない。

17ST071(Fig.55、Pla.41・42) 上段墓壙の規模は、長さ1.88m、幅1.20mを測るが、主体となる下段墓壙の規模は、長さ0.75m、幅0.38mと極端に小さい。また下段墓壙はかなり東に片寄った位置に穿たれている。検出面から底部までの深さは約0.40mである。蓋石は4枚で構成され、東から西に向かって被せられたようである。下段墓壙の規模も西側がやや広いことから、頭位は西側に推定しておきたい。なお、後世に開けられた形跡はないが、下段墓壙内にも土砂が充満していた。出土遺物は、埋土中に弥生時代中期とみられる土器の小片が若干みられたが、周辺からの混入品とみられ、直接この遺構の年代を語るものではない。

木棺墓

17ST009(Fig.56、Pla.44) 箱式石棺17ST011の西側に隣接するが、切り合い関係はない遺構である。略隅丸長方形で、2段掘りになる墓壙を有している。上段の規模は長さ2.58m、幅1.30m、下段の規模は長さ1.84m、幅0.60m、検出面から底部分までの深さ0.21mを測る。プラン検出段階では不明瞭であったが土層観察の結果では、土層番号4～7が下段の掘り方の立ち上がりにほぼ合致しており、こうした状況は木棺墓の裏込め土であることを窺わせた。

これらの点から木棺の規模は、下段掘り方下面の規模程度と考えられ、長さ約1.74m、幅約0.50m程度ではなかったかと推定している。なお、木棺内に堆積する土層1内で、棺西端中央付近から鉄鏃1点が出土したが、不注意から十分な記録が取れなかった。

その他の遺構

17SX072(Fig.57、Pla.45) 土器埋納遺構とみられる。0.37m×0.34mの略円形で、上面を削平されているものの深さ約0.12mを測る。ピットの底部は平坦である。このピットの中央にわずかに北側へ傾いた状況ながらほぼ正位置に据えられた甕が検出された。弥生時代に帰属する遺構と考えられる。

17SX007 箱式石棺17ST071を切るピットで、長さ0.8m、幅0.5m、深さ0.1mを測る。

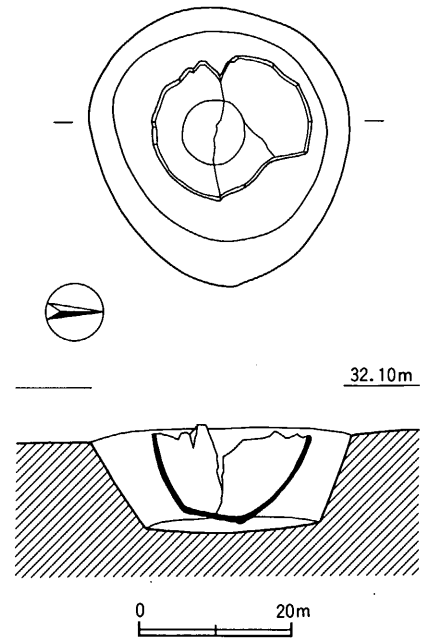


Fig.57 17SX072実測図(1/10)

17SX015 17SK010に切られたピットで、東側は調査区の外に延びている。長さ1.0m以上、幅0.8m以上、深さ約0.1mを測る。

17SX024 直径0.15mの小ピットである。弥生時代に帰属する遺構と考えられる。

17SX045 調査区北端近くで検出された隅丸長方形の浅いピットである。

17SX046 墳墓群と小型で方形の住居跡の中間に位置するピット群である。弥生時代に帰属する遺構と考えられる。

17SX050 調査区北端近くで検出されたピットで17SX045に切られている。

17SX063 調査区北端近くで検出されたピットで、龍泉窯系青磁の出土から中世まで下る遺構である。

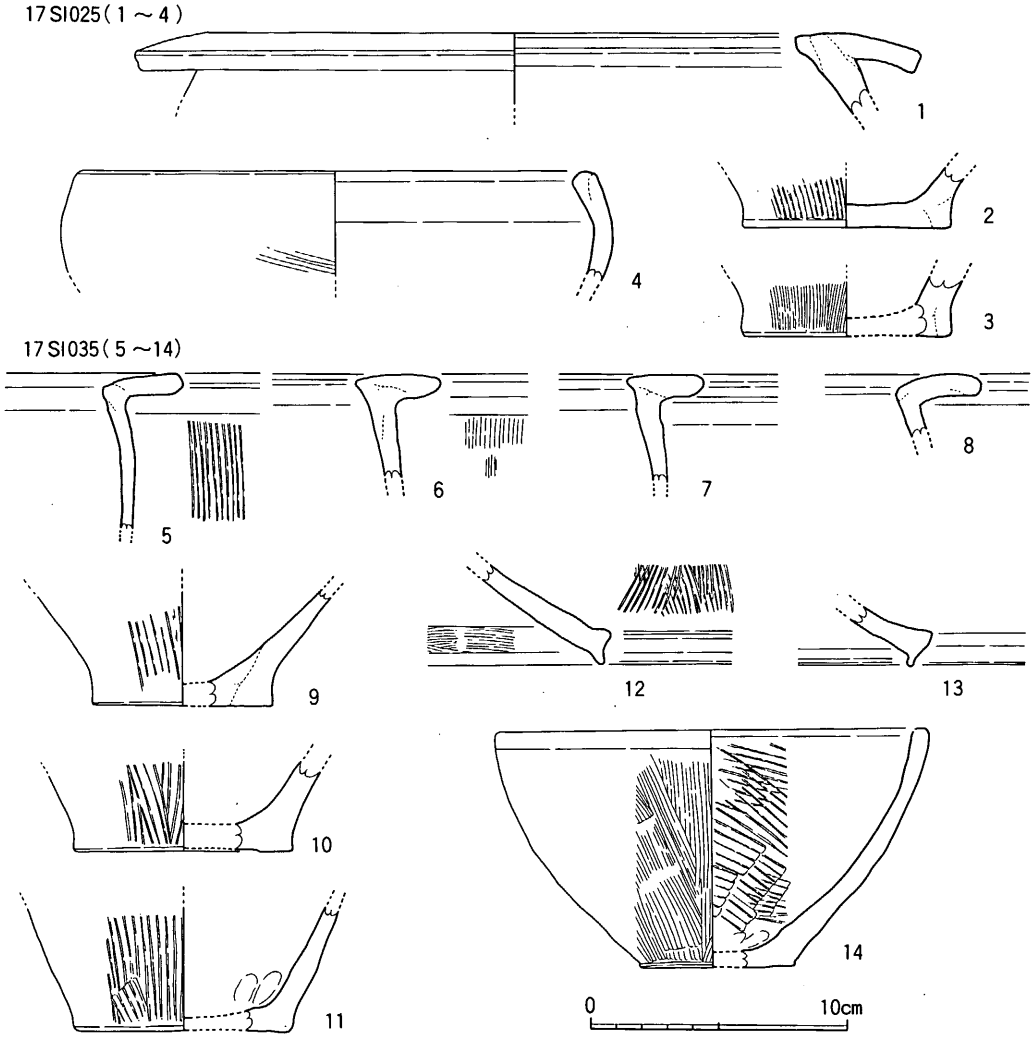


Fig.58 17SI025・035出土土器実測図(1/3)

17SX069 17SK095土壙の東側に位置するピット群である。弥生時代に帰属する遺構と考えられる。

17SX070 調査区西端で検出された南北方向の大きな段落ち状遺構である。埋土は西南隅部上位から順に淡茶色土、黄白色土、黒色土、茶黄色土の順で堆積するが、遺構の90%以上の埋土は黒色土である。すべて東側から埋められていった形跡が認められる。弥生時代の住居跡17SI100を切っているが、歴史時代の主要遺構である17SD020・030・17SK080などはこの遺構の上面から穿たれている。検出長13.0m、幅3.8m以上、深さ0.2m程度を測る。

3．出土遺物

竪穴住居出土土器

17SI025出土土器（Fig.58）

弥生土器

甕（1～3） 1は、口径30.8cmを測る。外面には丹が塗布される。2・3は底部の資料で、底径8.0cm。外面にハケ目を施す。

鉢（4） 口径20.2cmで口縁端部はやや肥厚気味に作られる。

2はピット中から、他は茶灰色土中から出土した。

17SI035出土土器（Fig.58、Pla.50）

弥生土器

甕（5～11） 5～8は口縁部の各資料である。9～11は底部の資料で、底径7.1～8.6cmを測る。

鉢（14） 口径17.0cm、器高9.3cm、底径6.1cm。内外面ともハケ目である。

9はピット中から、14は暗茶色土中から、他は暗灰色土中から出土した。

17SI090出土土器（Fig.59）

弥生土器

甕（1・2） 口縁部の資料である。

壺（3・4） 3は、口径21.8cmで、外面は丹塗りが施されている。4は、胴部最大径15.4cmを測る。外面はハケ目、内面には粘土の接合部が明瞭で、その部分は指圧痕が顕著に観察される。

1・2はピット中、3は茶灰色土、4は灰褐色土の出土である。

17SI100出土土器（Fig.59）

弥生土器

甕（5・8） 5は口径30.4cmで外面はハケ目である。6は口径29.8cmで、外面の調整は残存部分の範囲内でヨコナデである。7は底径7.5cm、8は底径7.9cmである。いづれの資料も淡茶色土中から出土した。

溝出土土器

17SD030出土土器（Fig.62）

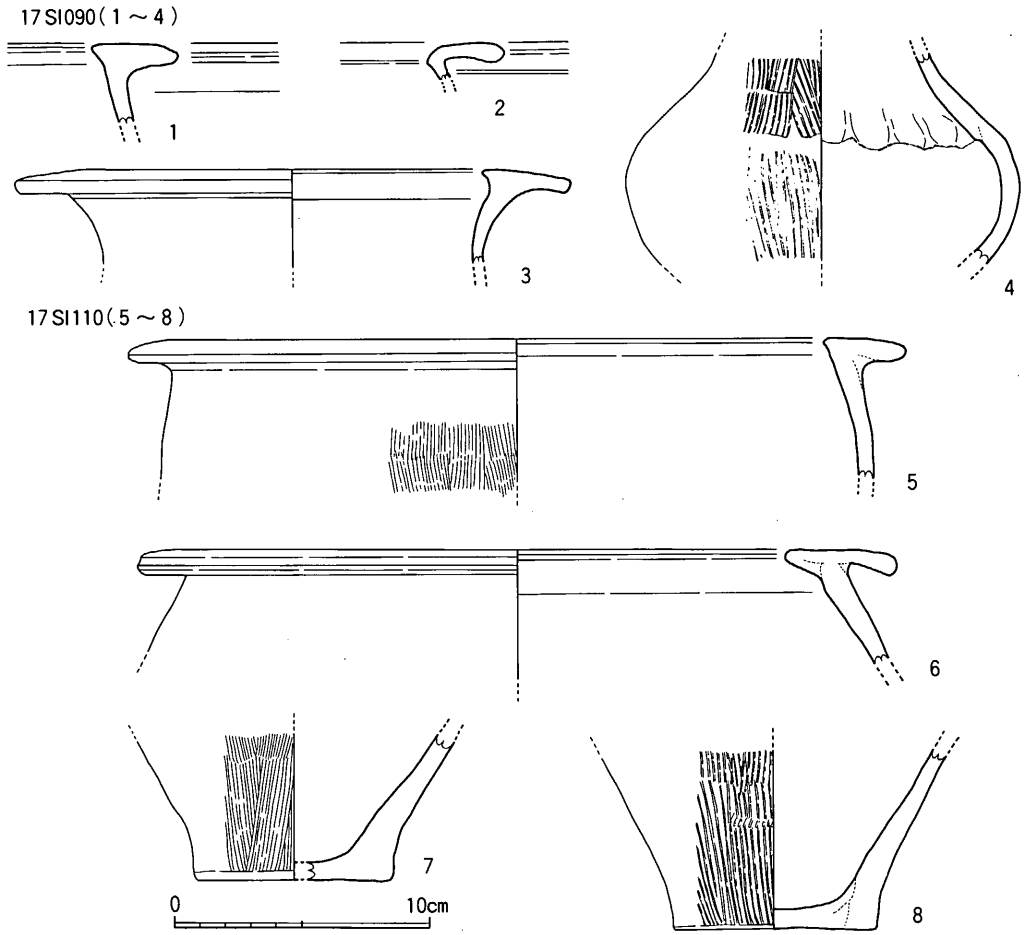


Fig.59 17SI090·100出土土器実測図(1/3)

須恵器

蓋3(8) 口径17.6cm。端部の摘み出しは不明瞭である。

土師器

鉢(9) 底径11.2cmを測る。内外面とも調整は回転ヘラミガキである。

土壙出土土器

17SK012出土土器 (Fig.63)

弥生土器

高坏(1・2) 1は口径26.8cm、坏部分の高さ5.6cmを測る。内外面ともに丹塗りを施す。2は脚部分の資料で、外面には縦方向のヘラミガキがみられ、丹が塗布される。内面には少量の丹が飛散している。

甕(3～8) 3～5は口縁部の資料。6は口径22.0cmで体部上位に低い貼り付けた突帯が巡る。残存部分の調整はヨコナデ。7・8は底部の資料である。

17SK019出土土器 (Fig.63、Pla.50)

弥生土器

器台(9)　口径11.6cm、器高10.6cm、底径11.7cmを測る。外面はハケ目、内面はナデ調整である。

17SK095出土土器（Fig.62、Pla.50）

須恵器

蓋c(1)　天井部はヘラケズリされる。やや押し潰された宝珠形の摘みを有する。

蓋3(2・3)　2は、口径13.0cm。天井部はヘラ切りのままである。残存状態から摘みの存在が確認される。3は口径17.0cm。

坏a(4)　口径12.2cm。ヘラ切り後粗いナデを施す。口縁部付近に油煙が付着している。

坏c(5～7)　口径10.4～13.0cm、器高3.2～3.9cmを測る。

木棺墓出土遺物

17ST009出土土器（Fig.60、Pla.50）

弥生土器

鉢(1)　手づくねのミニチュア製品である。全体を指圧によって成形する。口径3.4cm、器高2.8cm、高台径2.4cmである。茶色土中から出

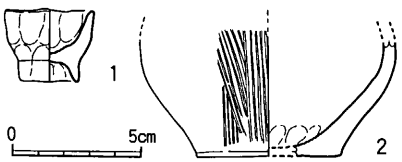


Fig.60　17ST009
出土土器実測図(1/3)

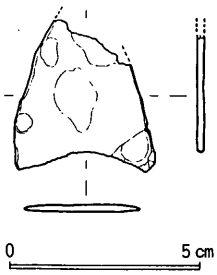


Fig.61　17ST009出土鉄器実測図(1/2)

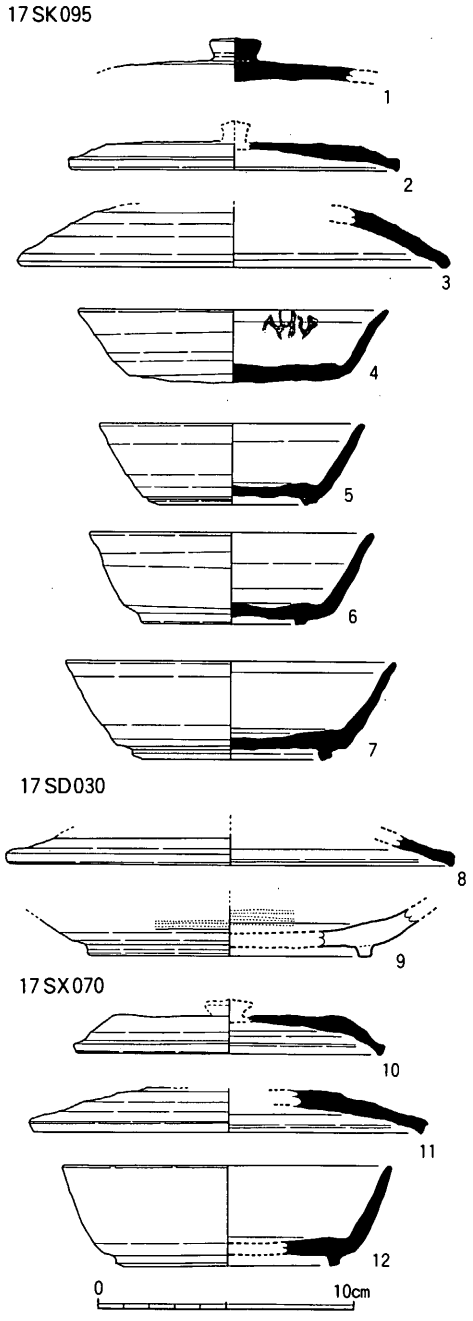


Fig.62　第17次調査各遺構出土土器実測図(1/3)

土した。

壷(2) 底径5.6cm。内面はナデ調整されるが、外面はハケ目である。器面は荒れている。茶色土中から出土した。

17ST009出土鉄器 (Fig.61、Pla.50)

鏃(1) 現在長4.0cm、幅3.7cm、厚さ0.2cmを測る。抉りは少ない。

その他の遺構出土土器

17SX024出土土器 (Fig.64)

弥生土器

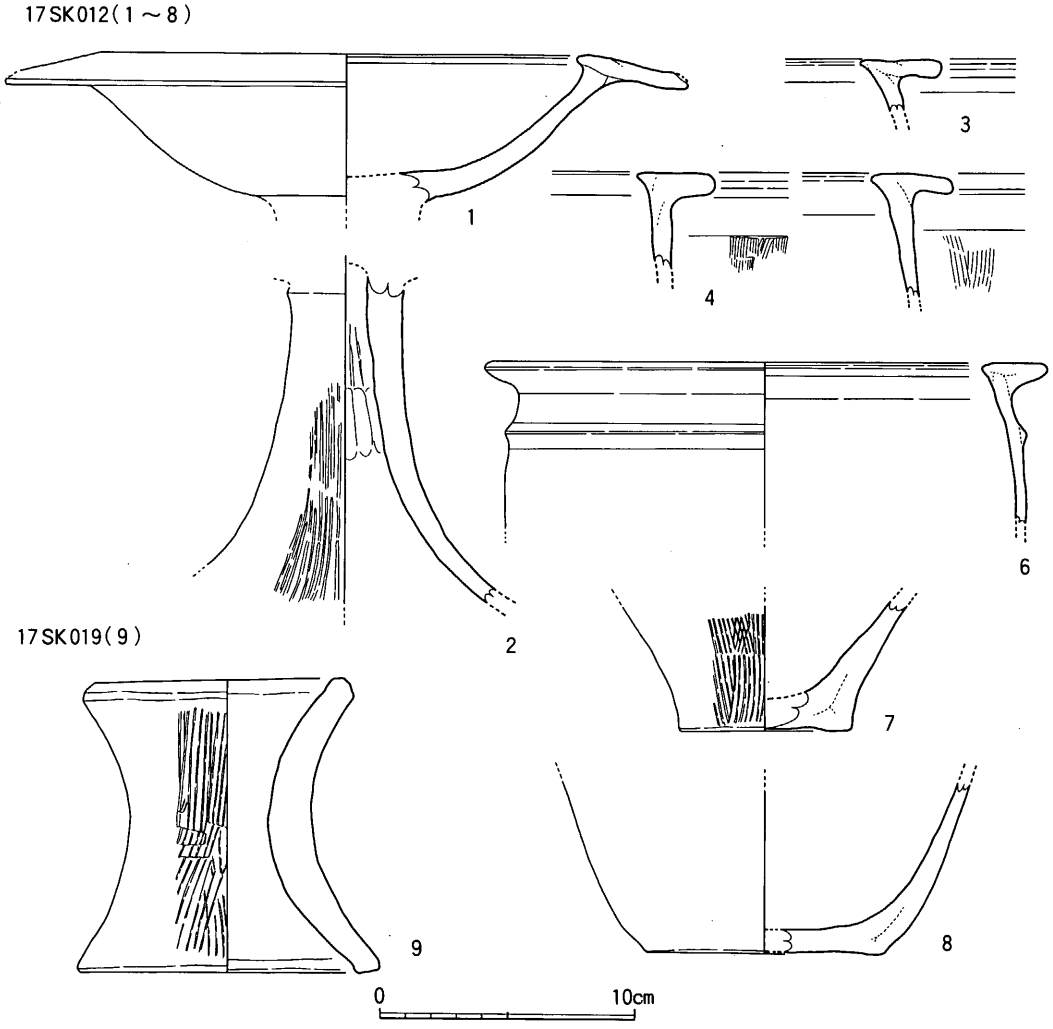


Fig.63 第17次調査土壙出土土器実測図(1/3)

壷(1) 底径7.1cmで、外面にはヘラミガキが顕著に認められ、丹が塗布される。内面はナデ調整され、少量の丹が散布している。

17SX046出土土器 (Fig.64)

弥生土器

壷(2) 口径14.6cmを測る丹塗りの小壷である。口縁部に5mm内外の穿孔が2箇所ある。

17SX069出土土器 (Fig.64)

弥生土器

甕(3) 底径9.8cmを測る。外面はハケ目で、外底は粗いナデが施されている。

17SX070出土土器 (Fig.62)

須恵器

蓋3(10・11) 口径12.2・15.3cmを測る。両者とも天井部をヘラ切りの後粗いナデ調整を施す。

坏c(12) 口径13.0cm、器高4.0cm、高台径8.8cmを測る。

いづれの資料も黒色土中から出土した。

17SX072出土土器 (Fig.64、Pla.50)

弥生土器

甕(4) 底径9.2cm、胴部最大径18.5cm、残存高14.0cmを測る。外面下半はハケ目、上位は

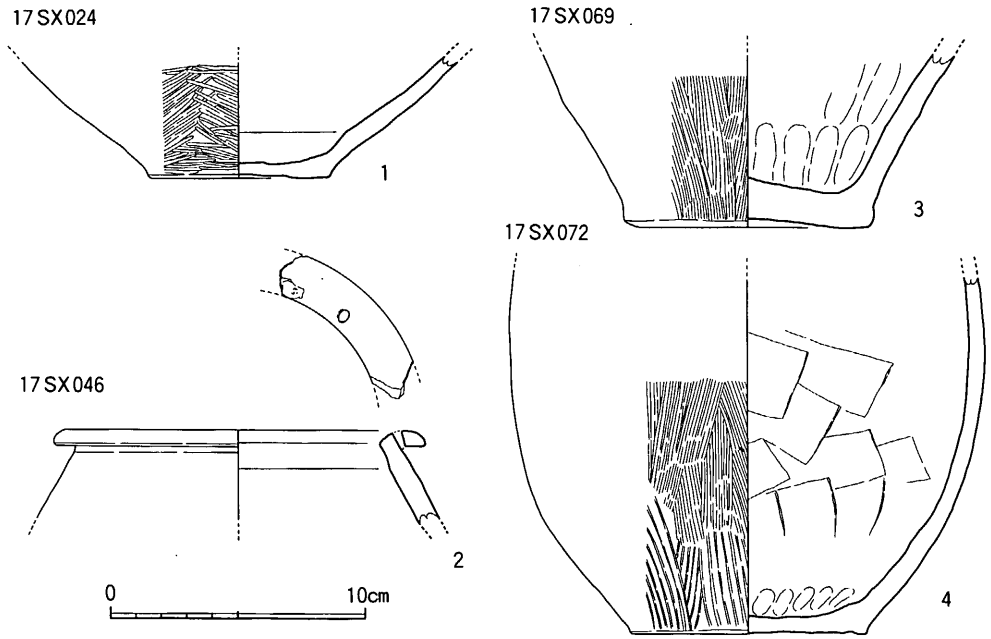


Fig.64 第17次調査各遺構出土土器実測図(1/3)

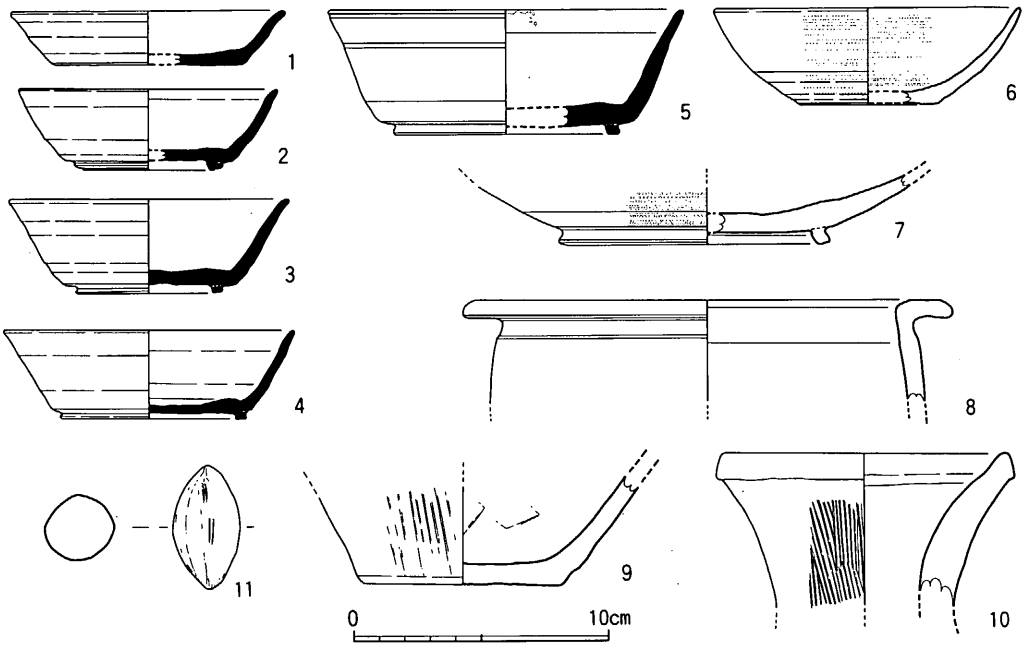


Fig.65　第17次調査茶色土層出土土器実測図(1/3)

ヨコナデである。

茶色土層出土土器（Fig.65）

須恵器

坏a(1)　口径10.8cm、器高2.1cmを測る。底部はヘラ切りの後粗いナデを施す。

坏c(2～5)　口径10.2～14.0cm、器高3.2～4.9cmを測る。底部はヘラ切りである。5の口縁部の一部に油煙が付着する。

土師器

坏d(6)　口径12.0cm、器高3.8cmを測る。外面下半から底部にかけて回転ヘラケズリを行い、内外面ともに回転ヘラミガキを施す。

鉢(7)　高台径10.6cmを測る。外面は回転ヘラケズリで成形され、内外面ともにヘラミガキを施す。

弥生土器

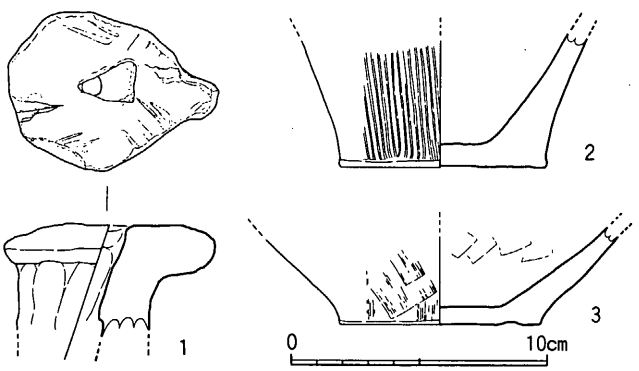


Fig.66　第17次調査におけるその他の出土遺物

甕(8・9)　8は口径19.2cmを測る小型のもので、残存部分の調整は内外面ともにナデである。9は底部の資料で外面にハケ目を施す。

器台(10)　口径11.0cm。外面はハケ目調整を施す。

土製品

投弾(11)　長さ4.9cm、径2.5～2.7cmを測る。

その他の出土遺物

弥生土器 (Fig.66)

器台(1)　台部の一方を摘み出すもので、長さ8.3cmである。17SK080の混入品である。

甕(2)　底径8.1cm。外面はハケ目調整を施す。17SX070茶黄色土の混入品である。

壷(3)　底径7.9cm。調整は風化により不明瞭である。17SX070茶黄色土の混入品である。

石器 (Fig.67)

石包丁(1・2)　いずれも両刃の石包丁で、1は輝緑凝灰岩製とみられ、17SI090茶灰色土出土。2は泥岩製とみられ、17SD030の混入品である。

砥石(3)　一面のみ顕著な使用痕がある。小口面と裏面は自然面、他は簡単な加工を施す。泥岩製。17SD020出土。

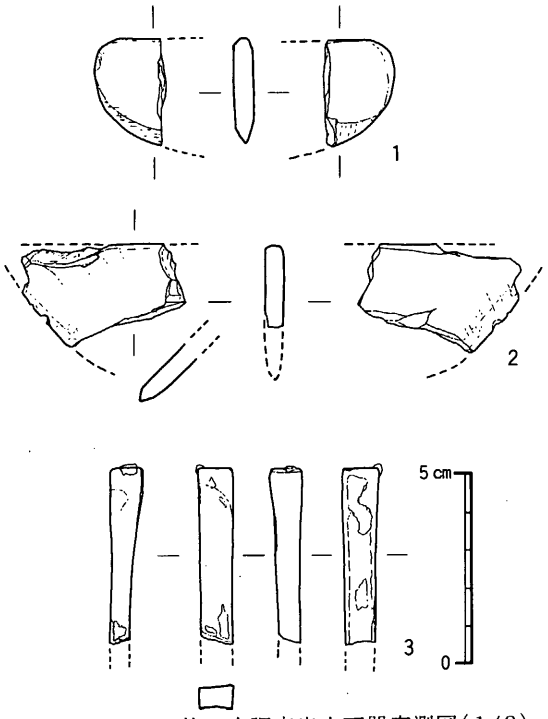


Fig.67　第17次調査出土石器実測図(1/2)

4．小結

今次の調査では弥生時代中期から後期にかけての遺構群と奈良時代から平安時代にかけての遺構群という大きく二つの時代の遺構が確認された。なかでも奈良時代以降のものは筑前国分尼寺に直接関係するものを含んでいると思われるため、ここではその時期のものを中心に検討することとしたい。なお、弥生時代の遺構については周辺に位置する国分松本遺跡で多くの成果があがっており、これらと併せて検討することが望ましいと考えるため、検討はその報告の機会に譲りたい。では以下に遺構別に検討を加える。

溝

2条の溝17SD020・030は近似した規模と振れを有していることから対になるものと考えられる。両者の心々距離はおよそ4.3～4.6mであり、これに挟まれた空間に同時期の遺構は確認されていない。この条件は道路に適用されるものに近似するが、両者とも東はY-46,025.0m付近

で途切れてそれ以上東には延びず、西側も同様の傾向にあって道とするにはやや問題が残される。この調査は、筑前国分尼寺の伽藍内の可能性を考えて設定したことを踏まえ、溝の規模や深さを考慮すると雨落ち溝的な性格を想定したほうがよさそうである。

これから想定できるのは東西方向に長い建物で、且つ切妻のような屋根の形状をしたものであろう。つまりここでは南面回廊の西半分の可能性が考えられ、柱の痕跡は何等確認できていないが、遺構面の削平状況からみて礎石建物の可能性を想定しておきたい。南北の柱間を3m程度と理解するならば溝に挟まれる空間にうまく収まることになる。

また、これが回廊とすると17SK005付近に中門が想定されるはずであるが、その部分には雨落ち状の遺構は確認されていない。また、掘り込み地業も行われていないことが弥生時代の遺構の存在から推定できる。この点については遺構面の大きな削平もその要因として考えられるが、隣接地の調査結果を見ないかぎり即断は困難である。

なお、終章で詳しく検討するが、中門の一部が今次の調査区にかかっているとすれば、金堂の一部もかすめているはずである。しかしながらそれを示す顕著な遺構は見つかっていない。

段落ち状遺構

17SX070とした段落ち状の遺構は、他の遺構との前後関係から回廊の雨落ち溝と推定した17SD020·030よりも古いものであることは確実である。17SX070から出土した遺物が示す年代は概ね8世紀後半に捉えられるもので、国分尼寺創建との絡みで問題になるところである。先の溝遺構を回廊と関係付けて考えるならば、少なくとも回廊は8世紀後半ないしはその直後に建設されたことになる。回廊が国分尼寺の建設において主要伽藍を構成する他の建物と比較してどの段階で作られたかは明らかではないが、伽藍の一部が8世紀後半段階まで建設が下る可能性を示唆するものと捉えておきたい。

なお、この遺構は南北に長く延びているようであり、第13次調査で確認した暗茶色土層と同じものである可能性が考えられる。

土壙

調査区内でいくつかの土壙を検出しているが、回廊遺構の廃絶を示す位置に穿たれているのが17SK001・010・075の三者である。いづれも少量の遺物を出土したのみで、具体的な構築年代は押さえにくい。しかし、その若干の資料をみると、17SK001では、瓦片及び9世紀前半から中頃の土師器片を含んでいる。17SK010では瓦片、17SK075では土師器の小片や瓦片などから平安時代まで下る可能性が考えられる。つまりいづれの遺構も8世紀には遡り得ず、寺院あるいは建物の廃絶の後構築された可能性が強い。つまり、9世紀に入ってあまり下らない時期にはこの付近の建物等は廃絶していたことが、間接的ながら窺われる。

Ⅳ．礎石の移転

1、移転の経緯

現在国分公民館駐車場に整備されている礎石は、国分2丁目462-4の水田に土留め用の石垣として利用されていたもので、筑前国分尼寺跡所在地の推定根拠とされてきたものである。

昭和58年度より進められた市道田中－松本線道路改良事業に伴なう耕地整備によって、移動を余儀なくされたため、土地所有者である中島正行氏の御好意により現在地に移転整備された。御協力いただいた中島正行氏および国分区の方々に感謝申し上げる次第である。また併せて礎石の説明のため、説明板を設置している。

2、礎石の概要

礎石は、花崗岩製で、柱座のある面以外は自然面をうまく利用しており、側面を部分的に打ち掻きによって成形し、下位が尖る錘形を呈している。柱座の径は、上面が約68cm、柱座下端が約70cm、高さは1～1.5cmを測り、ほぼ円形を呈している。

礎石の旧在地はこれまで筑前国分尼寺とされていたが、当該地隣接地の調査ではこの位置に筑前国分尼寺はなかった（第Ⅴ章参照）ようで、これを国分尼寺所用の礎石と断定できない状況にある。柱の規模もかなり大きく筑前国分寺所用のものであったことも含めて、旧在地の特定は将来の課題として残さざるを得ない。

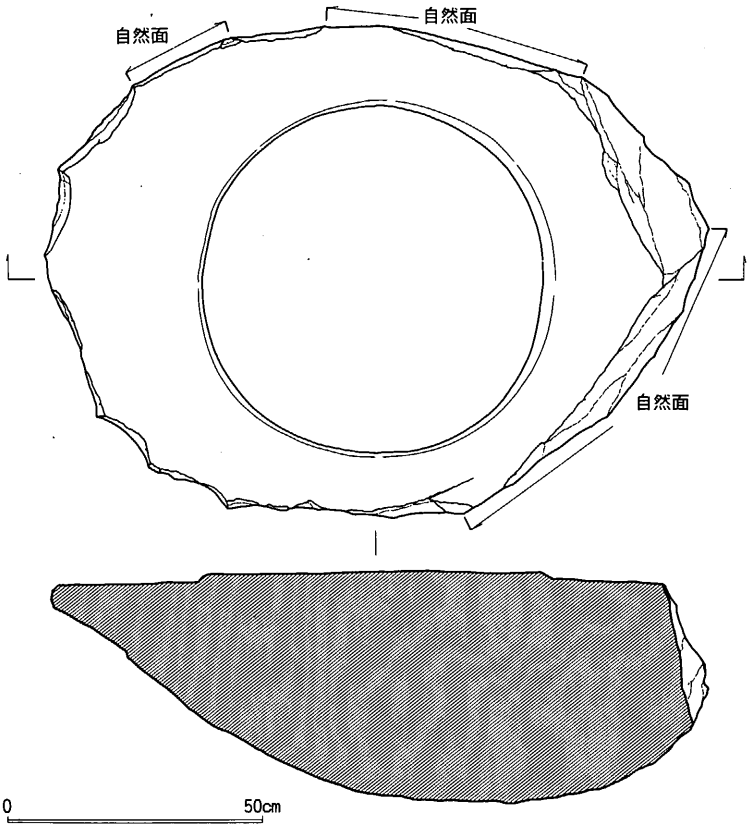


Fig.68　礎石実測図(1/15)

Fig.69　礎石旧状

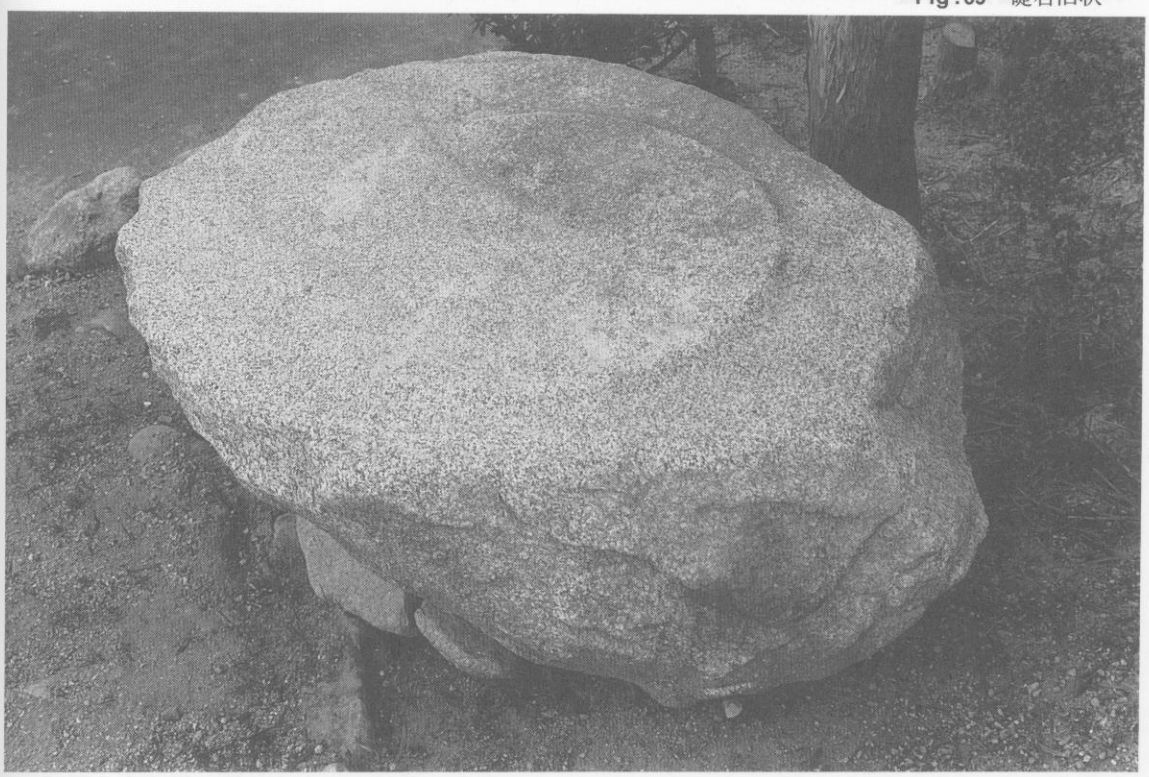


Fig.70　礎石現状

V．総　　括

1．筑前国分尼寺跡と近世の史料

国分尼寺は全国的に遺跡の残り具合が悪く、九州管内でも具体的にその位置や規模が判明しているものは皆無に近い。周辺の状況をみてみると、筑後国分尼寺では推定範囲が概ね特定されている程度であり、豊後国分尼寺では、「尼寺」と記載した墨書土器が発見されたことから、その出土地点周辺に推定されているという現状である。肥後国分尼寺では近年の調査で南門のものとみられる基礎地業と回廊の一部が検出され、具体的様相を見せはじめている。このように発掘調査の成果が未だ不十分な地域が多い要因は、国分尼寺が一般的に国分寺に比べて規模が小さく、維持管理も手薄であったためか各地とも早く廃絶し、今日に至ったためではなかろうか。

さて筑前国分尼寺であるが、成立や存続期間を語る古代から中世の文献史料は全く残っておらず、廃絶の後その位置について語ったものも江戸時代から明治にかけての地誌が若干残っている程度である。しかしその地誌には重要な所見も見受けられるため、以下に地誌の必要部分を抜き出し発行年代順に列記してみる（地誌の抽出に関しては山村信榮氏の協力を得た）。

『筑前国続風土記』（貝原篤信/1709年）

國分尼寺址

國分村の二町許西にあり。東西八間、南北六間、大きなる礎二十許猶のこれり。聖武天皇天平十一年己卯年、毎國に國分尼寺を置れけるとかや。この寺もいつの時より廃絶せしにや。

『筑前国続風土記拾遺』（加藤純一・鷹取周成/1798年）

國分寺並尼寺

（前略）尼寺の跡は僧寺の西弐町斗の田圃中に礎石少々あり其地を池田と云廣狭詳ならず

『筑前国続風土記附録』（青柳種信/1818～1830）

尼寺址

本編に詳也。又此邊に礎石二三箇あり。國分寺の外門ありし所なりとそ。

『太宰管内志』御笠郡三（伊藤常足/1841年）

○尼寺

（前略）さて御笠郡國分寺村ノ西二町許に東西八間南北六間にして大なる礎二十ばかり残れる是則尼寺の跡なりと云、

『福岡県地理全誌』（臼井匡胤ほか/1877年）

國分寺及尼寺址

（前略）尼寺ノ跡ハ。僧寺ノ西貳町田圃ノ中ニアリ。元禄ノ頃マテハ。東西八間。南北六間。礎二十許アリト云。今ハ一基モナシ。径三尺餘ノ礎石一箇柱ノ立シ址径二尺許アリ。アルノミ。

『筑前旧志略』（末永茂世/1887年）

國分寺址

（前略）國分尼寺ノ跡ハ村ノ西ニアリ此寺ヲ法華滅罪寺ト云東西八間南北六間大ナル礎二十許残レリ（以下略）

『太宰府史鑑』（高原謙次郎・江島茂逸/1903年）

（筑前国続風土記の文を引用…略）今は礎石も田圃の石垣に用ひたるもの六七存するのみ。

地誌以外では、**『太宰府旧蹟全図』**（1806年）に尼寺跡の記載がみえ、**『筑前名所図絵』**には次の一文がある。

國分尼寺　國分寺の西の方一丁はかりに其址あり、此尼寺は聖武天皇天平十一年の建立なり、今ハ廃寺となりて礎なし

これらを見てみるといくつかのことに気付く。まず、礎石群の存在である。『筑前国続風土記』（以下『続風土記』）の記載は決して詳しくないが、礎石が分散して残っているような記載ではないため1棟分の礎石群と解釈できる。この礎石は後に編集された地誌にそれなりの記述はあるもののすべて『続風土記』を写したものと思われ、それに付随する文面をみるかぎり礎石群は早い時期に失われているようである。

例えば『筑前国続風土記拾遺』（以下『拾遺』）では「田圃中に礎石少々あり」となり具体性にかけるが、次の『筑前国続風土記附録』では「此邊に礎石二三箇」となっている。この記事を裏付けるのが『太宰府旧蹟全図』（以下『旧蹟全図』）で、ここには「アマ寺ノアト」と記載される辺りに大きな円が画かれているだけで、礎石群の存在は記載されていない。尼寺跡付近の礎石がなくなっていることは、同じ絵の国分寺塔跡に礎石が並ぶ絵があり、「石スエ十七」の添え書きがあることから理解できる。したがって18世紀前半から後半の約90年の間に大半が持ち去られてしまったものと考えられる。礎石は現在も民家の中と水田の土留め用（現在は国分共同利用施設前に移設）として2箇が付近に残されているが、この状況は『太宰府史鑑』の記載以来あまり変化せず、現在に至っているようである。ただし、この礎石が尼寺に元から存在していたものかどうかは現状では確認することはできない。

さて、最も古い尼寺跡の景観を示すと考えられる『続風土記』の記載をみると、礎石建物の規模が想定できそうである。ここに言う東西八間、南北六間という記載は柱間ではなく、基壇あるいは礎石が残存している範囲の東西南北の長さを示していると考えられる。このことは『続風土記』の他箇所の記載内容と現在の遺跡の規模が近似しているので明らかである。さて、この長さは曲尺（0.303m／尺）で計算されたものとして、1間＝6尺とみて計算すると東西約14.5m、南北約11mという数値が得られる。礎石の数が約20箇であることから、当初はこれ以上存在していたものと考えられよう。このことから推定で復原される建物の規模は、柱間1間が10尺程度とみて外観が東西5間、南北4間で、内陣が東西3間、南北2間とすれば、礎石は28箇となり近い数値となる。尼寺の金堂としてもおかしくない規模ではなかろうか。

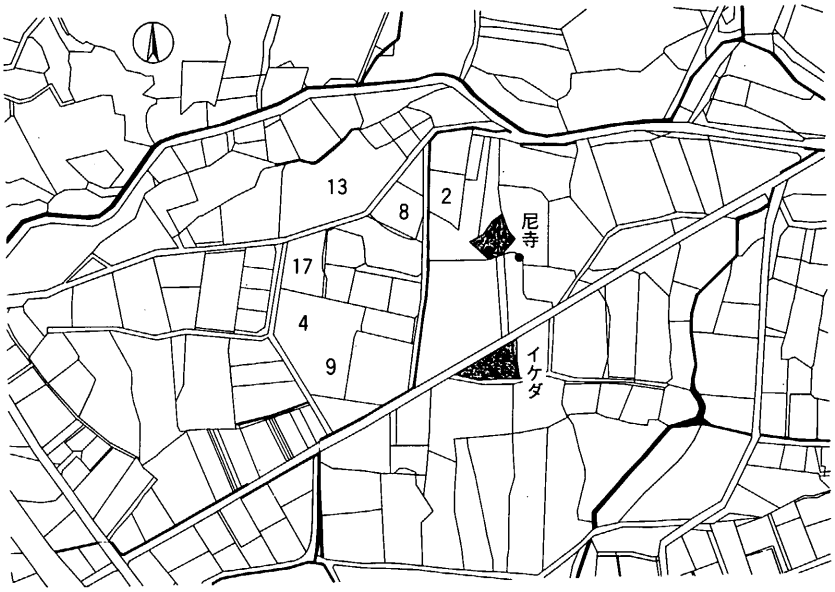


Fig.71 太平洋戦争以前まで伝えられていた「尼寺」「イケダ」の位置(網部分/1:5,000)
※数字は調査次数とその位置、●は礎石位置

このようにすべての史料で尼寺跡の位置を具体的に記載するものはなく、国分寺の西二町程度という記載からおおよその推定がなされるだけである。これに加えて、昭和46年刊行の名著『大宰府都城の研究』で鏡山猛は、前記の地誌類以外に地番の検討を行っている。この段階ですでに字は今と同じ松本であったが、聞き取り等で「尼寺」「池田」を確認している。「池田」は『拾遺』にみえ、礎石の位置を知ることのできる唯一の地名である。これらは鏡山の調査によって地番まで確認されており、現在の地籍図にそれを当て嵌めてみる(Fig.71)と、両者とも現在礎石が残存している位置もしくはその近接地を指しており、「尼寺」という地名の由来がその礎石からなるものであり、あまり古くまで遡らない可能性が窺える。また、『拾遺』が「池田」なる土地を尼寺の跡とみたこともこの転用された礎石の存在によるものである可能性が高いと思われ、この点から即座に尼寺の位置を特定することは危険であると考える。

そこで『旧蹟全図』を検討してみることとする(Fig.72、Pia.51～53)。これは「北図」と「南図」に分かれており、その「北図」に現在の太宰府市一帯が画き込まれている。そこにはすでに失われた多くの地名が認められ参考となる。また19世紀初頭の地図としてはなかなか精度の高いものと思われ、特に画角の中心部にその傾向が見いだせる。この絵によると国分寺の西側に円の図形（池または礎石を特に大きく描いたのか？）があり、その下に「アマ寺ノアト」となっている。しかし、注目すべきはその西に記載される「大門」「仁王門」の記載である。両者の位置は南北の関係にあったようで、寺の南門と中門を想像させる。その北には『拾遺』にみ

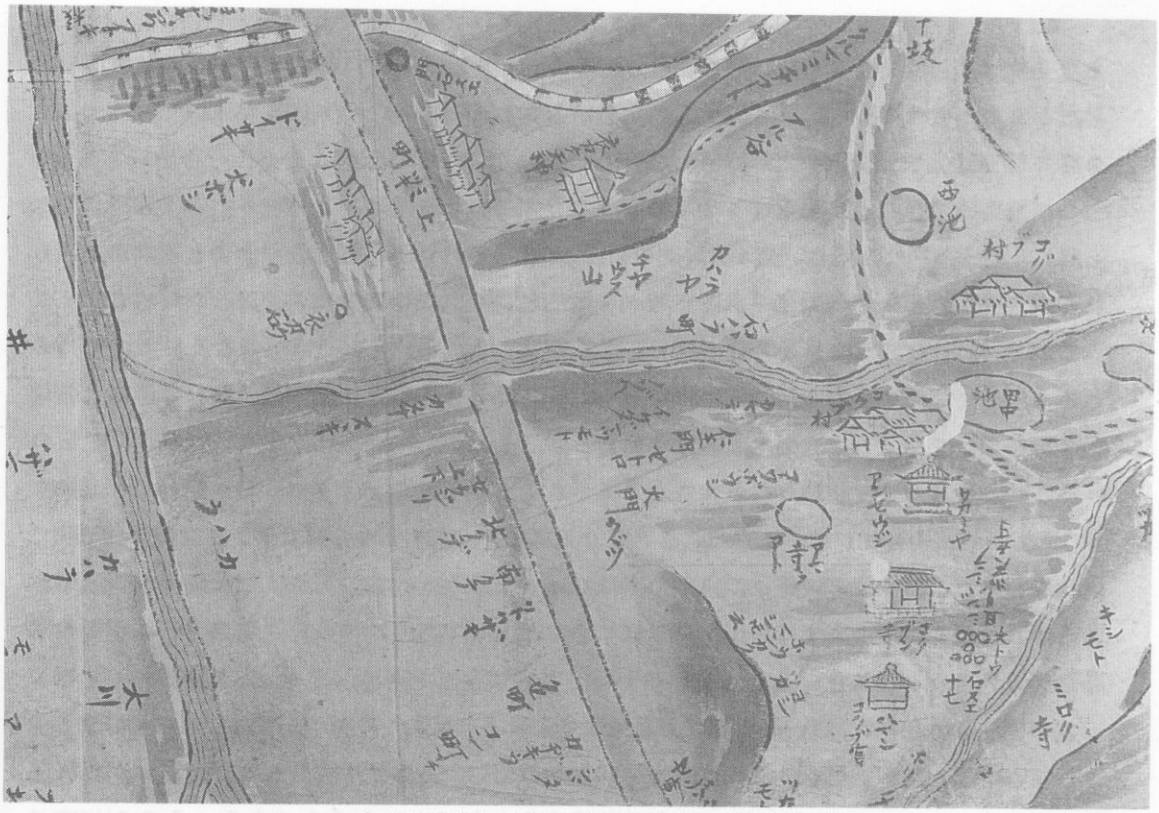


Fig.72　太宰府旧蹟全図北図の筑前国分尼寺跡周辺の様子

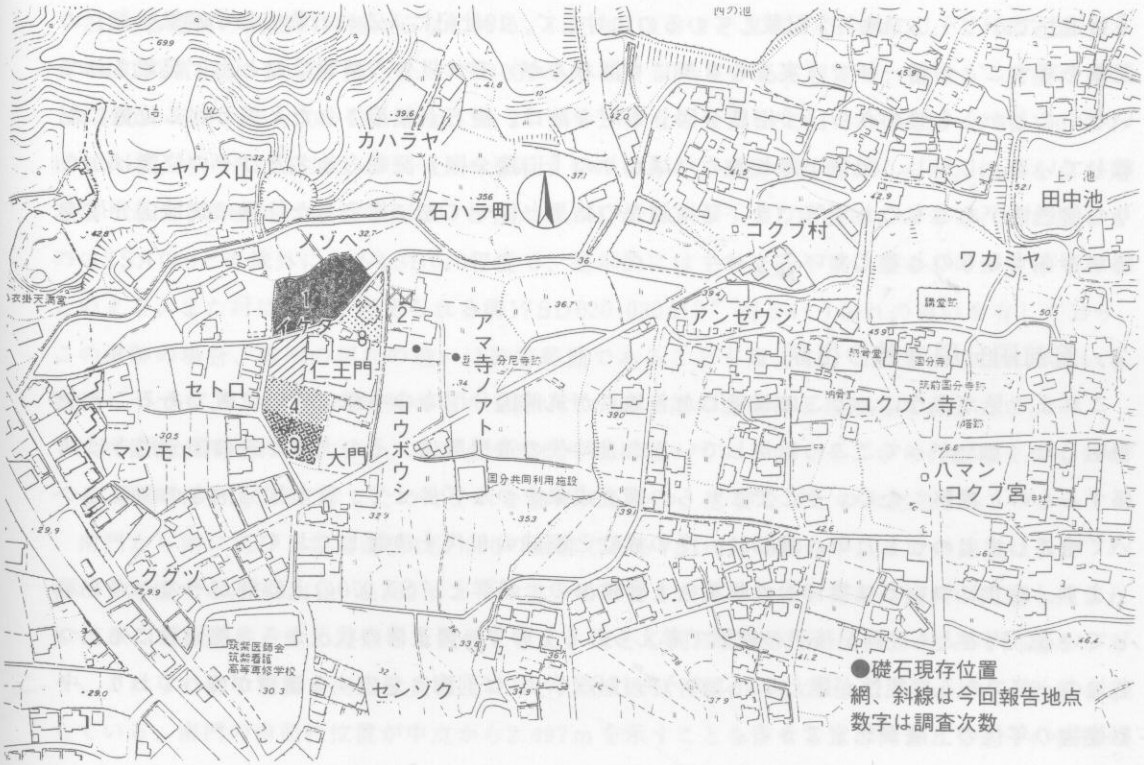


Fig.73　太宰府旧蹟全図にみえる地名の推定位置と調査地点（1：5,000）

えた「イケダ」の記載もあり、注意される。この「イケダ」は先に検討した現在の地籍図の位置だとすると、他の「大門」「仁王門」などが大きく南へ擦れ、今も地名が残存する「センゾク町」（千足町）と重複してしまい位置関係がおかしくなってしまう。

ここで発掘調査の成果を重複させる必要がでてくる。地名ではっきりしている「大門」「仁王門」という門的な遺構は、第4次調査の4SB001であろう。これは、区画溝および参道とみられる南北道路の存在から施設の南門である可能性が高く、この位置に「大門」の地名をあてはめてみたい。これにしたがって他の地名を割り振ってゆくとFig.73のようになる。これを見ると「イケダ」は伽藍の中心部付近に位置するようになり、『拾遺』に記載された「池田」の信憑性が高まってくることに気付く。時代とともに「イケダ」＝寺跡の伝承が、残された礎石の移動とともに地名まで移動した可能性が想像される。さらに考え過ぎかも知れないが、「コウボウシ」を伽藍の東側に認める点で、これを「工房址」と読めるならば、第2次調査で出土している鞴羽口がこのことを物語っているのではないかと思う。寺域の周辺に寺に関係する工房が存在していたことは、すでに杉山洋の指摘にあるとおりであり、この尼寺の東側寺域外に寺院関係工房を認めることも可能ではなかろうか。

これらの点を総括すると、18世紀初頭段階までは地表に金堂とみられる礎石群が未だ整然と存在していたことから、尼寺の位置は確実に周知されていたものと考えられるが、何らかの事情で礎石が失われはじめると、徐々にその記憶も失われていったようである。そのことは、『拾遺』でかろうじて地名を記載しているのに対して、19世紀に入る刊行物では『続風土記』の記載を写すことが精一杯で（実査の有無にも関わるが）それ以外の情報はほとんど記載されていないことからも窺われる。『旧蹟全図』も尼寺跡は、礎石が転用されたと思われる位置に記載している。しかし、記憶が薄れ始めたばかりの『旧蹟全図』記載の地名及びその位置はかなりの信憑性があるものと理解でき、発掘調査の結果と併せて先に推定した位置に筑前国分尼寺跡が存在するものと考えたい。

2．筑前国分尼寺跡の復原

これまで見たように、ここに報告した各地点が筑前国分尼寺の中枢に近い位置であることが判明した。したがってここに報告している奈良時代の遺構群は、その大半が筑前国分尼寺に関係するものと理解したい。そこでこれらの調査成果をつなぎ併せて、筑前国分尼寺の伽藍について略述しまとめとしたい。最初に、その成立と廃絶の年代を検討しておく。

まず、成立については第13次の暗茶色土層検出の土器群と17SX070の土器群がその一点を示している。両者とも8世紀後半の範囲で考えられるもので、両遺構の状況から寺院建設に先立つ整地の一部である可能性が窺える。このうち17SX070には回廊と想定する遺構がのっており、中枢建物の年代の上限が想定できる。

次に下限を窺わせる資料は、8SA020柱掘り方出土の土器で、これは柱痕跡に転落して出土しており、この建物の下限を示すものと思われる。土器の形式から9世紀中頃から後半のものと理解できる。また、出土した瓦は寺院としてはかなり少ないものの、縄叩き目の痕跡を有するものが大半を占め、平安期に下ると思われる格子叩き目を有する資料は微量しか検出されていないことも存続幅の短さを物語るものと言えよう。

伽藍内のすべての建造物の年代がこの少ない資料に集約されるとは思われないが、極端に古いもの(弥生時代等)、新しいもの(中世末～近世)を除外すると、出土遺物の大部分はこの時期幅に収まるものであり、概ね筑前国分尼寺の年代を示しているといって差し支えなかろう。したがって、筑前国分尼寺は8世紀後半頃に成立し、9世紀中頃あるいは後半には廃絶していた可能性が強いものと考えておきたい。

次に伽藍の復原について述べておく。

掘立柱建物4SB001は溝4SD020･030および道路遺構4SF050の位置関係から、これらは南門および参道とその側溝、外郭溝であることはほぼ確実と判断される。そこで、この建物の中心を当面の尼寺基準点と理解し、関係する遺構の振れや位置関係を計測してみたい。なお、伽藍中軸線は4SB001の振れを指標としてここでは仮にN-2°-Eとし、その基準点となる南門中点は(X＝57,445.82m、Y＝－46,013.09m)として計算する。計算の結果は別表2～5にまとめたので参照されたい。

さて、各遺構の角度の問題からはじめる。4SB001はおよそN-2°-Eである。これに近似するものは13SA020のN-92° 15′-E、17SD030のN-92° 50′-Eがある程度で、他は1° 前後のもの(4SD020-030･8SA005･13SA015)と3° ～4° のもの(13SB001･13SA023･17SC120)にわけられる。さらにこれ以上のデーターを示すものもある。遺構の性格によるが、細かな点を見る限りあまり計画性は認められないと言える。しかし、もう少し巨視的にみると、西に振るものは8SA020と寺域外にある4SB010程度で、基本的には主軸を若干東に振るものが主体であるといえる。また対になると考えられる溝17SD020･030が2° 弱という振れの違いを有しており、この遺跡の場合、若干の振れの違いは許容範囲であることも窺える。この点から振れの違いを認識しつつも、ここでは寺域外のものを除いて一応一連の遺構群と理解しておきたい。

次に距離の問題に入りたい。基準点を南門中点に置いているのでそこからの距離を中心にのべる。概略はFig.74に示したのでそれを参考にしつつ、必要なことのみ記述する。

南門から南に延びる参道遺構4SF050の側溝である4SD020･030の中点までの距離は、2° の振れを考慮すると5.924m･6.369mとやや違いをみせるが、これは中軸線の振れの問題も残されていることを踏まえると近似した数値と言え、溝心心間は12.293m(41尺)とみて問題なかろう。これらの溝の東西方向の延長線上では、中点東西延長線から2.25m･2.53mという数値を示している。南門の南面柱位置が中点から2.497mを示すことを併せると、両者とも若干の数値の

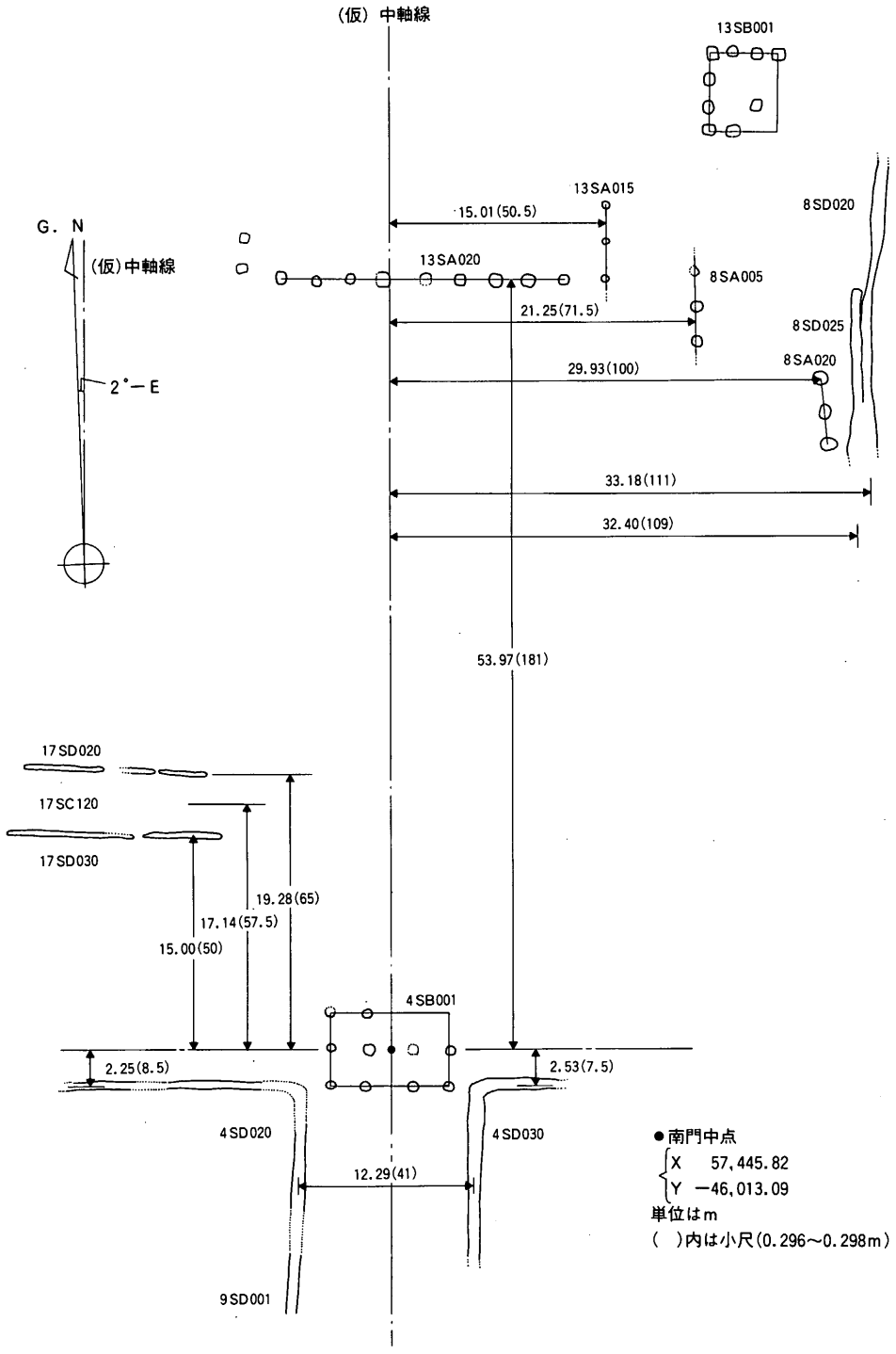


Fig.74 筑前国分尼寺跡遺構間距離概念図(1/500)

違いは認められるが、同一の軸線上にのるものであることが窺え、概ね8尺で割り付けられていることがわかる。

次に南面回廊と想定している遺構17SC120の中心まではおよそ17.14m、それぞれの側溝間での距離は15.00m・19.28mである。小尺でみればおよそ50尺・65尺という数値が得られる。これによって、心心間がおよそ15尺で設計されていることがわかる。

また、柵列13SA020までの距離は53.97mで、小尺の181尺程度となる。他の遺構も尺で換算するかぎり、見事な完数を得られるものは少ない。しかし、ほとんどの遺構でわずか0.5～1尺程度の違いでいずれも完数となることから、中軸線の振れが若干異なれば、これらのデーターは完数として位置づけられるものも出てこよう。中軸線の基本となる遺構の検出が望まれる。なお大尺の場合は、小尺の1.2倍という公倍数の多いものであるため、完数に近いデーターを得るものもあるが、全体を通してみた場合、小尺での設計が妥当と考えられる（別表6～9）。

以上の成果から、今回報告した調査区にみられた遺構群は、ある程度の企画に基づいて建設されたものであることが窺われる。前段で検討したことを踏まえて、これらの遺構群は筑前国分尼寺に関係するものとみて差し支えないと考えられる。今回検出した遺構でその性格を推定できるのは、南門、南面回廊西半部、外郭溝程度であるが、13SA020は主要建物の境を示すような位置にあり、空間地の面積を考慮すると、これより北に講堂、南に金堂が想定される。金堂の規模は、前段で記載したように14.5m×11.0m程度の規模であろうが、講堂については検出できていないことと記録も残存していないので、現状では全く不明としか言いようがない。また講堂の推定位置が間違いなければ13SB001は鐘楼か経蔵であったことが窺われるが、対になると思われる位置に設定した調査区からは建物遺構の検出はなかった。また回廊は南面のみ廊としての景観を維持していたようで、東は柵列（8SA005）の可能性も考えられる。北側も先の13SA020がその機能を果たしていたとみられよう。この想定でいけば伽藍の中枢部心心距離は、南北（未検出の中門と13SA020）が約36.8m、東西（8SA005の折り返し）が約42.5mのやや横長のものが想定される。ただし南面回廊の雨落ちとみる溝はそれよりも西にのびており、この折り返しでは53.4mとなる。8SA005を西に折り返した位置に関連遺構が検出されていないこともあり、課題がのこる。

寺域の範囲は南と東は外郭線と見られる溝があり、これを参考にして中軸線で折り返してみると、東西幅は約66.4mとなり西限は現在道路となっている部分に該当する。また北辺は第13次調査の北側まで及ぶようであるが、大きな段落ちとなっており、また試掘調査の結果をみても遺構は検出されていないことを考えると、おおよそこの13次調査の北辺りに想定が可能であろう。この位置と南外郭溝の距離はおよそ90mである。しかしこの復原ではあまりにも縦長になりすぎることと、尼房をはじめとする関連施設を建立するスペースを見いだすことができなくなるという問題が生じる。したがって北あるいは西にそのスペースを求めることになるが、地

形的な部分を考慮すると北側が小谷を越えると丘陵となり、これ以上の北への範囲拡大は望めない。西側は遺構が検出されたあたりと同様な地形が若干広がっており、スペースを想定するには十分である。西に外郭線を広げると伽藍中軸線が寺域の東に片寄ることになるが、類例がないわけではない。ここでは寺域が西に広がる可能性を示唆するという程度にとどめ将来の課題としたい。

最後に筑前国分寺との位置関係を述べておきたい。筑前国分寺は中枢伽藍の調査がある程度進んでいるが、中軸線を求めるには資料が不足している。そこで講堂跡の調査で得られた南辺及び東辺基壇の振れから推定すると、中軸線を約N-2°-Eと見ることができる。また距離計算の基準として中軸線上の任意点を同じく講堂の中点(X＝57,514.18m、Y＝-45,594.71m)に求めた。これを用いて計算すると国分尼寺南門中心は国分寺講堂中心から西へ415.74mとなり、小尺の1400尺にあたることがわかった。この完数は明らかに計画されたものとみて間違いなかろう。前回の報告書でも記載したとおり、これより以東は氾濫状を呈する部分が多く、地盤はこの地域が最も安定した状況を示しており、以西では間近に官道が通過することを考えると、様々な条件を踏まえた上で設計されていることが知られよう。

このように今回の調査では筑前国分尼寺に関連するいくつかの事項が明らかとなった。しかし中枢建物の解明、付属建物の位置をはじめとして、設計中軸線の正確な解明、設計基準尺の問題、筑前国分寺及び他の国分尼寺との比較など多数の問題が積み残されている。これからは伽藍を調査する機会は少ないと思われるが、ここに報告した資料の再検討を含めて、今後に残された課題は大きい。

別表１　土器法量表

A：番号　　B：挿図番号
須：須恵器　土：土師器

13次　暗茶色土

器　種	A	B	口径	器高	底径
須　蓋a	1	1	12.7	2.5	-
須　蓋c3	1	2	-	-	-
	2	3	14.4	1.9+	-
	3	4	14.4	2.1	-
	4	5	14.8	1.2+	-
	5	6	15.1	1.6+	-
	6	7	15.5	2.1	-
	7	8	15.5	1.1+	-
	8	9	15.6	1.8	-
	9	10	15.7	1.1	-
	10	11	17.3	1.7+	-
	11	12	18.2	1.9	-
	12	13	18.8	1.0+	-
	13	14	19.0	2.0	-
	14	15	19.0	2.8	-
	15	16	19.2	1.9	-
須　坏a	1	17	13.4	3.9	8.6
須　坏c	1	18	12.2	3.8	7.5
	2	19	13.8	3.9	9.1
	3	20	14.2	4.3	9.2
	4	21	14.2	4.0	4.2
	5	22	14.8	4.1	9.7
	6	23	16.0	4.0	11.8
	7	24	17.0	5.3	10.4
	8	25	16.2	6.3	11.6
須　坏d	1	26	17.6	5.0	10.0
土　小坏a	1	43	12.6	2.8	4.1
土　坏a	1	44	13.4	3.5	8.8
	2	45	15.4	4.5	10.9
土　坏c	1	46	15.7	4.3	9.5
	2	47	-	-	9.0
土　坏d	1	48	15.2	3.9	7.3
	2	49	17.2	3.3	7.5

9SD015

器　種	A	B	口径	器高	底径
須　蓋3	1	1	12.4	-	-
	2	2	14.4	-	-
	3	3	14.6	-	-
須　坏c	1	4	-	-	6.6
	2	5	-	-	6.6
須　坏a	1	6	11.5	3.6	7.0

17SK095

器　種	A	B	口径	器高	底径
須　蓋c3	1	1	-	-	-
	2	2	13.0	1.1+	-
	3	3	17.0	2.3+	-
須　坏a	1	4	12.2	2.9	8.8
須　坏c	1	5	10.4	3.2	6.6
	2	6	11.2	3.6	6.5
	3	7	13.0	3.9	7.9

17SD030

器　種	A	B	口径	器高	底径
須　蓋3	1	8	17.6	-	-
土　坏？c	1	9	-	1.9+	11.2

17SX070

器　種	A	B	口径	器高	底径
須　蓋c3	1	10	12.2	1.5+	-
	2	11	15.3	1.7+	-
須　坏c	1	12	13.0	4.0	8.8

17次　茶色土

器　種	A	B	口径	器高	底径
須　坏a	1	1	10.8	2.1	7.6
須　坏a	1	2	10.2	3.2	5.8
	2	3	11.0	3.7	5.6
	3	4	11.4	3.5	7.4
	4	5	14.0	4.9	9.0
土　坏d	1	6	12.0	3.8	5.2

別表２　第４次調査関連座標値

遺構番号	計測位置	遺構中点座標値		方位	南門中心からの距離	
		X	Y		X方向（m）**	Y方向（m）**
4SB001	掘り方a	57,448.46	-46,017.16	N-1° 57′ 04″ -E (a-i)	2.496	-4.159
	掘り方i	57,443.47	-46,017.33		-2.497	-4.156
	掘り方l	57,443.18	-46,009.04	N-92° 00′ 12″ -E (i-l)	-2.497	4.139
	(掘り方d)	57,448.19	-46,008.86		-	-
	中点	57,445.82	-46,013.09		0.000	0.000
4SB010	北西隅	57,438.57	-46,028.85	N-96° 19′ 30″ -E	-7.796	-15.498
	北東隅	57,438.11	-46,024.70		-8.110	-11.334
4SD030	東P	57,443.25	-46,004.00	N-1° 13′ 40″ -W (030東P-020西P)	-2.251	9.174
	南P	57,438.45	-46,007.42		-7.168	5.924
4SD020	南P	57,438.47	-46,019.72		-7.577	-6.369
	西P	57,443.70	-46,025.00		-2.534	-11.829
4SF050	任意P	57,438.46	-46,013.57		7.373	-0.223

別表３　第８次調査関連座標値

遺構番号	計測位置	遺構中点座標値		方位	南門中心からの距離	
		X	Y		X方向（m）**	Y方向（m）**
8SA005	掘り方c	57,494.56	-45,990.10	N-1° 11′ 19″ -E	49.513	21.275
	掘り方b	57,496.97	-45,990.05		51.923	21.241
8SA020	掘り方a	57,491.82	-45,981.54	N-3° 05′ 03″ -W	47.073	29.925
	掘り方c	57,487.18	-45,981.29		42.445	-30.337
8SD015	任意中点	57,496.50	-45,978.90		51.842	-32.400
8SD025	任意中点	57,495.25	-45,978.16		50.619	-33.184

別表４　第13次調査関連座標値

遺構番号	計測位置	遺構中点座標値		方位	南門中心からの距離	
		X	Y		X方向（m）**	Y方向（m）**
13SB001	掘り方a	57,514.82	-45,988.34	N-94° 04′ 38″ -E	69.821	22.327
	掘り方d	57,514.47	-45,983.43		69.643	27.246
13SA015	掘り方a	57,504.39	-45,996.03	N-0° 40′ 07″ -E	59.130	15.005
	掘り方c	57,499.25	-45,996.09		53.990	15.125
13SA020	掘り方a	57,500.06	-46,018.71	N-92° 15′ 54″ -E	54.010	-7.510
	掘り方i	57,499.28	-45,998.99		53.919	12.226
	a-i中心	57,499.67	-46,008.85		53.966	2.358
13SA023	西掘り方	57,506.53	-46,012.67	N-93° 18′ 58″ -E	60.687	-1.699
	東掘り方	57,506.22	-46,007.32		60.564	3.659

別表５　第17次調査関連座標値

遺構番号	計測位置	遺構中点座標値		方位	南門中心からの距離	
		X	Y		X方向（m）**	Y方向（m）**
17SD020	東P	57,465.54	-46,025.44	N-94° 39′ 06″ -E	19.277	-13.031
	西P	57,466.54	-46,037.73		19.848	-25.348
17SD030	東P	57,461.24	-46,024.70	N-92° 50′ 33″ -E	15.000	-12.147
	西P	57,461.95	-46,039.00		15.216	-26.457
17SC120	東P	57,463.39	-46,025.07	N-93° 40′ 47″ -E	17.142	-12.586
	西P	57,464.25	-46,038.37		17.532	-25.903

別表6　第4次調査各地点大・小尺換算表

遺構番号	計測位置	X方向	小尺	小尺	小尺	大尺	大尺	大尺	Y方向	小尺	小尺	小尺	大尺	大尺	大尺
		m	0.296	0.297	0.298	0.355	0.356	0.357	m	0.296	0.297	0.298	0.355	0.356	0.357
4SB001	掘り方a	2.496	8.432	8.404	8.376	7.031	7.011	6.992	-4.159	-14.051	-14.003	-13.956	-11.715	-11.683	-11.650
	掘り方i	-2.497	-8.436	-8.407	-8.379	-7.034	-7.014	-6.994	-4.156	-14.041	-13.993	-13.946	-11.707	-11.674	-11.641
	掘り方l	-2.497	-8.436	-8.407	-8.379	-7.034	-7.014	-6.994	4.139	13.983	13.936	13.889	11.659	11.626	11.594
	(掘り方d)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	中点	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
4SB010	北西隅	-7.796	-26.338	-26.249	-26.161	-21.961	-21.899	-21.838	-15.498	-52.358	-52.182	-52.007	-43.656	-43.534	-43.412
	北東隅	-8.110	-27.399	-27.306	-27.215	-22.845	-22.781	-22.717	-11.334	-38.291	-38.162	-38.034	-31.927	-31.837	-31.748
4SD030	東P	-2.251	-7.605	-7.579	-7.554	-6.341	-6.323	-6.305	9.174	30.993	30.889	30.785	25.842	25.770	25.697
	南P	-7.168	-24.216	-24.135	-24.054	-20.192	-20.135	-20.078	5.924	20.014	19.946	19.879	16.687	16.640	16.594
4SD020	南P	-7.577	-25.598	-25.512	-25.426	-21.344	-21.284	-21.224	-6.369	-21.517	-21.444	-21.372	-17.941	-17.890	-17.840
	西P	-2.534	-8.561	-8.532	-8.503	-7.138	-7.118	-7.098	-11.829	-39.963	-39.828	-39.695	-33.321	-33.228	-33.134
4SF050	任意P	7.373	24.909	24.825	24.742	20.769	20.711	20.653	-0.223	-0.753	-0.751	-0.748	-0.628	-0.626	-0.625

別表7　第8次調査各地点大・小尺換算表

遺構番号	計測位置	X方向	小尺	小尺	小尺	大尺	大尺	大尺	Y方向	小尺	小尺	小尺	大尺	大尺	大尺
		m	0.296	0.297	0.298	0.355	0.356	0.357	m	0.296	0.297	0.298	0.355	0.356	0.357
8SA005	掘り方c	49.513	167.274	166.710	166.151	139.473	139.081	138.692	21.275	71.875	71.633	71.393	59.930	59.761	59.594
	掘り方b	51.923	175.416	174.825	174.238	146.262	145.851	145.443	21.241	71.760	71.519	71.279	59.834	59.666	59.499
8SA020	掘り方a	47.073	159.030	158.495	157.963	132.600	132.228	131.857	29.925	101.098	100.758	100.419	84.296	84.059	83.824
	掘り方c	42.445	143.395	142.912	142.433	119.563	119.228	118.894	-30.337	-102.490	-102.145	-101.802	-85.456	-85.216	-84.978
8SD015	任意中点	51.842	175.142	174.552	173.966	146.034	145.624	145.216	-32.400	-109.459	-109.091	-108.725	-91.268	-91.011	-90.756
8SD025	任意中点	50.619	171.010	170.434	169.862	142.589	142.188	141.790	-33.184	-112.108	-111.731	-111.356	-93.476	-93.213	-92.952

別表8　第13次調査各地点大・小尺換算表

遺構番号	計測位置	X方向	小尺	小尺	小尺	大尺	大尺	大尺	Y方向	小尺	小尺	小尺	大尺	大尺	大尺
		m	0.296	0.297	0.298	0.355	0.356	0.357	m	0.296	0.297	0.298	0.355	0.356	0.357
13SB001	掘り方a	69.821	235.882	235.088	234.299	196.679	196.126	195.577	22.327	75.429	75.175	74.923	62.893	62.716	62.541
	掘り方d	69.643	235.280	234.488	233.701	196.177	195.626	195.078	27.246	92.047	91.737	91.430	76.749	76.534	76.319
13SA015	掘り方a	59.130	199.764	199.091	198.423	166.563	166.096	165.630	15.005	50.693	50.522	50.352	42.268	42.149	42.031
	掘り方c	53.990	182.399	181.785	181.174	152.085	151.657	151.232	15.125	51.098	50.926	50.755	42.606	42.486	42.367
13SA020	掘り方a	54.010	182.466	181.852	181.242	152.141	151.713	151.289	-7.510	-25.372	-25.286	-25.201	-21.155	-21.096	-21.036
	掘り方i	53.919	182.159	181.545	180.936	151.885	151.458	151.034	12.226	41.304	41.165	41.027	34.439	34.343	34.246
	a-i中心	53.966	182.318	181.704	181.094	152.017	151.590	151.165	2.358	7.966	7.939	7.913	6.642	6.624	6.605
13SA023	西掘り方	60.687	205.024	204.333	203.648	170.949	170.469	169.992	-1.699	-5.740	-5.721	-5.701	-4.786	-4.772	-4.759
	東掘り方	60.564	204.608	203.919	203.235	170.603	170.124	169.647	3.659	12.361	12.320	12.279	10.307	10.278	10.249

別表9　第17次調査各地点大・小尺換算表

遺構番号	計測位置	X方向	小尺	小尺	小尺	大尺	大尺	大尺	Y方向	小尺	小尺	小尺	大尺	大尺	大尺
		m	0.296	0.297	0.298	0.355	0.356	0.357	m	0.296	0.297	0.298	0.355	0.356	0.357
17SD020	東P	19.277	65.125	64.906	64.688	54.301	54.149	53.997	-13.031	-44.024	-43.875	-43.728	-36.707	-36.604	-36.501
	西P	19.848	67.054	66.828	66.604	55.910	55.753	55.597	-25.348	-85.635	-85.347	-85.060	-71.403	-71.202	-71.003
17SD030	東P	15.000	50.676	50.505	50.336	42.254	42.135	42.017	-12.147	-41.037	-40.899	-40.762	-34.217	-34.121	-34.025
	西P	15.216	51.405	51.232	51.060	42.862	42.742	42.622	-26.457	-89.382	-89.081	-88.782	-74.527	-74.317	-74.109
17SC120	東P	17.142	57.912	57.717	57.523	48.287	48.152	48.017	-12.586	-42.520	-42.377	-42.235	-35.454	-35.354	-35.255
	西P	17.532	59.230	59.030	58.832	49.386	49.247	49.109	-25.903	-87.510	-87.215	-86.923	-72.966	-72.761	-72.557

写真図版

筑前国分尼寺跡周辺航空写真（上が北北西）

Pla. 2

第4次調査全景（上が南）

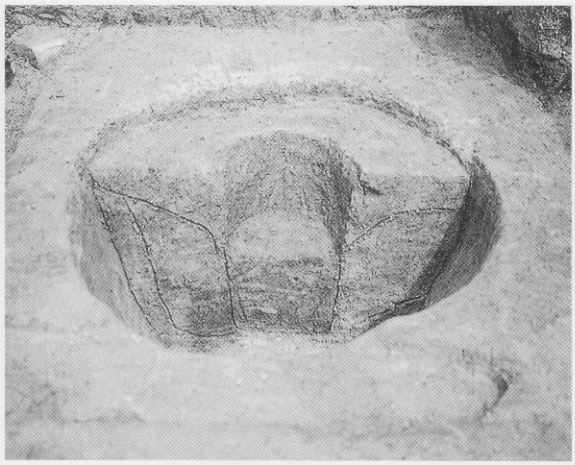
4SB001、4SD020・030（上が南）

4 SB001柱掘り方断割状況（南から）

4 SB001柱掘り方 f 石群検出状況

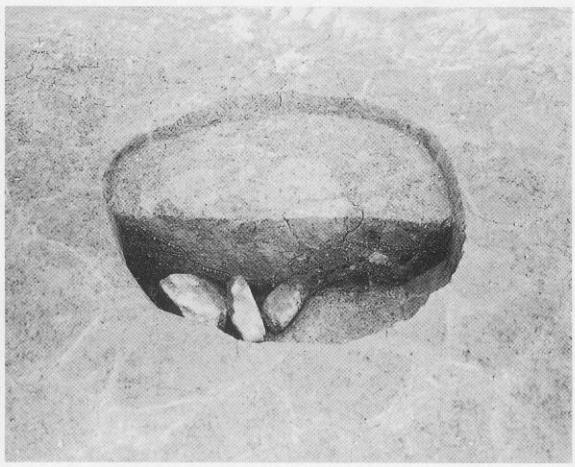
Pla. 4

掘り方a

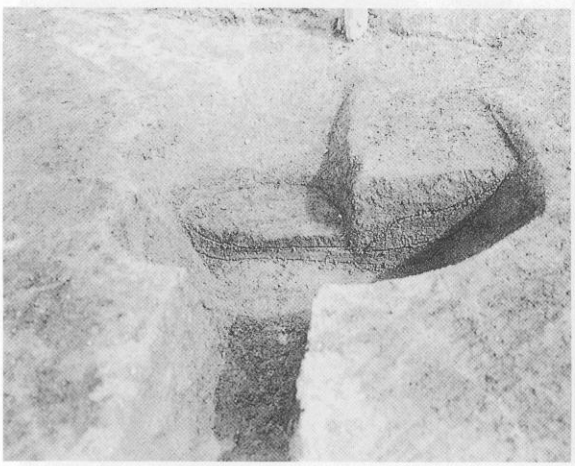


掘り方b

掘り方e



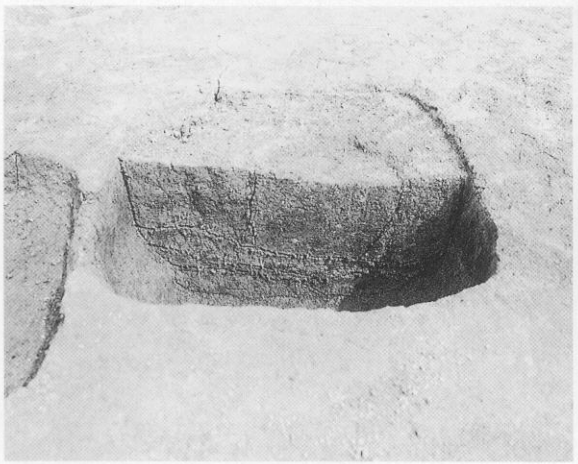
掘り方f



掘り方h

掘り方i

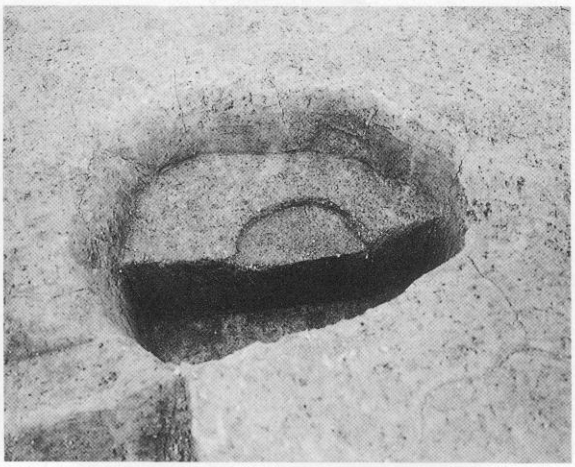
4 SB001柱掘り方土層観察



掘り方 j

掘り方 a

掘り方 k



掘り方 b

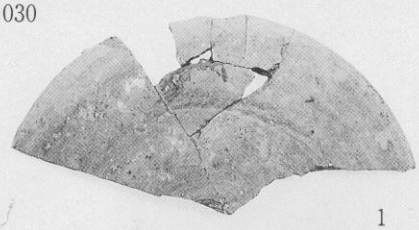
掘り方 ℓ

掘り方 c

4 SB001(左)4 SB010柱掘り方土層観察

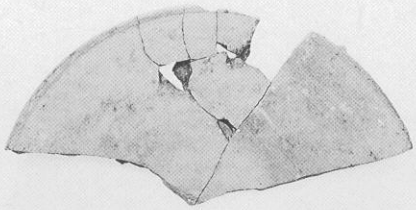
Pla. 6

4 SD030

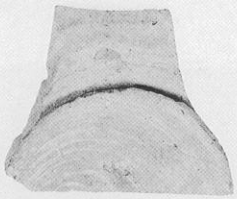


1

2

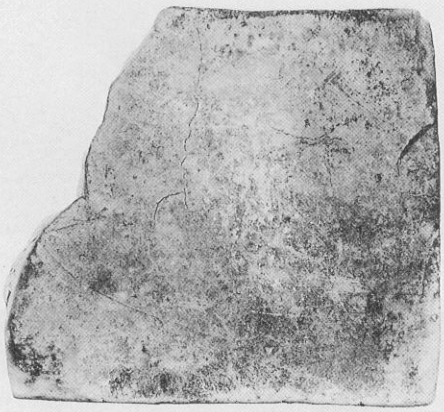


表土

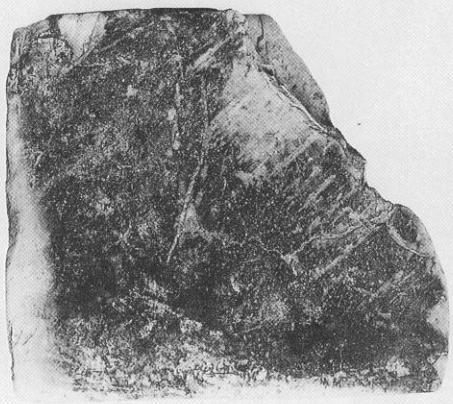


10

灰色砂質土

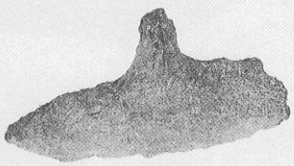


1

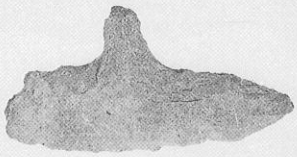


4 SX017　　灰色砂質土

1



2



第 4 次調査出土遺物

第８次調査全景（上が北東）

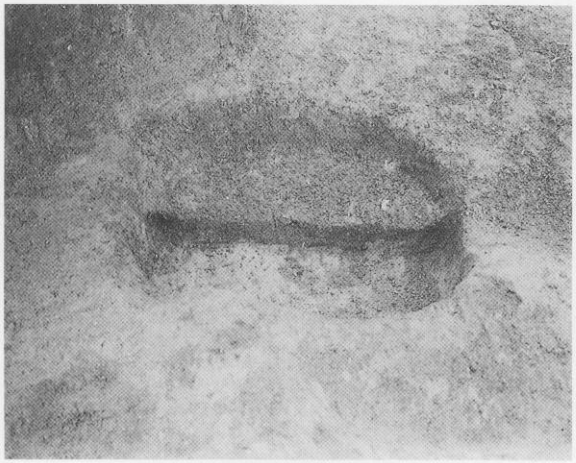
８ST001検出状況（東から）

Pla. 8

8SA005周辺（上が北）

8SA020周辺（上が北）

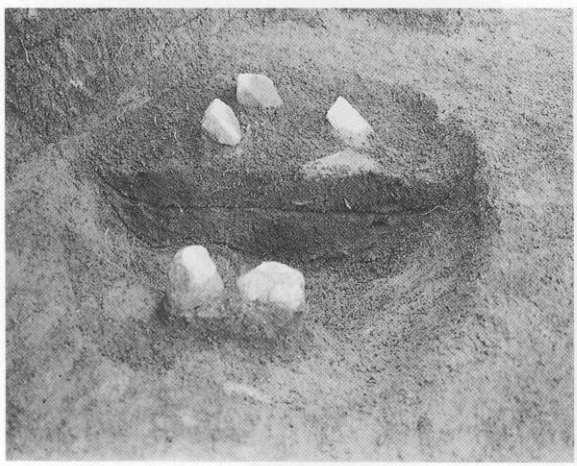
8SA005 b



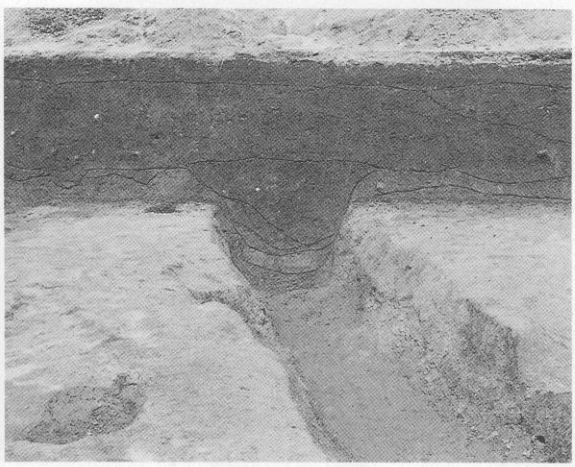
8SA005 c

8SA020 a

8SA020 b

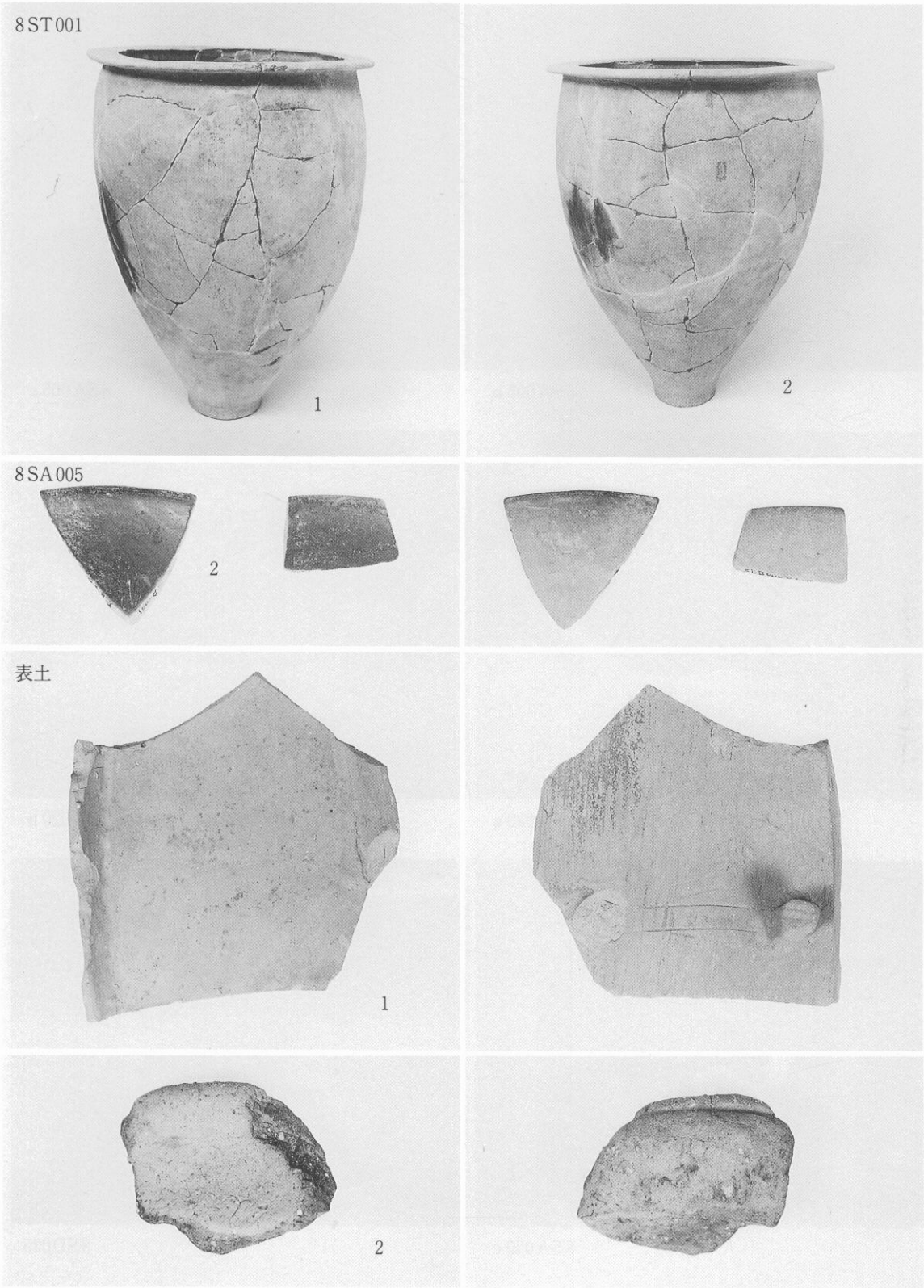


8SA020 c



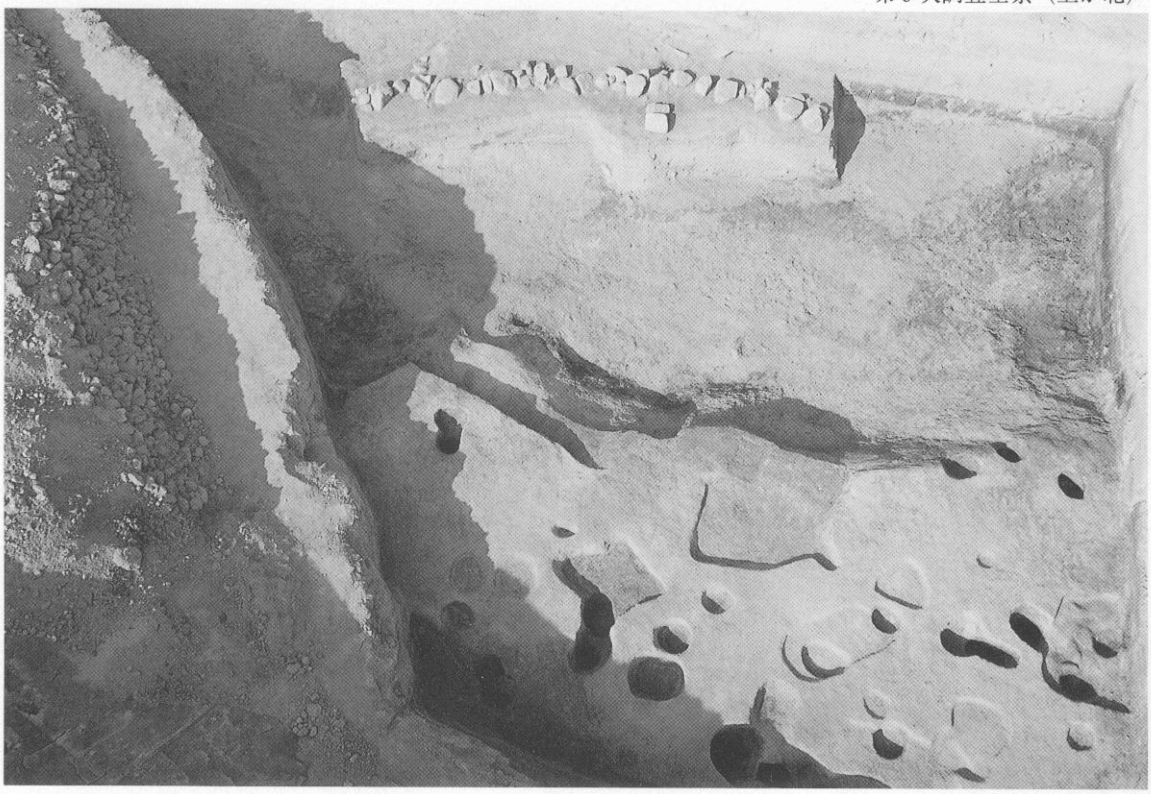
8SD025

Pla.10



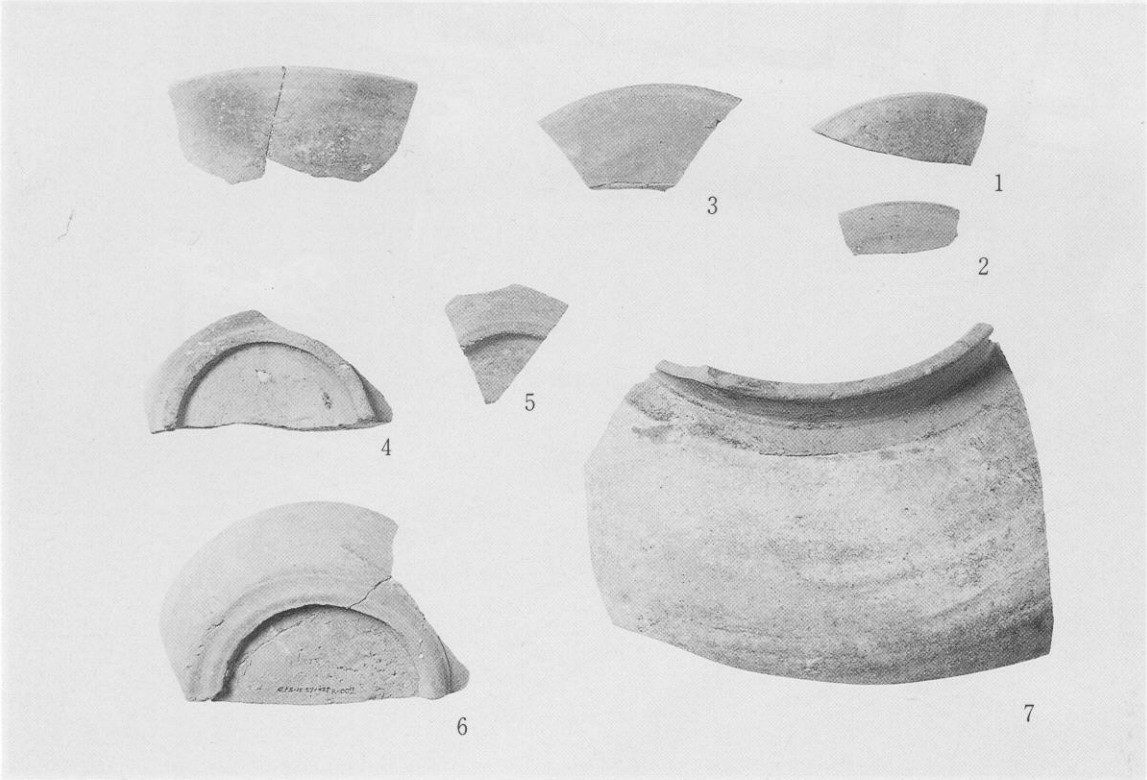
第８次調査出土遺物

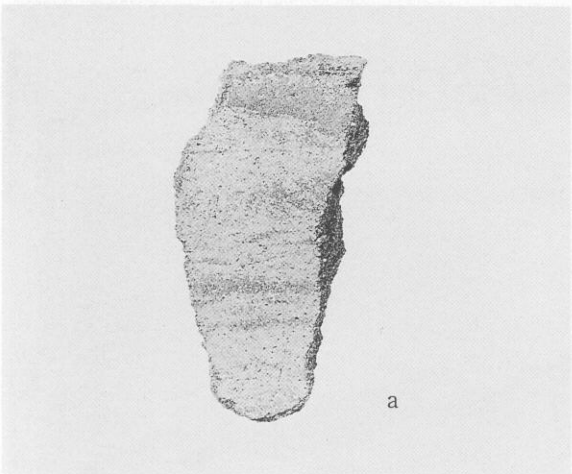
第9次調査全景（上が北）



9SD015・9SX010（上が北）

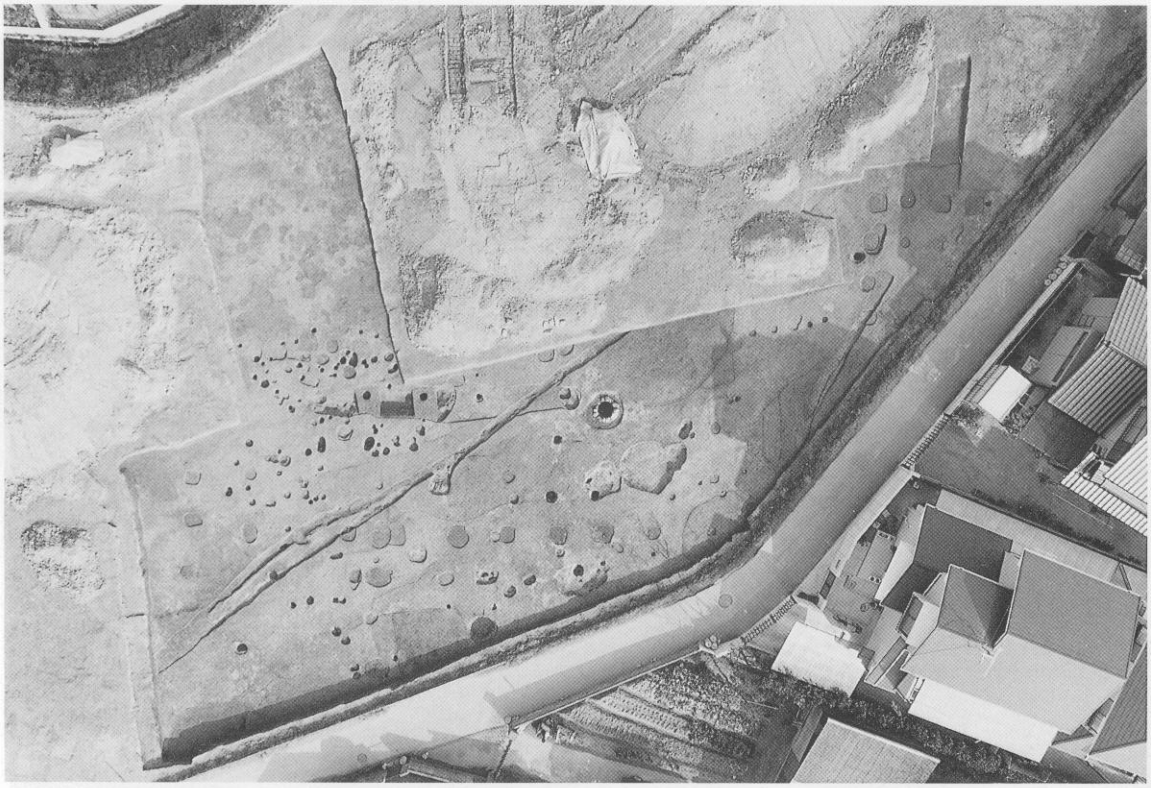
Pla.12





9 SD015出土土器

第13次調査及び筑前国分尼寺跡周辺（北から）



第13次調査全景（上が北）

第13次調査柵列等検出状況（西から）

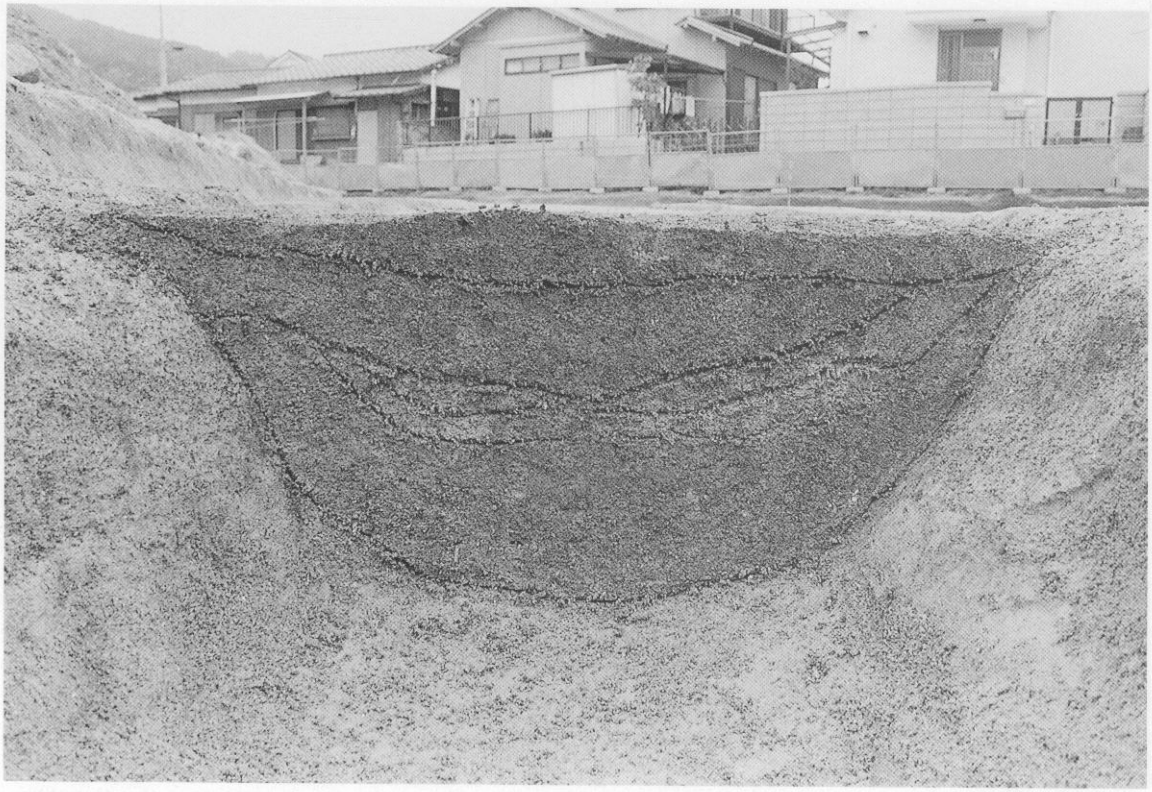
13SB001全景（上が東）

第13次調査柵列全景（上が南）

Pla.16

13 SE008

第13次調査北西部設定トレンチ（南から）



13 SK030土層観察（西から）

13 SA010・020掘り方

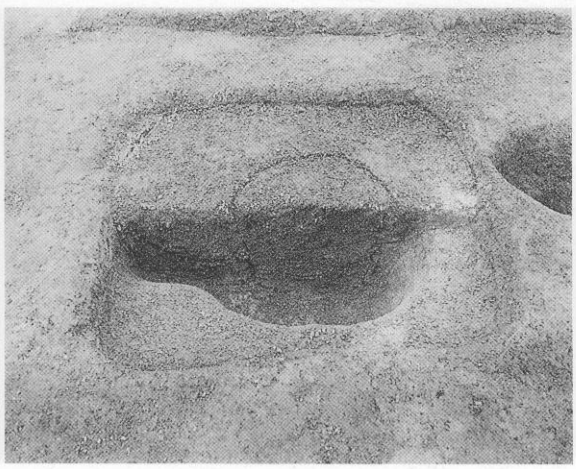
13SB001a柱痕検出状況

13SB001m柱痕検出状況

掘り方a

掘り方b

掘り方c

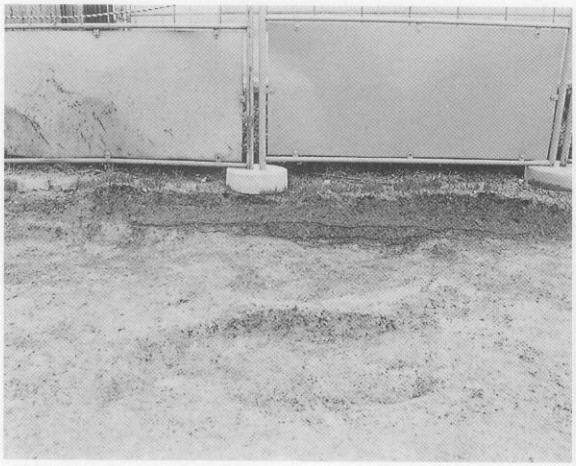


掘り方d

掘り方e

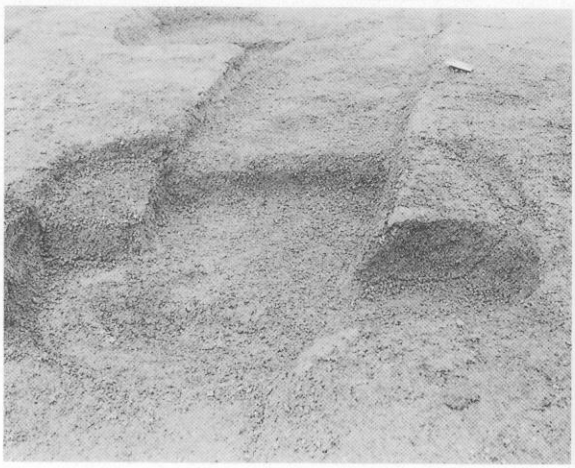
掘り方f

13 SB001柱掘り方土層観察



13SB001掘り方h

13SB001掘り方i



13SB001掘り方m

13SB001掘り方n

13SA025掘り方a

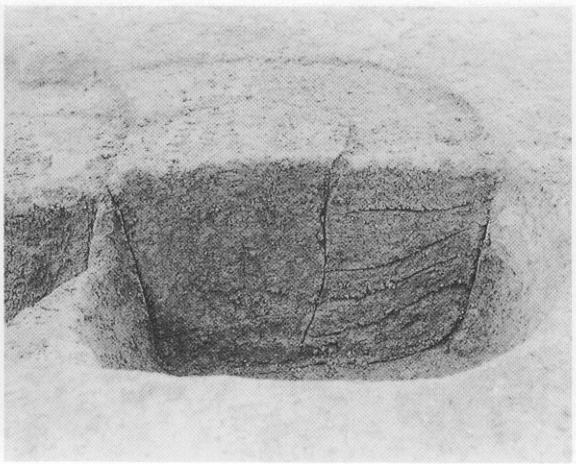
13SA025掘り方b

柱掘り方土層観察

掘り方a

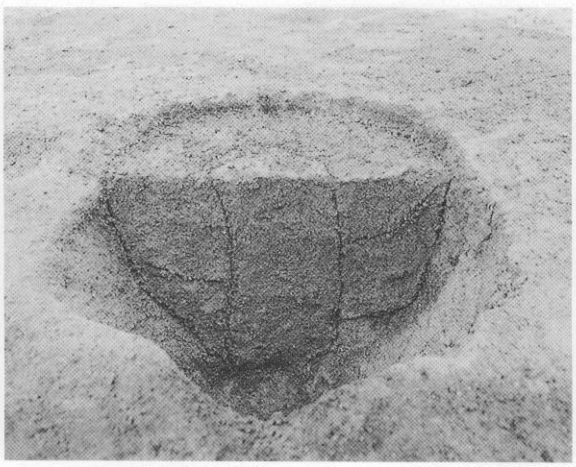
掘り方b

掘り方c



掘り方d

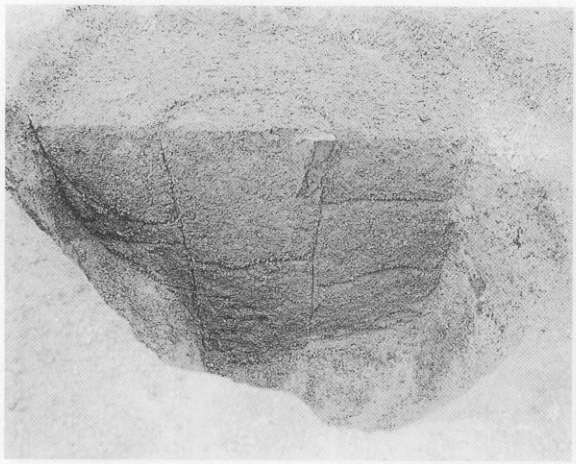
掘り方e



掘り方f

13SA020柱掘り方土層観察

Pla.22

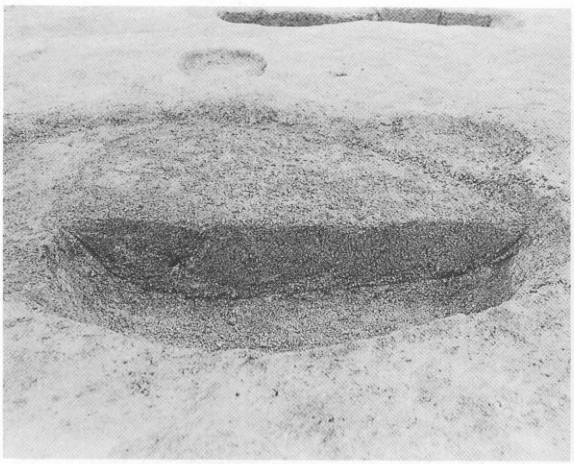


13SA020掘り方g

13SA020掘り方h

13SA020掘り方i

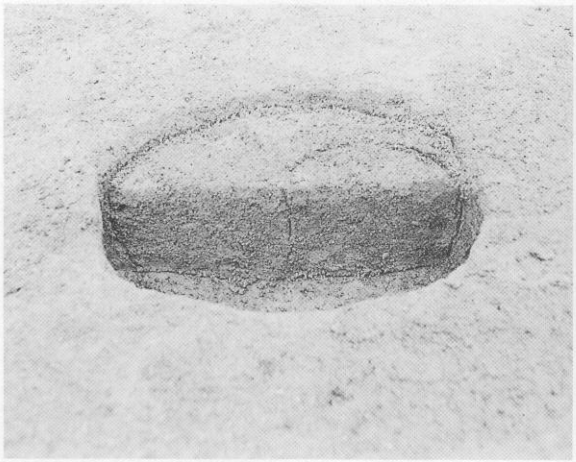
13SA010掘り方a



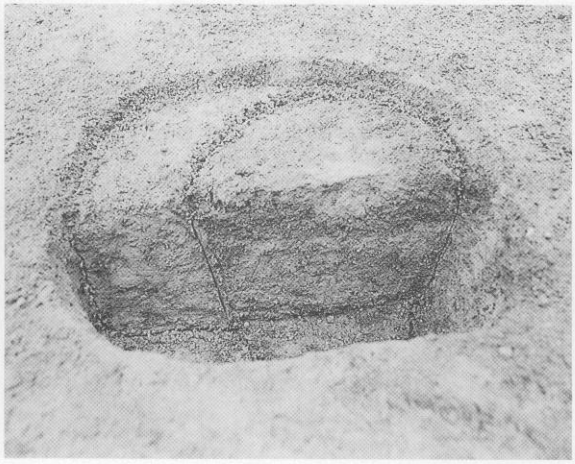
13SA010掘り方b

13SA010掘り方d

柱掘り方土層観察



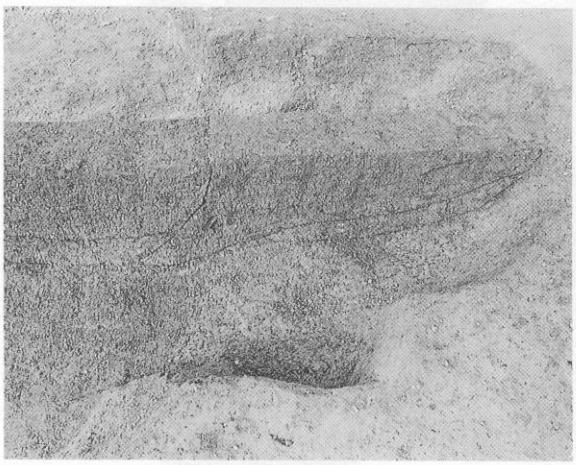
13SA015掘り方b



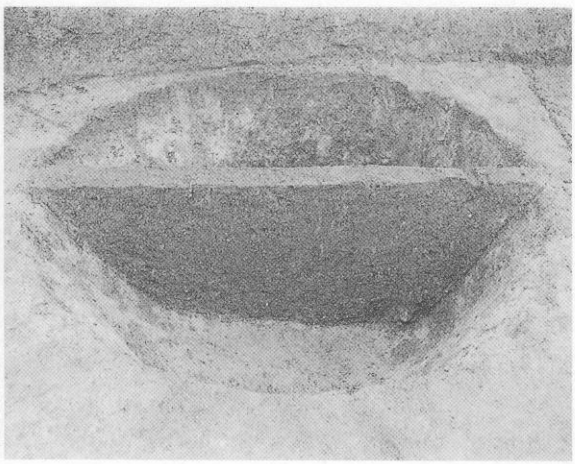
13SA015掘り方c

13SK005

13SK007



13SK012



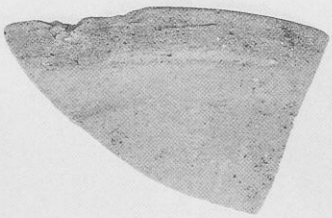
13SK011

柱掘り方及び土壙の土層観察

Pla.24

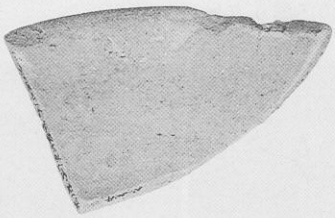
13SB001

4



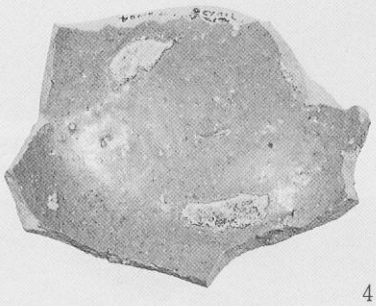
2

1



3

表土



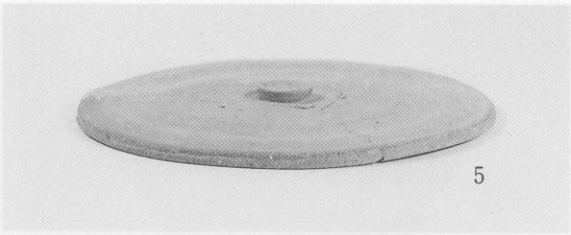
4

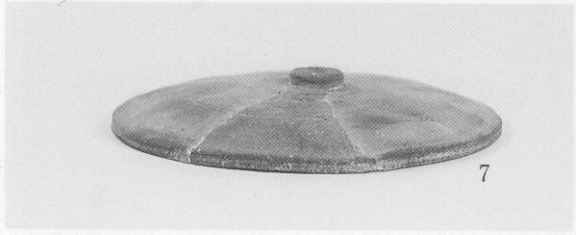
13SA010

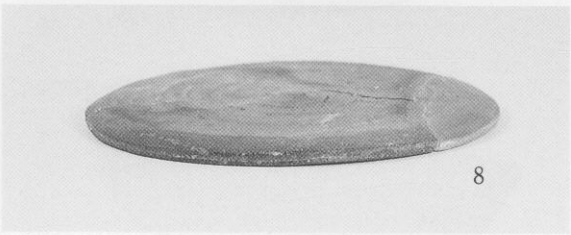
3

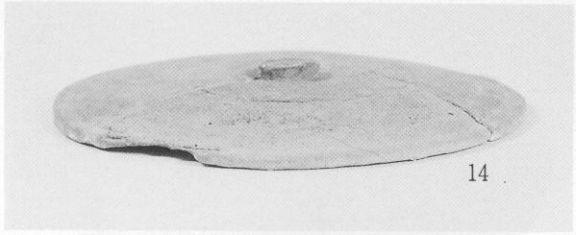
第13次調査出土遺物

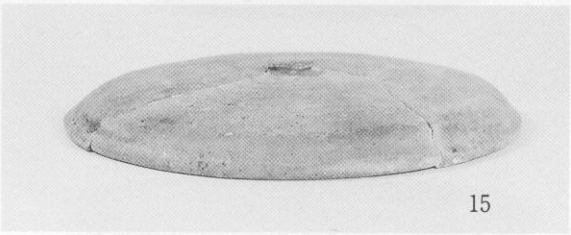
1

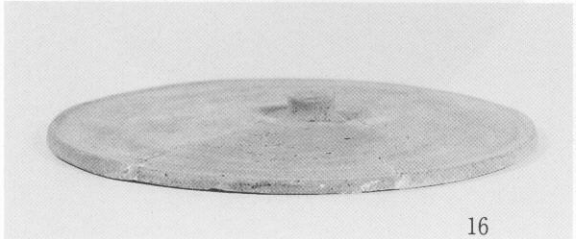

5

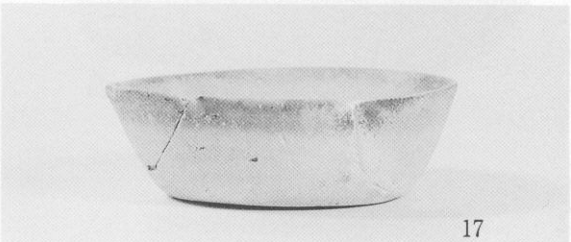

7


8


14


15

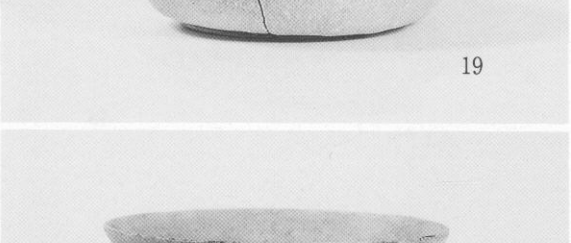

16


17

18

19

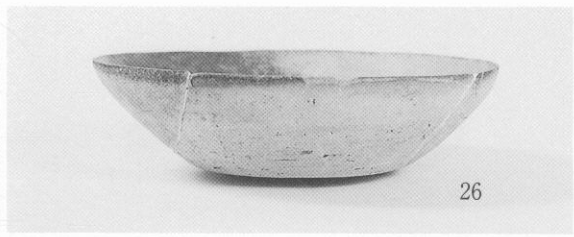
20

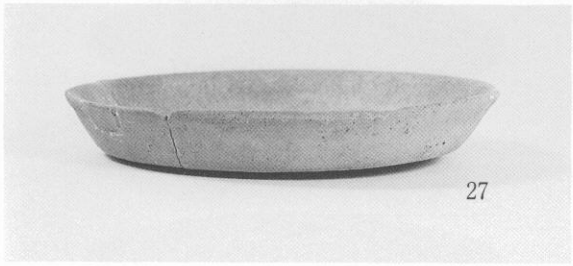

23

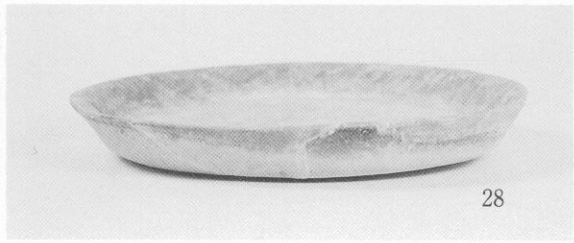
第13次調査暗茶色土層出土遺物

Pla.26

25


26


27

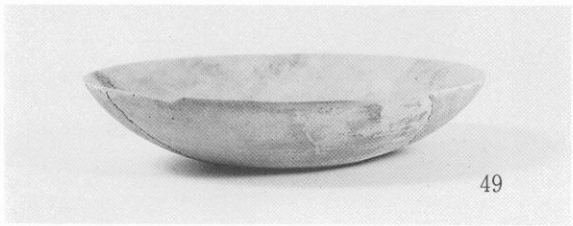

28

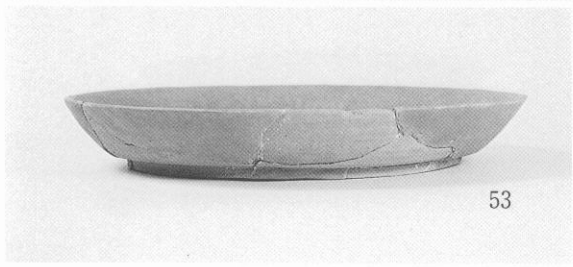
29

38

44

52


49

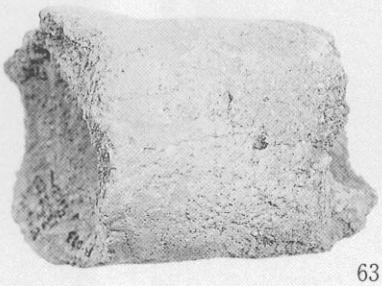

53

55

第13次調査暗茶色土層出土遺物

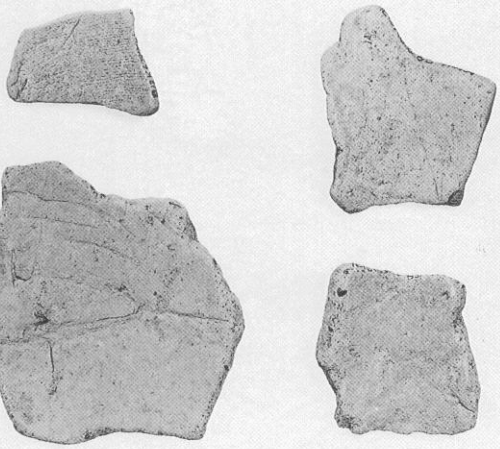
暗茶色土層

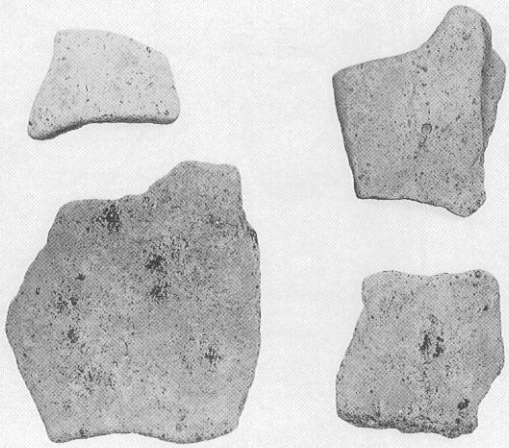
64



63

13 SK 055

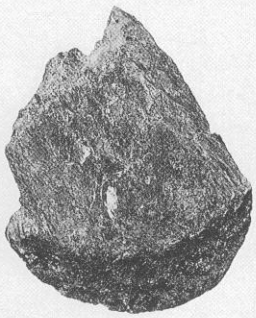




13 SE 008

茶色砂層

4



第13次調査出土土製品・石製品

Pla.28

第17次調査全景（西半部・上が北）

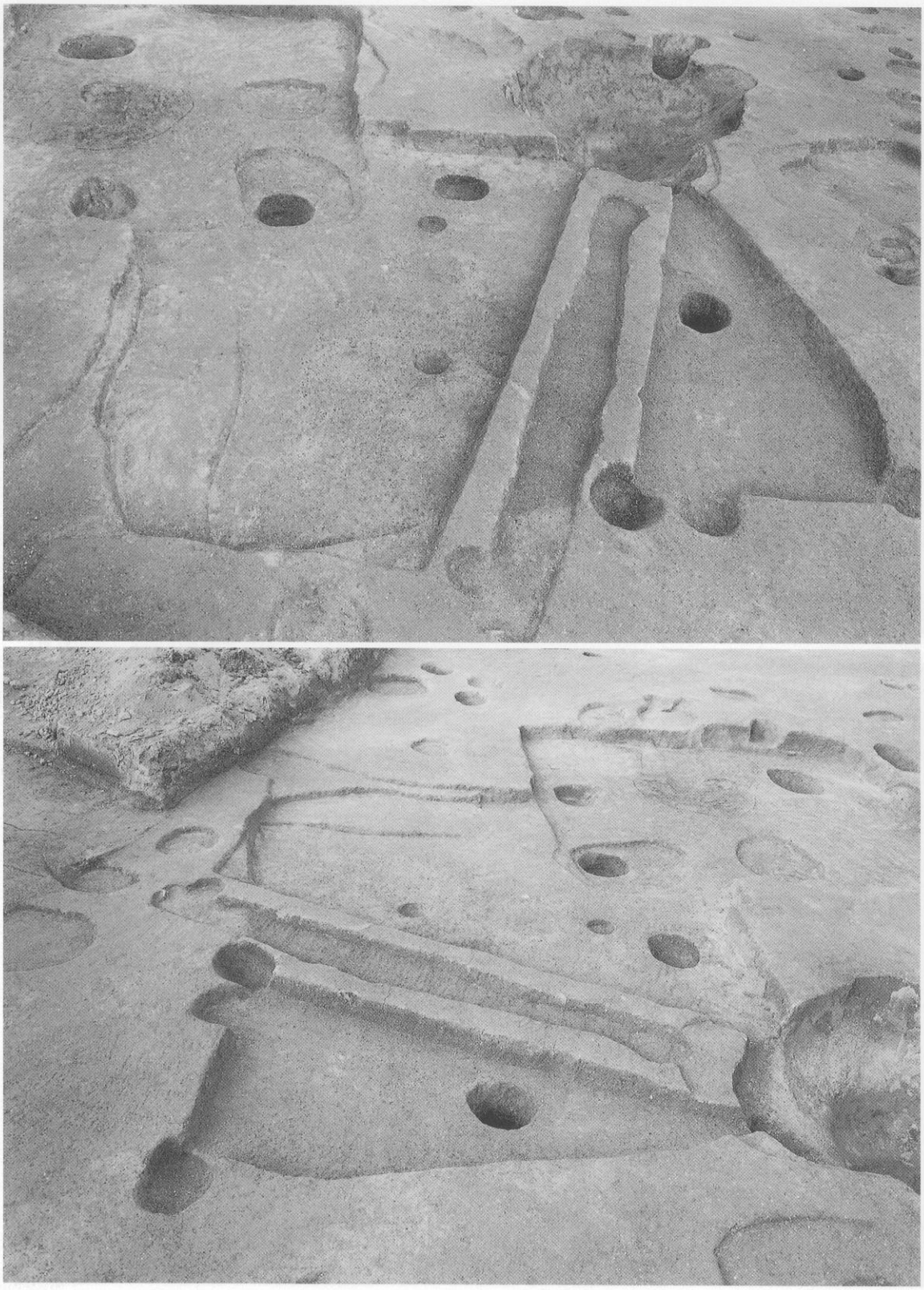
第17次調査全景（東半部・上が北）

第17次調査住居跡群ほか（上が北）

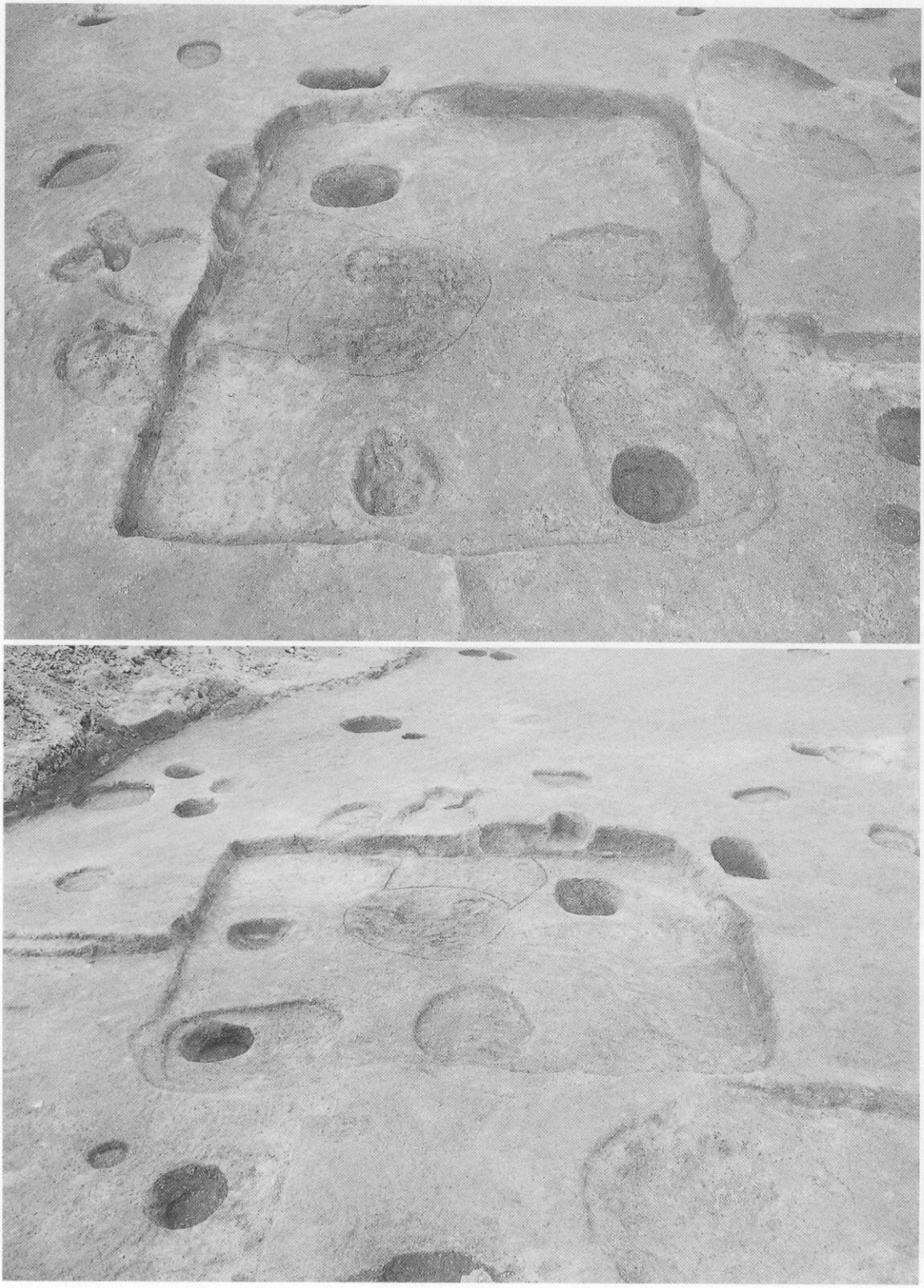
第17次調査住居跡（空中写真）

第17次調査墳墓群（空中写真）

Pla.32

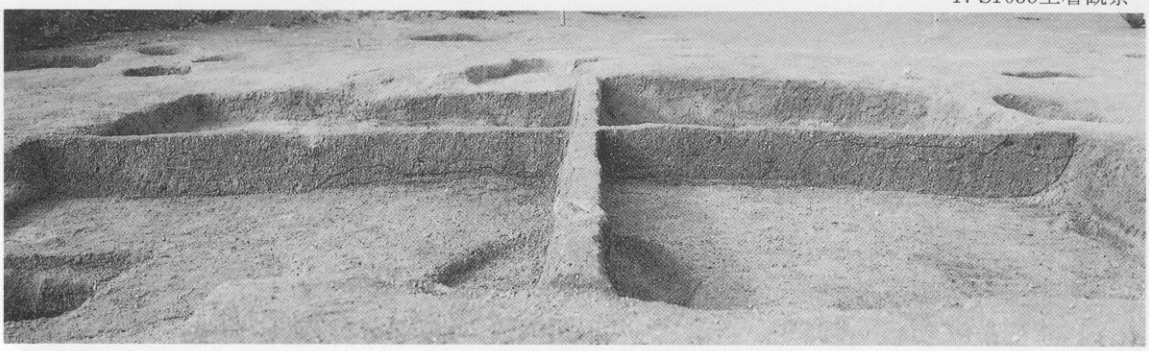


17 SI025住居跡



17 SI035住居跡

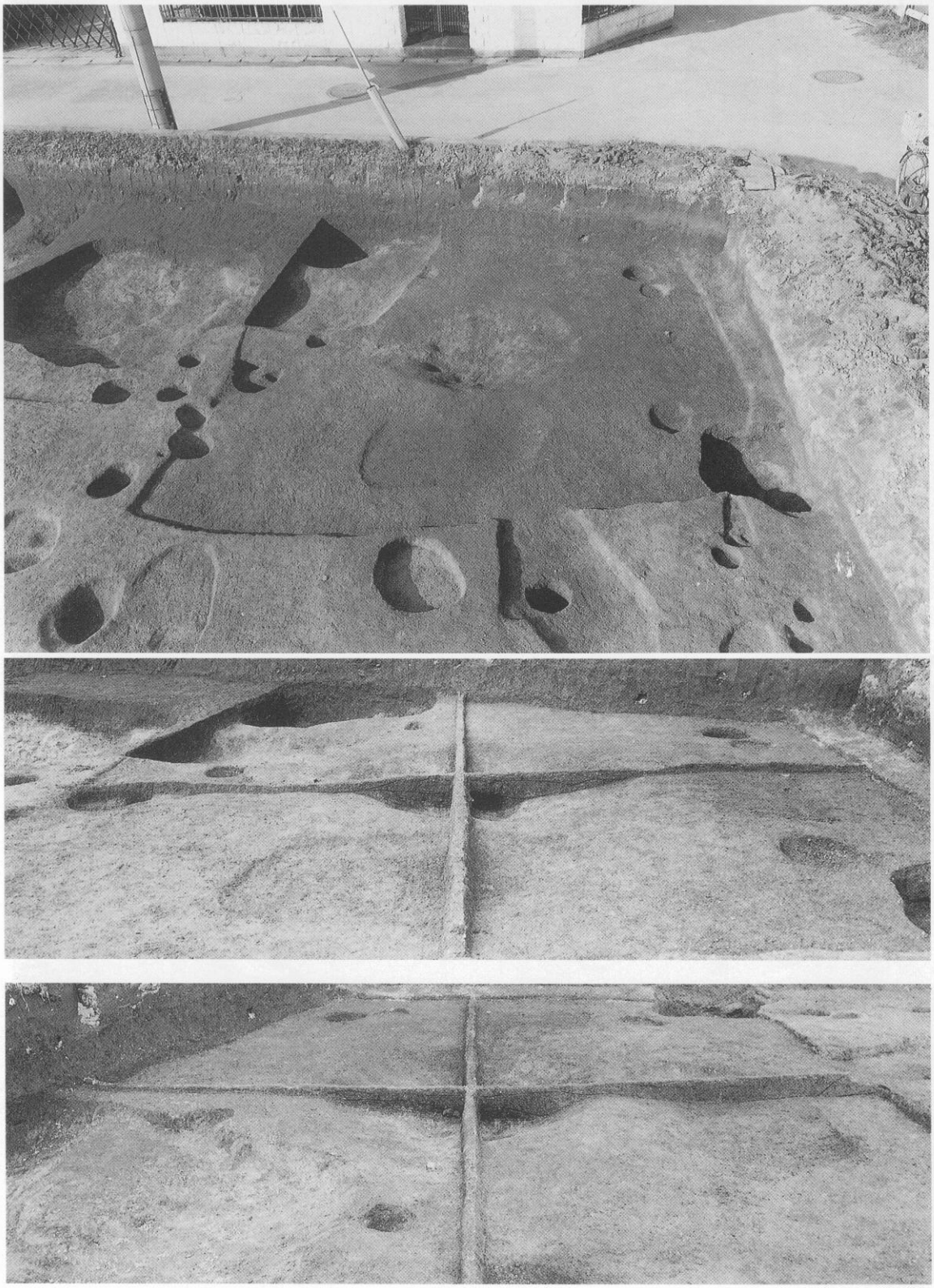
17 SI035土層観察



17 SI035土層観察

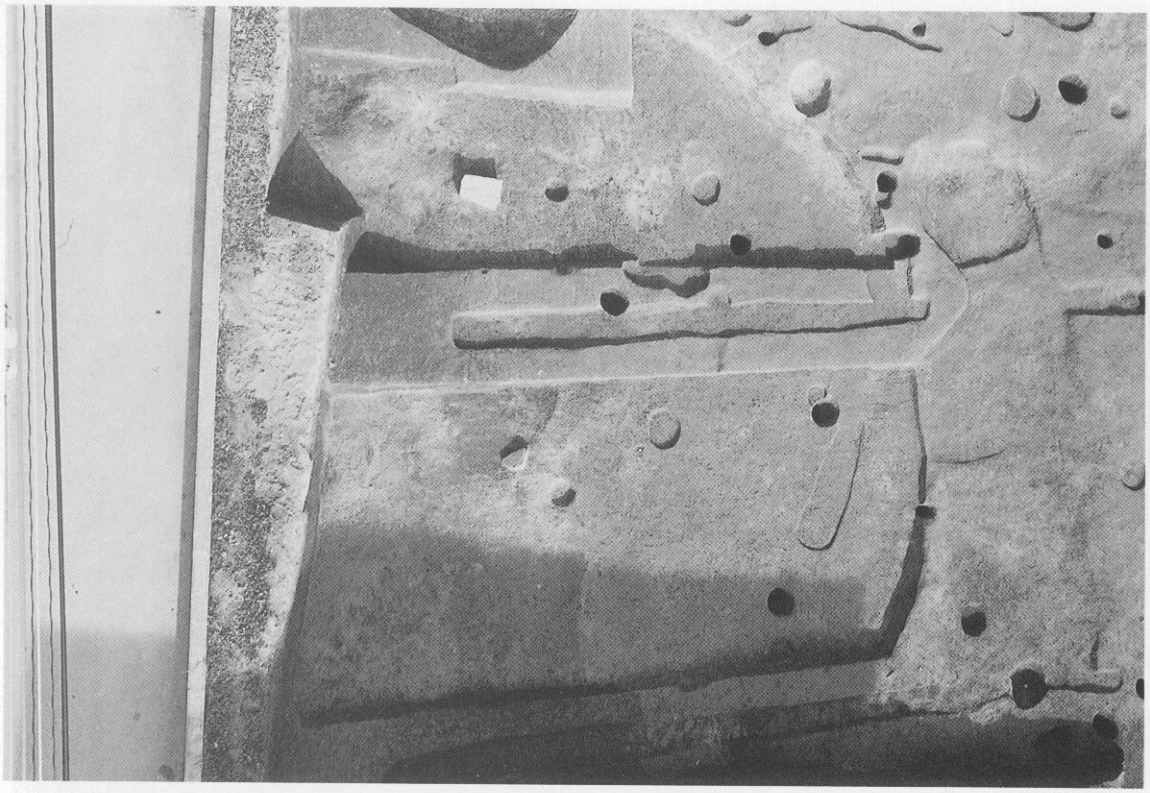
17 SI035土層観察

17 SI025土層観察

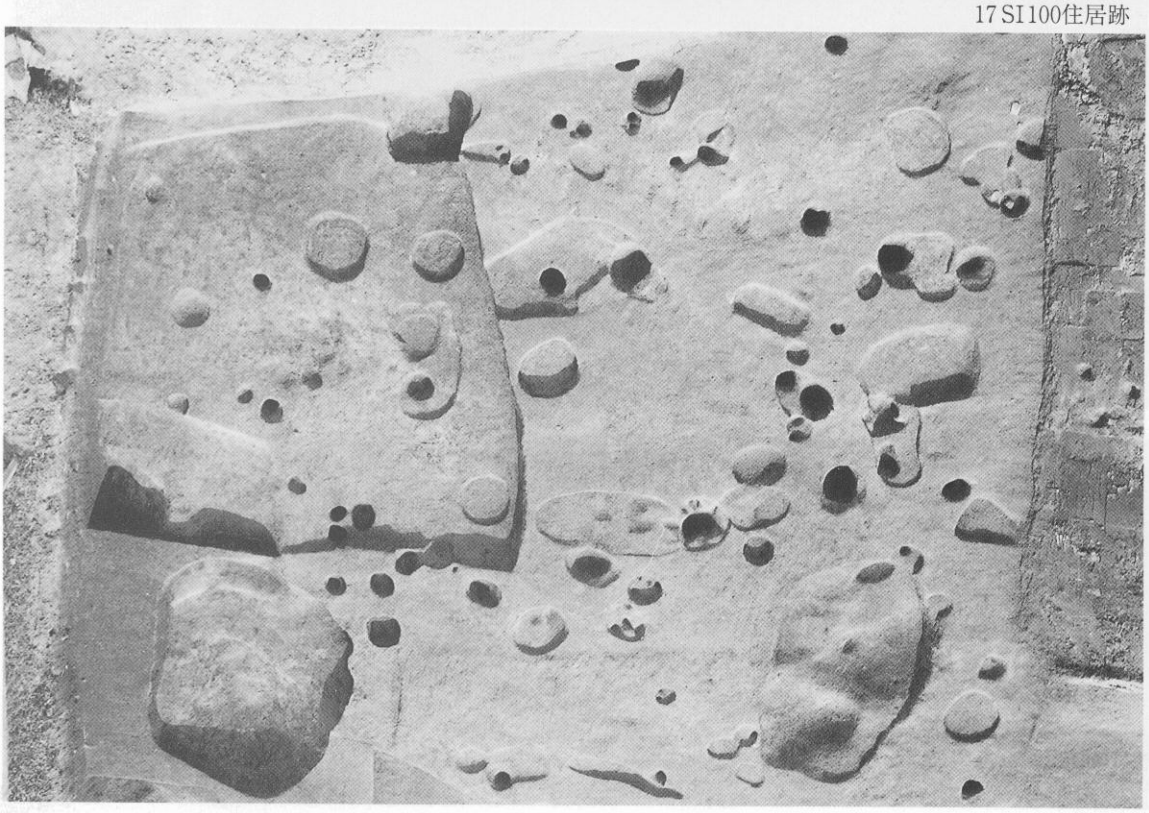


17 SI090住居跡

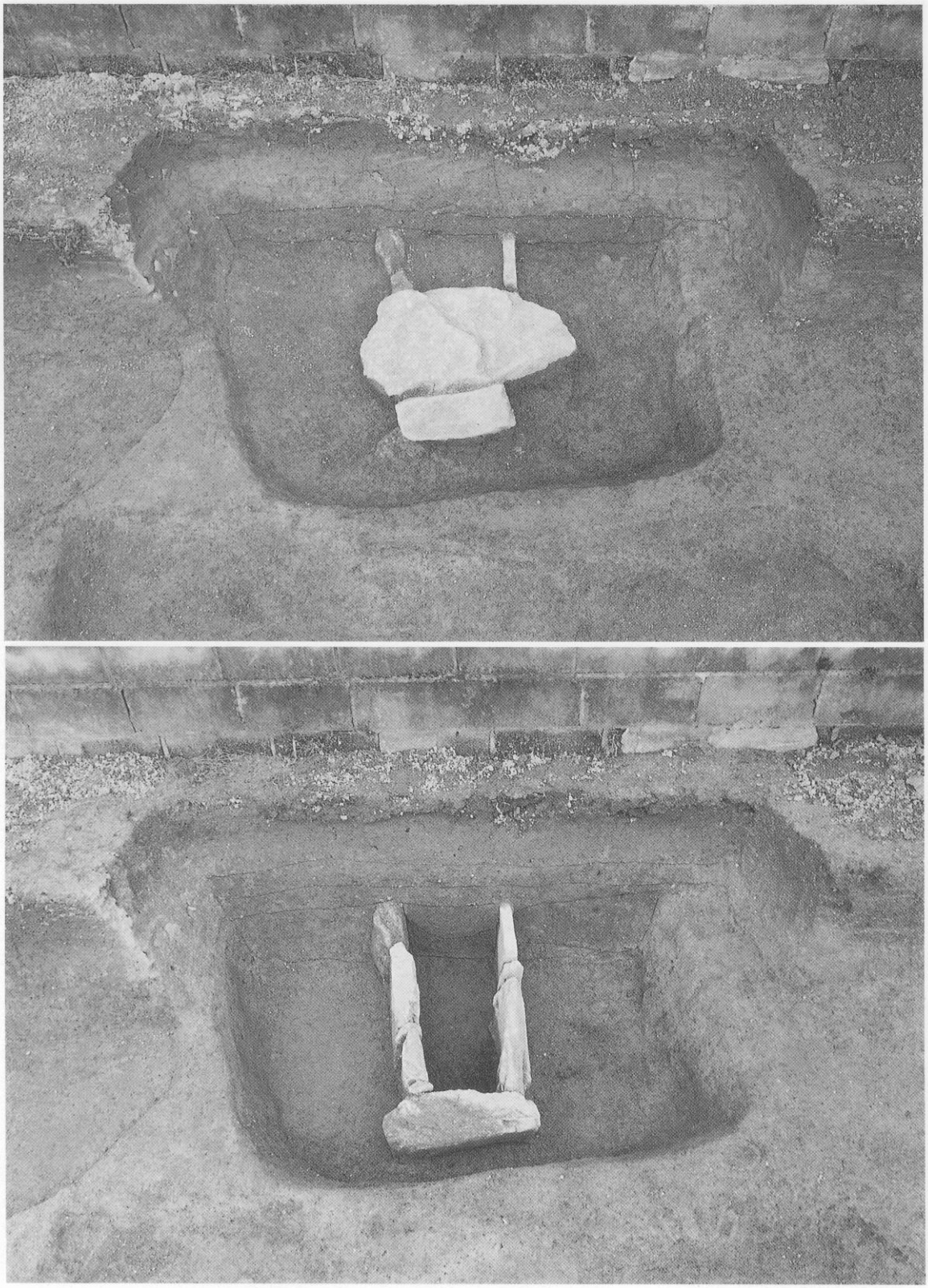
Pla.36



17SI100住居跡

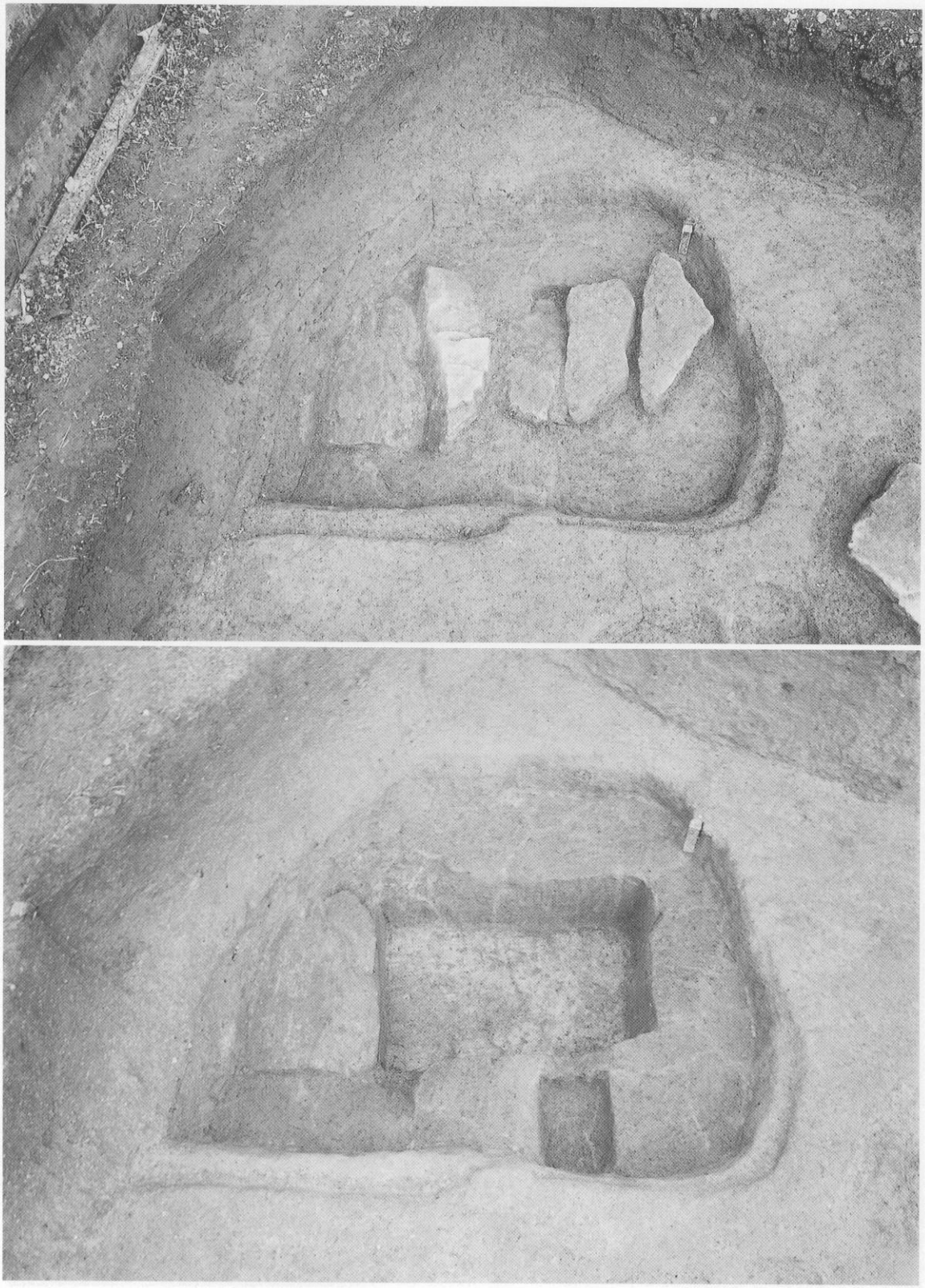


17SI110住居跡



17ST011箱式石棺

Pla.38

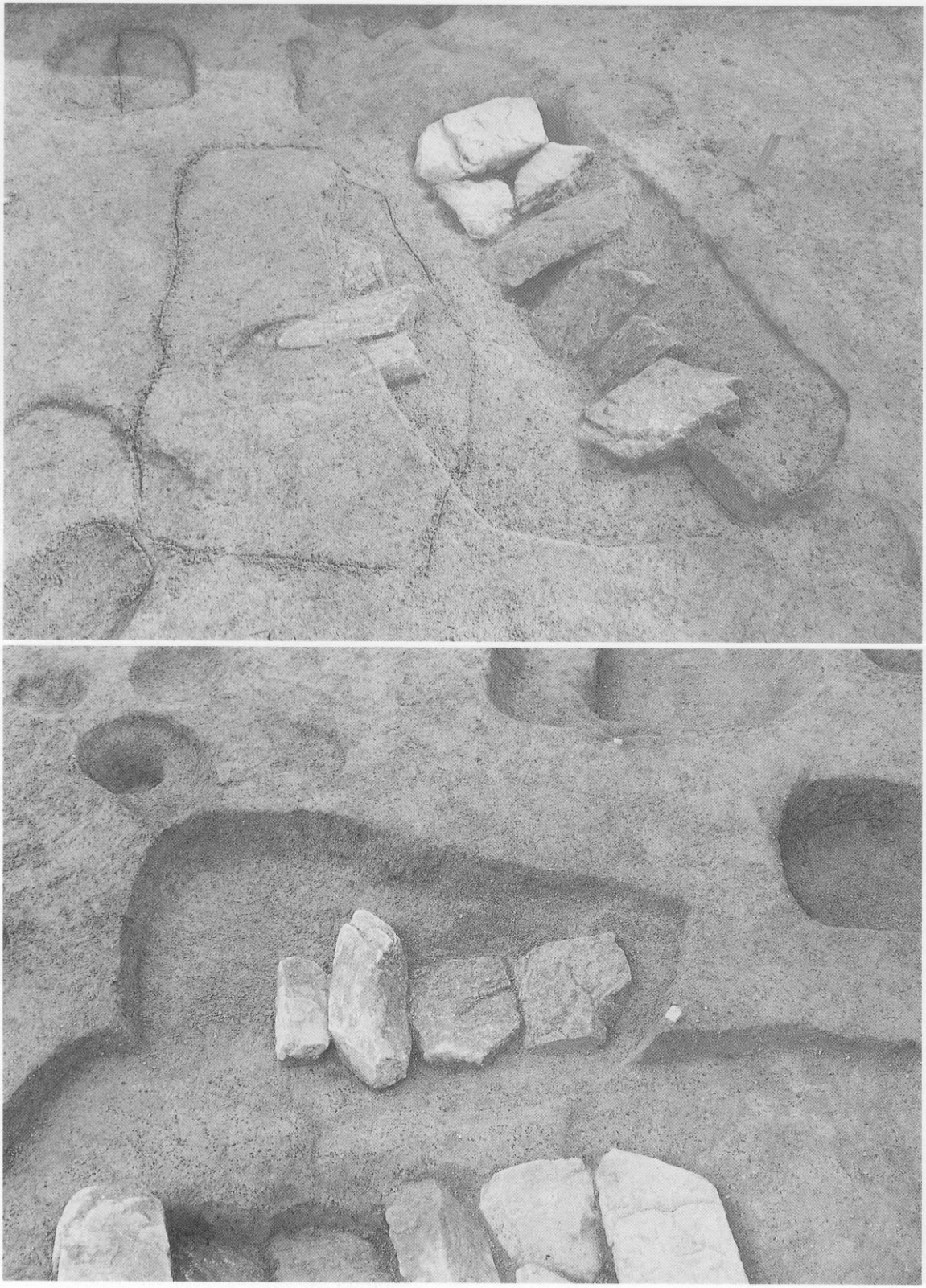


17ST002石蓋土壙墓

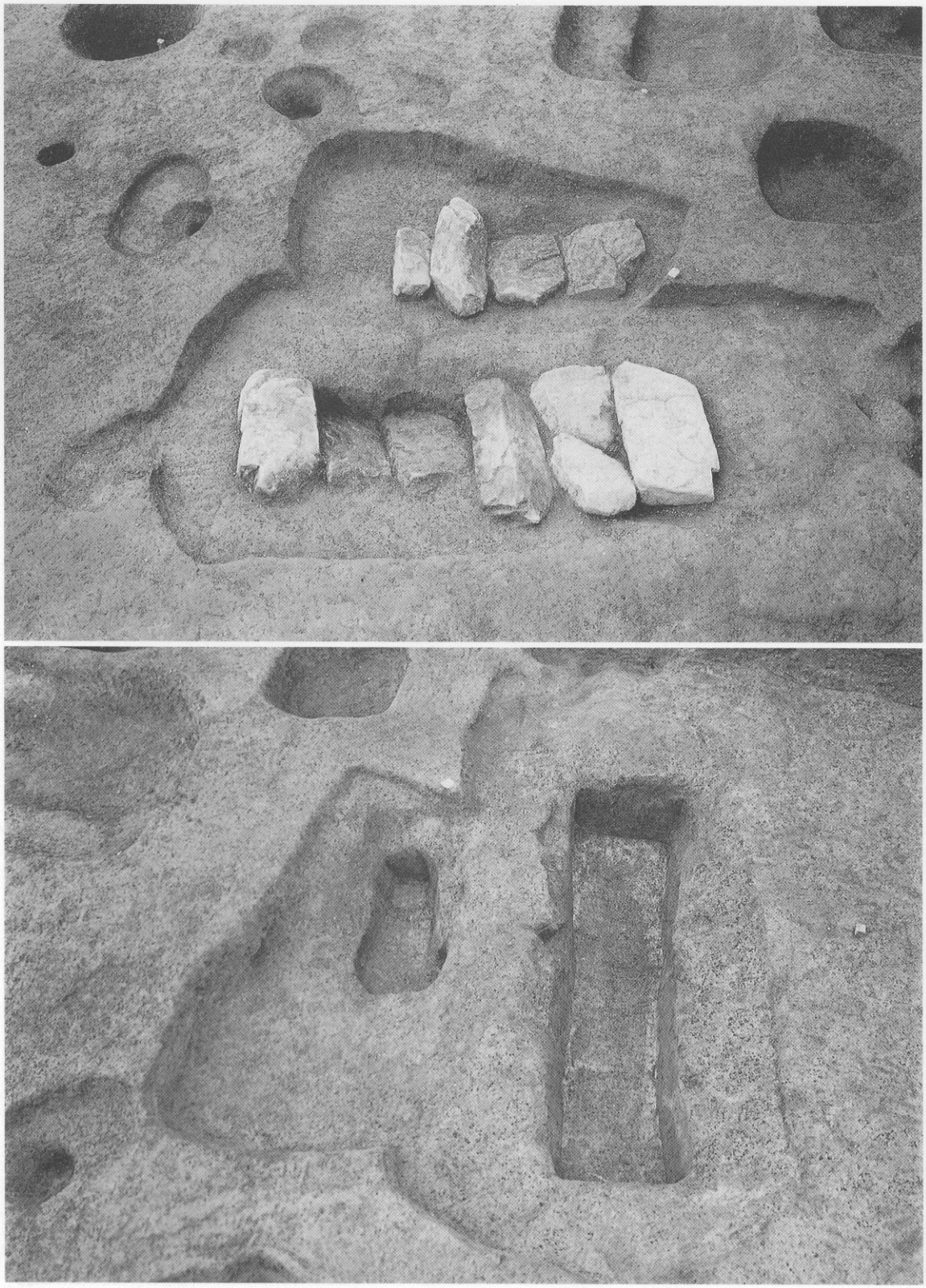
17ST003石蓋土壙墓

Pla.40

17ST004石蓋土壙墓



17ST006·071石蓋土壙墓



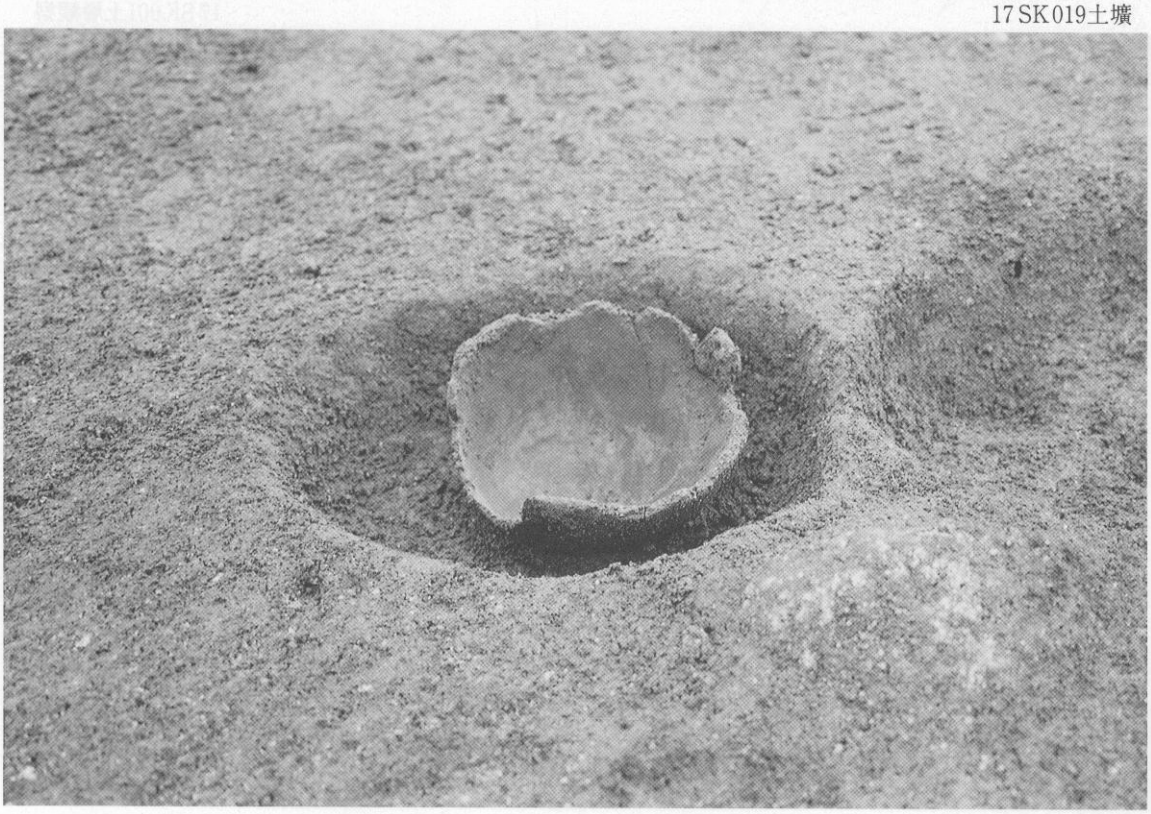
17ST006·071石蓋土壙墓

17ST039石蓋土壙墓

Pla.44

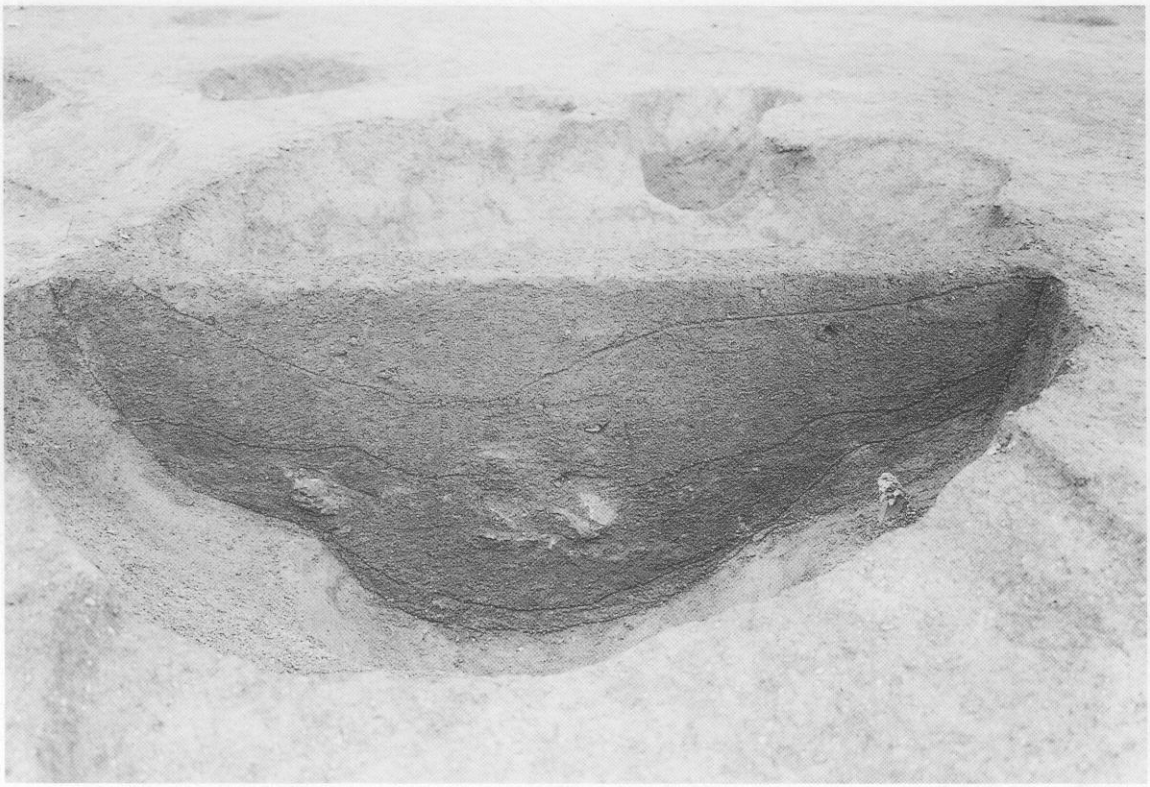
17ST009木棺墓

17SK019土壙



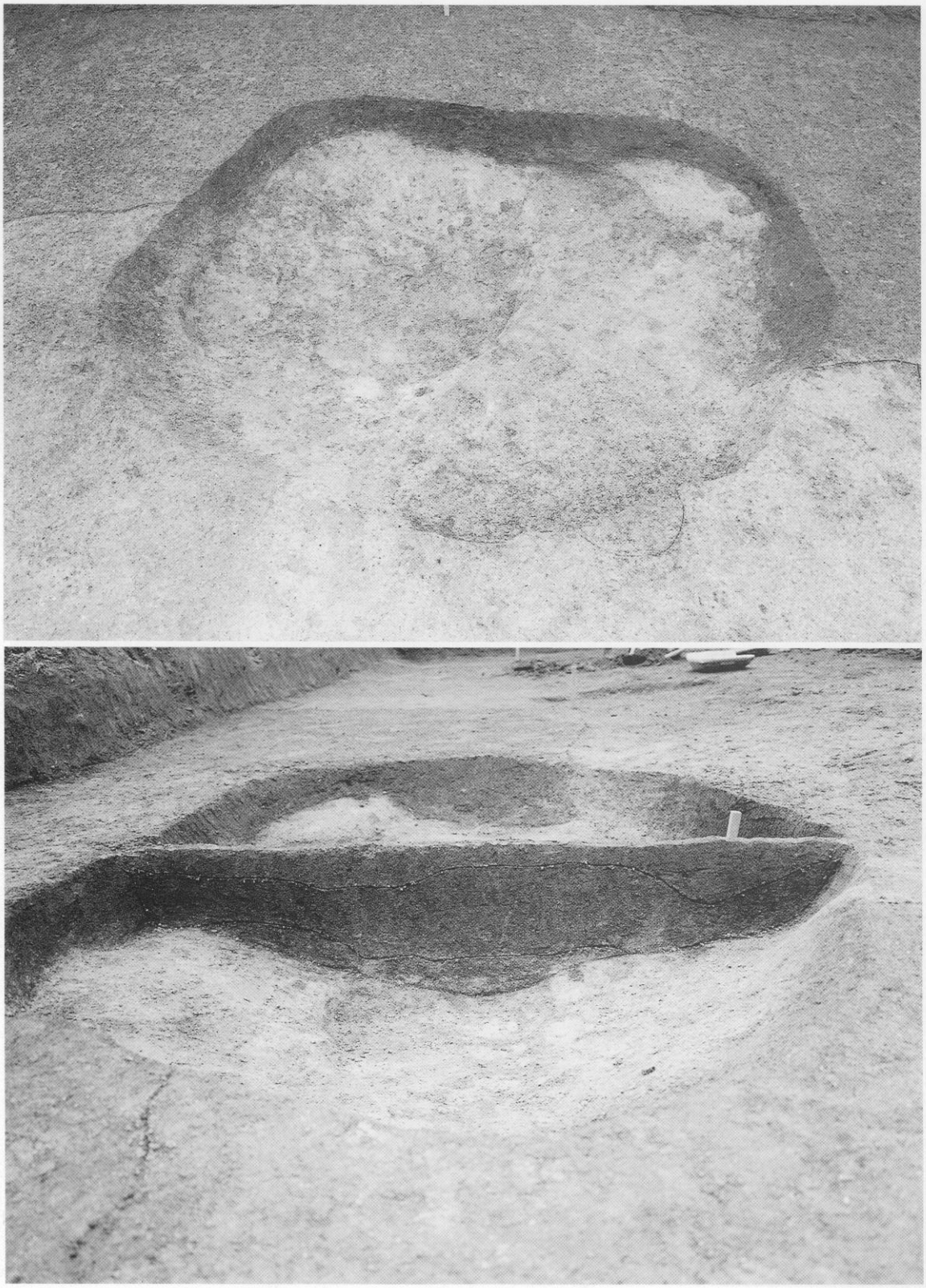
17SX072土器埋納遺構

Pla.46



17SK001土層観察

17SK005土層観察



17 SK080土壙

回廊状遺構（東から）

回廊状遺構（西から）

Pla.50

17SI035

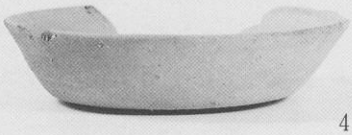
14

17SX072

4

17SK095

6



4

17SK019

9

17ST009

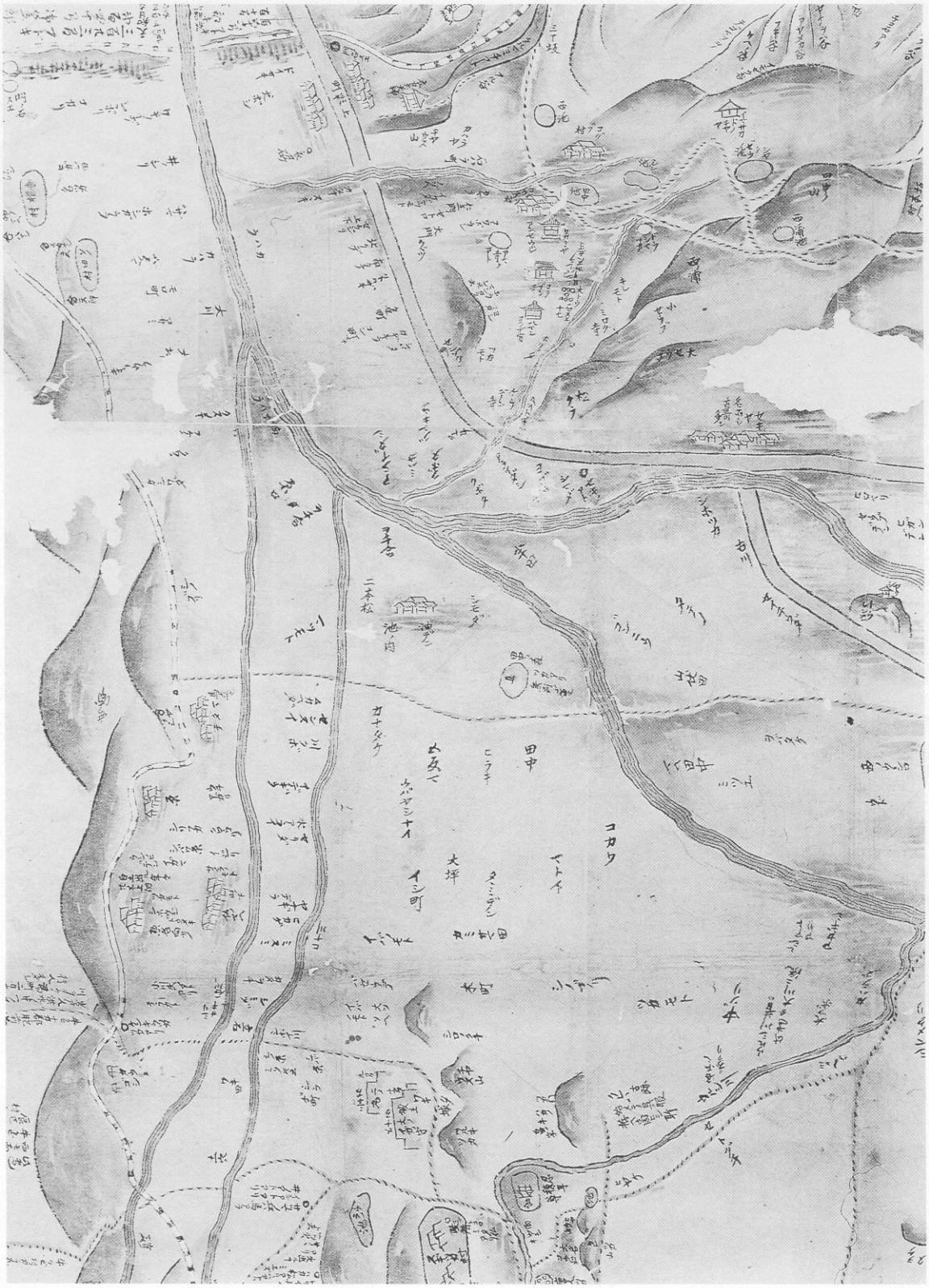
2

1

第17次調査出土遺物

太宰府旧蹟全図　北図（木村明敏氏蔵）

Pla.52



太宰府旧蹟全図部分（上左：水城、上中央：国分寺）

太宰府旧蹟全図北図の国分寺周辺

太宰府市の文化財　第25集

筑前国分尼寺跡Ⅲ

―― 第4・8・9・13・17次調査 ――

平成7年3月

編　集　　太宰府市教育委員会
発　行　　太宰府市観世音寺1-1-1

印　刷　　大道印刷株式会社
春日市日の出町6-23

Y-46,000.0

X57,500.0

X57,470.0

X57,430.0

13次

8次

17次

4次

9次

0 20m

『筑前国分尼寺跡Ⅲ』(太宰府市の文化財第25集)付図

Fig.75 筑前国分尼寺跡遺構配置図(1:250)